Ⅲ　作家略歴　う、え、お

う

植木金矢（うえき・きんや/1921～2019 年）
山形県生れ。1950年で挿絵画家としてデビュー。53年少年誌『痛快ブック』に、映画で鞍馬天狗を演じた嵐寛寿郎をモデルにした劇画「風雲鞍馬秘帖」を連載。チャンバラをリアルに描き人気となり、連載を抱え売れっ子。79年映画監督五社英雄原作で、女性が主人公の「十手舞」を週刊誌に連載し、五社さんが映画化した。2019年没、97歳。漫画、挿絵

植木　茂（うえき・しげる/1913～1984 年）
札幌市生れ。1935年自由美術家協会展に出品。50年モダンアート協会の創立に参加。戦中は合成樹脂で彫刻を行う。戦後、木彫の抽象彫刻を制作。晩年、モビール、アッサンブラージュも制作した。大阪で没、71歳。（出典　わ眼）彫刻、モビール

植木　力（うえき・つとむ/1913～2003 年）
東京生れ。東京美術学校卒。一陽会創立会員。二科会会員。日本陶彫会会長。文化庁買い上げ。外遊。個展多数。2003年没、90歳。陶彫、水彩、日本陶彫会会長

上島一司（うえしま・かずし/1920～1994 年）
高知県生れ。1941年寺内萬治郎に師事。44年東京美術学校卒。47年日展入選、49年特選、51年出品委嘱、75年改組日展審査員、76年会員、80年評議員、78年日洋展創立運営委員、87年常任委員。51年東京学芸大学助教授。67年奈良教育大学教授。78年大学美術教育会副理事長。洋画、美教

上島鳳山（うえしま・ほうざん/1875～1920 年）
岡山県生れ。大阪に移り、円山派の木村貫山や西山完瑛、渡辺祥益に師事した。美人画を得意とした。名は寿治郎。画号は鳳山、画房を鳳鳴画室と称した。1920年没、45歳。日本画

上杉和子（うえすぎ・かずこ/生誕年不詳～　）
神戸市生れ。武蔵野美術短期大学油絵科卒。1991年春陽会展で入選（絵画）。92、2000年春陽会展に出品（絵画）。02～17年陽会展（銅版画）を出品。神戸、東京で個展開催、グループ展にも出品。07年ルーマニア・コンテンポラリー国際版画ビエンナーレ展に入選。版画

上田宇三郎（うえだ・うさぶろう/1912～1964 年）
福岡市生れ。1929年福岡中学校を退学。日本画家・平川晃生に師事。春と秋は京都平川宅へ、夏と冬は福岡で療養。45年西部美術協会結成に参加。47～53年宇治山哲平、赤星孝、久野大正、山田栄二と「朱貌社」結成。抽象的画風を確立。59年日本表現派の会員。1964年没、52歳。日本画、水墨

上田　薫（うえだ・かおる/1928 年～　）
東京生れ。1954年東京藝術大学油画科卒。56年MGM 映画社ポスター国際コンクールで国際大賞。グラフィック・デザイナーとして活躍しはじめデザイン会社を設立。58年個展（南画廊，東京）。72年ジャパン・アート・フェスティバルでスーパーリアリズム手法作品入選、メキシコ国立近代美術館が買上げ。75年現代日本美術展で東京国立近代美術館賞。76年現代日本美術展で群馬県立近代美術館賞。85～92年茨城大学教授。92～99年山野美容芸術短期大学教授。2003年相模原市民ギャラリーで個展。2019年名古屋画廊で個展。洋画、Ｓリア、デザイン、美教

上田浩司（うえだ・こうじ/1932～2016 年）
盛岡市生れ。岩手高等学校卒。盛岡画廊は1964年医師の高橋又郎によって開廊。69年から盛岡画廊を運営、71年には MORIOKA 第一画廊、88年から MORIOKA 第壱画廊画廊、９０年から２０１２年 MORIOKA 第一画廊名で活動。相笠昌義、オノサト・トシノブ、小野隆夫、百瀬寿、杉本みゆき、松田松雄、吹田文明、木村利三郎、関根伸夫、靉嘔、野田哲也、瑛九らの版画展、舟越保武、桂、直木親子の個展を開催。2016年没、74歳。MORIOKA 第一画廊主

上田眞吾（うえだ・しんご/1901～1994 年）
京都生れ。1924年京都市立絵画専門学校卒。村上華岳に師事。24～28年国画創作協会に出品、入選。28～31年同会の若手の作家たちが結成した「新樹社」に参加。65～88年岡本宇太郎、井上通世らと京都で「玉樹会」を結成。写実的作風から空想的作品へ。1994年没、93歳。日本画

上田清一（うえだ・せいいち/1902～1995 年）
神戸市生れ。報徳実業学校卒。古河電気工業に勤務。画家を志し、林重義に師事。1931年独立展入選、35年独立展で Ｄ 賞、のち会友。38年国展入選、43年国画会友。44年国展で国画奨学賞。53年国画会会員。48年報徳学院園、大阪星光学園で講師。神戸洋画会、神戸美術家連盟の設立、発展に寄与。78年神戸市文化賞。95年没、93歳。洋画、美教

上田忠敏（うえだ・ただとし/1910～2005 年）
大分県生れ。1929年大分県師範学校本科第二部

卒。大分県長洲小学校、宇佐小学校に勤務、35年大分県師範学校訓導。34年西田武雄のエッチング講習会に参加。35～41年「九州版画」に作品出品掲載。大分県内の小学校長や大分県指導主事、四日市中学校長などを歴任、73年大分大学教育学部附属中学校総務を最後に退官。大分エッチング協会会員、大潮会会員、大分県水彩画協会会員、大分県美術協会名誉会員。2005年没、95歳。版画、水彩、美教

上田哲農（うえだ・てつのう/1911～1970 年）
中国天津市生れ。1920年青山学院卒。33年文化学院美術部卒。46年水彩連盟で水彩連盟賞、同会会員。50年一水会展で一水会賞、51年一水会会員、68年一水会委員。51年日展で特選、64年日展会員。蒼鞜会会員。日本山岳会会員。登山家でもあった。1970年没、59歳。水彩

上田直次（うえだ・なおじ/1880～1953 年）
広島県生れ。父は宮大工。27歳で上京し、木彫を山崎朝雲に、塑像を朝倉文夫に学び、文展、帝展に出品。帝展、文展で無鑑査。1936年ドイツ人フォン・ウエグマンに認められ、独仏に紹介された。晩年は殆んど中央の美術展に出品せず、仏像の制作に励み、また広島県美術展の彫刻部発展に尽力した。広島県で没、73歳。彫刻

上田久之（うえだ・ひさゆき/1907～1982 年）
山口県生れ。1933年東京美術学校卒。和田英作に師事。千葉県に住む。第一美術会長/文部大臣奨励賞/創芸賞。日動画廊で個展。小磯良平のようなタッチとデッサン力で制作。1982年没、75歳。洋画

上田弘明（うえだ・ひろあき/1928～1979 年）
奈良市生れ。46年京都市立美術専門学校日本学科入学、47年彫刻科へ転じ、52年卒。55年日本美術院院友。57年京都市美術展で市長賞、同展で須田賞、審査員。60年洋画家、彫刻家、評論家からなる ZERO の会の結成に参加、毎年作品を発表。75年京都市立芸術大学教授。73年「花と彫刻展」(大阪エキスポランド)、74年神戸須磨離宮公園現代彫刻展に出品。一貫して石彫を続け、花崗岩による作品を残す。80年京都市美術館で遺作展開催、82年『上田弘明の石彫』が刊行。1979年没、51歳。彫刻、美教

上田泰江（うえだ・やすえ/1930 年～ ）
京都府生れ。染色を手掛け、1965～91年日展などで活躍、美の概念の違いを知り、 絵画に転向。82年鳥取市文化賞受賞、99年NHK「土曜 美の朝」出演。2014年個展(蔵丘洞画廊.'15.'16.'17)、15年アートフェア東京 2015。染色、洋画

上野斌郎（うえの・あきお/1895～1972 年）
千葉県生れ。17歳の頃、叔父の都鳥英喜宅より関西美術院に通い、都鳥英喜や鹿子木孟郎の指導を受ける。1913年関西美術院のデッサン部門で3等賞。14年大阪三越図案部に入社し、大阪高島屋宣伝部、25年東京の工芸印刷会社に勤務。本郷絵画研究所でデッサンを教える。26年新染同人会を結成し、染色工芸の道を歩みはじめ、光風会や春台美術を中心に戦前、戦後を通して作品を発表し、染色家として名を残した。1972年没、77歳。日本画家・上野泰郎は子供(長男)。染色、洋画、版画、美教

上野明美（うえの・あけみ/1962 年～ ）
京都生れ。1981年京都市立銅駝美術工芸高(美術科)卒。83年嵯峨美術短期大学卒。90、94年日仏現代美術展。96年文化庁新進芸術家留学制度で渡伊、フィレンチェ。2012、17年上野の森絵画大賞展。ギャラリー汲美、ギャラリーゴトウ、アートギャラリー呼友館、ギャラリー・テムスで個展。洋画

上野広一（うえの・こういち/1886～1964 年）
岩手県生れ。1904年盛岡中学校卒、上京。山本芳翠の門に入る。芳翠没後、内務大臣原敬の庇護、後援により07～21年渡仏、パリのアカデミー・ジュリアンに学ぶ。ジャン・ポール・ローランスに師事。21年帰朝。滞仏中、14年のサロンに入選。帰国後は、原敬はもちろん数多くの皇族方や政治家(総理大臣米内光政、伊藤博文ほか)の肖像画を描き、また「壁画」(明治神宮聖徳記念絵画館壁画「条約改正」等)の作品も知られている。1964年没、75歳。洋画、肖像

上野 逸（うえの・しゅう/1939 年～ ）
東京生れ。1964年東京芸術大学絵画科油画専攻卒。71年日本版画協会展・山本鼎賞、国際書籍版画美術展(ライプチッヒ)。76年現代日本版画展(オーストラリア)。84年画文集『噂話・野村家周辺』(形象社)刊行。93、96年エジプト国際版画トリエンナーレ。94年房総の美術―昨日から明日へ(千葉県立美)。95年アジア国際版画展(台北市)。版画

上野省策（うえの・せいさく/1911～1999 年）
新潟県生れ。1933年東京美術学校図画師範科卒、小学校の美術教師。39年国画会展油彩画入選。41～43年新制作派協会展油彩画出品。出版社「草木社」を経営。52年頃には関銅版画研究所に通う。53年「日本銅版画家協会」参加。53年自由美術家協会会

員。61～75年神戸大学教育学部で助教授・教授。『子ども美術館 16 ものをかく』(ポプラ社 1983)、美術教育に関する著書も多い。現存する版画は、1940年代後半と1950年代のエッチング、リトグラフが多い。1999年没、88歳。洋画、版画、美教

上野武則 (うえの・たけのり/1913～1986年)
埼玉県生れ。今井滋に師事。元槐樹社会員。新鋭選抜展に出品。渡欧4回。1986年没、73歳。洋画

上野直昭 (うえの・なおてる/1882～1973年)
神戸市生れ。1908年東京帝国大学文科大学哲学科卒。24～25年欧米留学。その後、京城帝国大学、九州帝国大学で教授。41年大阪市立美術館館長、その後東京美術学校校長、東京国立博物館館長、愛知県立芸術大学学長を歴任。日本の絵巻物や東洋と西洋の美術比較等に造詣が深い。46年帝国学士院会員。59年文化功労者。東京で没、90歳。美術館長、美術学校校長、国立博物館館長、大学長

上野長雄 (うえの・ながお/1904～1974年)
兵庫県生れ。地上社に学ぶ。日本水彩画会展。国画会展に出品。戦後は春陽会展、日本版画協会展に出品。日本版画協会展会員。1974年没、70歳。水彩、版画

上野憲男 (うえの・のりお/1932～2021年)
北海道生れ。1952年自由美術展に出品、59～62年会員。62年現代日本美術展コンクール部門優賞。79年北海道立近代美術館「北海道現代美術展」で優秀賞。98年「UENO-上野憲男作品集」刊行。2005, 8, 13年何必館・京都現代美術館で個展。2021年没、88歳。洋画

上野春香 (うえの・はるか/1896～1978年)
札幌市生れ。鹿児島に転居、師範学校卒後、教職。1917年上京、木村荘八に師事。21年二科展入選。28～30年渡仏、グラン・ショミエール研究所に学ぶ。31年春陽会展に滞欧作特別陳列、32年より春陽会に出品、40年会員。44年戦時特別展無鑑査出品。戦前、戦後を通じ6回ヒマラヤを取材。60年『画集・随筆』を中央公論社刊行。61～64年訪アジア、ヒマラヤを取材、訪欧。77年紺綬褒章。東京で没、82歳。洋画

上野 誠 (うえの・まこと/1909～1980年)
長野市生れ。1929年長野中学校卒。32年東京美術学校図画師範科中退。木版画を始める。ケーテ・コルヴィッツに私淑。37年国展、戦前は国展版画部に出品。41年鹿児島指宿中学教諭。終戦まで教諭として岐阜県・長野県を移転。49年日本版画運動協会創立会員。58年日本版画協会会員、理事。59年ライプツィヒ国際書籍美術版画展で金賞。74～78年美術家平和会議代表委員。松戸市で没、70歳。版画、美教

上野泰郎 (うえの・やすお/1926～2005年)
東京生れ。東京美術学校卒。1948年創造美術展入選。以後も同展や新制作展に出品。69年多摩美大教授。74年創画会結成に参加。96年日本美術家連盟理事長。2005年没、79歳。日本画、版画

上野山清貢 (うえのやま・きよつぐ/1889～1960年)
北海道生れ。1912年太平洋画会研究所で黒田清輝、岡田三郎助に師事。1926、27, 28年帝展で連続特選。槐樹社展で槐樹社賞を3年連続受賞。一線美術会創立委員。東京で没、70歳。(出典 わ眼)洋画、水彩

上原和光 (うえはら・かずみつ/1926～1976年)
東京生れ。成蹊大学に学ぶ。伊藤清水に師事。大調和会会員。白日会展に出品。1976年没、50歳。洋画

上原欽二 (うえはら・きんじ/1915～2001年)
岡崎市生れ。1935年岡崎師範学校本科第一部卒。40年岡崎師範学校専攻科卒、教諭。43年春陽会初入選、53年春陽会会員、46年春陽会賞。84年春陽会理事。84年新文展で岡田賞。71年岡崎女子短期大学教授。73年写実画壇結成に参加、会員。91年刈谷市美術館で個展。2001年没、86歳。洋画、美教

上原欽二 Ⅱ (うえはら・きんじ/1915～2001年)
愛知県生れ。1935 年岡崎師範学校卒。中川一政に師事。43 年第 21 回春陽会展に初入選。第 6 回新文展に初入選。46 年第 23 回春陽会展で春陽賞。53 年春陽会会員、中部春陽会を結成。62 年第 6 回安井賞候補展に出品、8 回展にも出品。65 年国際形象展招待出品。71 年岡崎女子短期大学教授。73 年写実画壇結成に参加。87 年刈谷市美術館で自選展。91 年上原欽二画集刊行。92 年紺綬褒賞。2001 年没、享年 86 歳。(佐)洋画、美教

上原正三 (うえはら・しょうぞう/1906～1994年)
松本市生れ。1924年上京、川端画学校、大森絵画自由研究所に学ぶ。37年帰郷し教員。宮坂勝の三元社に参加。「1930年協会」展、旺玄展に出品。64年国画会会員。84年現代画廊の巡回展に参加。長野県美術展の審査員。信州の美術会に貢献。94年没、87歳。洋画、美教

上原 卓 (うえはら・たく/1926～1986年)
京都生れ。京都市立美術工芸学校を経て、1948年

京都市立美術専門学校日本画科卒。49年創造美術展に入選。51年創造美術が新制作派協会と合流して新制作協会日本画部となって同会に出品、その後創画会展に出品。54年新制作展で新作家賞。58、59、60年新作家賞。61年同会会員。66年現代日本美術展で優秀賞。70年京都市立芸術大学助教授、75年同教授。京都で没、60歳。日本画

上前智祐（うえまえ・ちゆう/1920～2018年）
京都府生れ。独学で絵を学ぶ。1947年二紀展入選、黒田重太郎に師事。53年吉原治良に師事。新しい絵画、厚塗り非具象。54年具体美術協会結成に参加、解散まで出品。54～70年モダンアート展に出品。66年グタイピナコテカ、日本画廊、養清堂画廊で個展。77年“縫い”と題するファイバーワーク。80年版画制作。82、83年大阪府立現代美術センターで個展。2005年福岡市美術館で上前智祐と具体美術協会展。2018年没、98歳。洋画、版画、具体

植松奎二（うえまつ・けいじ/1947 年～　）
神戸市生れ。兵庫県立御影高等学校、神戸大学教育学部美術科卒。1969年京都で個展。渡独、デュッセルドルフに居住。88年ヴェネティア・ビエンナーレ日本代表。国際的な活躍。70年代の観念的な作品群から、近年とみに増えた国内外における野外彫刻の設置にいたるまで旺盛な創作活動に一貫するものは、木、石、布、金属といった素材を時として、多彩に配置し、空間の異化を生み出すことで人間の知覚の背後に潜む普遍的な力-重力や磁場-作品を通して確認させようとする試み。2013年、『截接―軸・経度・緯度』で中原悌二郎賞。彫刻

上村淳之（うえむら・あつし/1933 年～　）
京都生れ。父は上村松篁。1959年京都市立美術大学）専攻科修了。80年創画会賞。81年創画会会員。84年京都市立芸術大学教授。94年松伯美術館館長。95年日本芸術院賞。99～2004年京都市立芸術大学副学長。02年日本芸術院会員。05年全日本学士会アカデミア賞受賞。創画会理事長。13年文化功労者。日本画、美教、美術館長

上村松園（うえむら・しょうえん/1875～1949 年）
京都生れ。本名、津禰(つね)。14歳の時、京都府画学校入学。鈴木松年に師事。その後、竹内栖鳳に師事し、四条派の伝統に近代的感覚を加えた画風を確立した。1941年芸術院会員、44年帝室技芸員、48年女性初の文化勲章受章。作「長夜」「月かげ」など。奈良県で没、75歳。日本画、版画

上村松篁（うえむら・しょうこう/1902～2001年）
京都生れ。母は日本画家・上村松園。1921年京都市立絵画専門学校本科に入学し、30年同校研究科卒、京都市立美術工芸学校講師、36年京都市立絵画専門学校助教授。48年日展山本丘人らと「創造美術」を結成。49年京都市立美術専門学校教授。67年日本芸術院賞。84年文化勲章受章。2001年没、99歳。日本画、版画、美教

植村鷹千代（うえむら・たかちよ/1911～1998年）
奈良県生れ。1932年大阪外語学校仏文科卒。日本外事協会、南方古美術の研究、39年より評論活動開始、美術評論の草分け。43～45年同盟通信社勤務。47年モダンアートの幅広い結束を求めて結成された日本アヴァンギャルド美術家クラブ代表員。49年『アトリエ』には「レアリテとリアリズム」を掲載し、“リアリズム論争”に加わり前衛美術擁護の論陣を張った。65年日本大学芸術学部講師。71年美術愛好会サロン・デ・ボザール会長。77年紫綬褒章。82～92年文化勲章・文化功労者選考委員。主要著書に『現代美の構想』(生活社)、『現代絵画の感覚』(新人社)、『幻想四季』また翻訳に、ドラクロワ『芸術論』(創元社)、ハーバード・リード『芸術と環境』(梁塵社)、東京で没、86歳。(引用　東文研)美評(美術評論の草分け、前衛美術擁護)、美術研究所、著

上村次敏（うえむら・つぐとし/1934～1998 年）
福岡県生れ。1953年宮崎県立宮崎大宮高校卒、56年上京し美術研究所に通い、1956年武蔵野美術学校入学。在学中に第3回シェル美術賞。「二紀展」出品。卒業後は大手百貨店に就職し、展覧会の企画運営。退職後は、画廊での個展などを中心に精力的に活動。1998年没、65歳。洋画

上村昌訓（うえむら・まさのり・しょうくん/1865～1925 年）
高知県生れ。1880年に上京、彰技堂で楠永直枝とともに本多錦吉郎の指導を受けた。87年帰郷、高知県尋常中学校の図画、地理助教諭。楠永直枝とともに土陽美術会高知支部会員。小学生用の図画教育を著している。小学生だった石川寅治を個人的に指導した。1925年没、61歳。洋画、美教

上村亮太（うえむら・りょうた/1959 年～　）
神戸市生れ。武蔵野美術大学卒。1997年 VOCA 展、現代美術選抜展(海文堂ギャラリー)出品。2000年「震災と美術」展(兵庫県立美術館)。04年日本美術の新しい展望展(森美術館)。09、10、11年ギャラリー島田で個展。洋画

上山鳥城男（うえやま・ときお/1889～1954 年）
和歌山県生れ。明治39年移民、渡米。シスコの美術学校に学ぶ。1914年カリフォルニア大卒、19年ペンシルバニア美術アカデミー卒。～20年渡欧。11年幸徳死影、宮崎与徳と日本人美術家団体、赫土社創立。第二次世界大戦中マンザナー収容所。1954年没、65歳。洋画

魚津良吉（うおづ・りょうきち/1907～1968 年）
名古屋市生れ。鈴木不知の洋画研究所に学ぶ。上京し森田恒友に師事。春陽会展入選・会員。1968年歿、61歳。愛知県美術館作品収蔵。洋画

鵜川五郎（うかわ・ごろう/1919～2008年）
岩手県生れ。1950年北海道に移住。51年に函館市近郊の大野町に居を構えて以来、生涯、同地において活動を続けた。死や病といった実存的なテーマを一貫して描き続け、近年では、失われ行く自然や都市文明の退廃など、反戦や社会批判の絵を数多く描いた。2004年函館美術館で回顧展開催。2008年没、88歳。洋画

浮田一蕙（うきた・いっけい/1795～1859年）
京都生れ。名は公信、後に可為。字は士師、号は一蕙の他に為牛、為佛子など。田中訥言に土佐派を学ぶ。安政の大獄で捕縛されるが許され帰京。獄中で病を患い、釈放後に死去した。1859年没、64歳。幕末の大和絵の絵師

浮田克躬（うきた・かつみ/1930～1989年）
東京生まれ。1950年東京美術学校油画科卒。58年一水会展で安井奨励賞、68年一水会会員。58、67年日展で特選。「北の風景」シリーズ。67年初渡欧。68年昭和会賞。86年宮本三郎記念賞。88年日展で内閣総理大臣賞。日展評議員、一水会常任委員、ブラジル芸術協会名誉会員。東京で没、59歳。洋画　50

浮田要三（うきた・ようぞう/1924～2013 年）
大阪生れ。1947年尾崎書房（大阪）入社。48年創刊の児童詩誌『きりん』制作・編集に携わる。55～64年具体美術協会に参加。84年独、デュッセルドルフ具体・AU 展に参加、以後国内外で個展、グループ展多数開く。2008年著書『きりんの絵本』刊行。2013年没、89歳。洋画、具体、童画　50

宇崎純一（うざき・すみかず/1889～1954年）
兵庫県生れ。1902 年府立市岡中学卒業。1909 年親友の田村華陽が主宰する雑誌『白楊』（エミヤ書肆）が創刊され、表紙、カットを手掛ける。大正・昭和 期に大阪の千日前において書店を経営する傍ら、漫画や挿絵、図案などを制作している。宇崎は「大阪の夢二」といわれ、木版の絵葉書、封筒を残している。大阪で没、65歳。漫画、挿絵、図案、表紙、カット

宇佐美圭司（うさみ・けいじ/1940～2012 年）
大阪生れ。1959年上京。63～06年南画廊個展。64年国立近代美術館京都分館「現代美術の動向」展、66年国立近代美術館の「現代美術の新世代」展に出品。66～72年度々渡米（NY）。抽象表現主義～ネオ・ダダ、ホップアートに影響を受ける。68年現代日本美術展で大原美術館賞。抽象、65年頃人型形象。72年ヴェネツィア・ビエンナーレ展に出品。83年美術文化振興協会賞。90年武蔵野美大教授。2000年京都市立芸術大教授。01年巡回個展福井県美、和歌山県近美、三鷹市美術G。02年芸術選奨文部科学大臣賞。福井県で没、72歳。洋画、版画、美教、ネオタダ

鵜沢明民（うざわ・あきと/1946年～　）
静岡県生れ。1970年日本大学芸術学部美術学科油彩卒。田村画廊、コバヤシ画廊等で個展。72年ジャパン・アート・フェスティバル（セントラル美術館、以後アメリカ、メキシコ、アルゼンチン巡回）。描くことの行為そのものに拘り続け、色彩の変化によって多層な平面空間を表現しようとしている。作品集『汎』第3、4集に作品を寄せている。洋画

鵜沢四丁（うざわ・してい/1869～1944年）
千葉県生れ。俳句は秋声会同人、1932年「俳諧」を創刊主宰。連句作者としても名をなした。句集に「四丁句集」、「俳諧修辞学」「洋画鑑賞法」「旅鞄」。大下藤次郎に師事、ヨーロッパで修行、日本水彩画会同人。1944年没74歳。水彩

牛尾　武（うしお・たけし/1955～2012年）
神戸市生れ。1976年神戸芸術学林日本画科卒。日本画家昇外義に師事。76年兵庫県展優秀賞、78年兵庫県日本画家連盟展県知事賞、79年兵庫県日本画家連盟展最優秀賞。85年の上野の森美術館絵画大賞展で特別優秀賞。90年銀座・資生堂ギャラリー個展。91年山種美術館賞展で優秀賞。2004～13年成川美術館で作品を発表。10年世界遺産熊野本宮館、11年南方熊楠顕彰館で風景作品を発表。13年田辺市文化賞。2012年没、57歳。日本画

宇治啓次郎（うじ・けいじろう/生没年不詳）
1925年信濃橋洋画研究所で週刊朝日賞。25年「中央美術」に図番版。26年二科展に出品。洋画

牛玖健治（うしく・けんじ/1922～2012 年）
千葉県生れ。旧制佐倉中学校を経て、東京美術学校卒。東京版画国際展をはじめ、毎日国際展、毎日現代展、朝日秀作美術展、JAA 国際展などで活躍する。河童絵の牛玖博は実弟。2012年没、90歳。洋画

牛島憲之（うしじま・のりゆき/1900～1997 年）
熊本市生れ。1927東京美術学校西洋画科卒。47年日展特選。49年立軌会結成。55年東京芸術大学講師、59年助教授、65年教授。68年名誉教授。69年芸術選奨文部大臣賞。78年京都国立近代美術館、神奈川県立近代美術館個展開催、81年日本芸術院会員、82年文化功労者、83年文化勲章。東京で没、97歳。洋画、美教、版画

牛田雞村（うしだ・けいそん/1890～1976年）
横浜市生れ。松本楓湖の安雅堂画塾に学び、巽画会や文展に出品し、日本美術院院友。今村紫紅・速水御舟・小茂田青樹らと赤曜会を結成、大和絵の色彩や形に細緻な描写をとり入れた作風で活躍した。第四回院展で樗牛賞受賞。戦後、展覧会出品をせず、春日光の名で京舞の舞台美術を手掛けた。横浜市で没、86歳。日本画、版画

宇治山哲平（うじやま・てっぺい/1910～1986 年）
大分県生れ。31年日田工芸学校卒。32年日本版画協会展入選。35年国画会展入選。44年国画会会員。53年東京国立近代美術館主催「抽象と幻想展」に出品。61年大分県立芸術短期大学教授、71年同大学長。73年別府大学教授。73年西日本文化賞。76年神奈川県立美術館、北九州市立美術館で個展。別府市で没、75歳。94年宇治山哲平美術館、2004年休館、05年日田豆田文化交流館。洋画、版画、個人美術館

鵜城 繁（うじょう・しげる/1899～1985 年）
石川県生れ。1919年川端画学校卒。17年大澤鉦一郎らと「愛美社」を結成。19、20年愛美社展に出品。21年未来派美術協会展が開催。この頃東海美術協会会員。24～54年学校教員。34年「踏青会」を結成。68年「美術史を掘り起こす会」の結成に参加。1985年没、86歳。洋画、美教

鵜城 繁 Ⅱ（うじょう・しげる/1899～1985 年）
石川県生れ。1916 年上京、川端絵画研究所（卒業後、川端画学校に改称）に学ぶ。17 年愛美社結成に参加。19 年川端画学校卒業。帰郷。21 年東海美術協会会員。24 年学校教員となる。28 年サンサシオン展入選。29 年サンサシオン展入選。29 年光風会・サンサシオン合同展入選。35 年第 13 回春陽会展入選。68 年美術史を研究する会（？）の結成に参加。85 年 2 月 12 日没、享年 86 歳。（佐）洋画、美教

臼井文平（うすい・ぶんぺい/1898～1994年）
長野県生れ。1917年頃ロンドンに滞在。NYに移る。22年NYの日本人美術家団体「画彫会」の結成に参加。25～35年独立美術家協会展に出品。27年紐育新報社主催邦人美術展覧会に出品。28・30年国吉康雄が委員長の「サロン・オブ・アメリカ」に出品。30年代後半から政府雇用促進局（W・P・A）による連邦美術計画（F・A・P）に参加し壁画を制作した。1994年没、96歳。洋画、版画、壁画

歌川国明（うたがわ・くにあき/生没年不詳）
三代歌川豊国の門人。父は十四番組御徒士の平沢辰之助でその長男。作画期は弘化から慶応の頃、源氏絵、風俗画、芝居絵、横浜絵、風俗画などを描き、肉筆画も残す。弟は二代目歌川国明。江戸時代の浮世絵師

二代 **歌川国明**（うたがわ・くにあき/1835～1888 年）
三代目歌川豊国の門人で初代歌川国明の弟。蜂須賀家の養子となる。1847年三代目豊国の門に入る。作画期は嘉永頃から没年までにかけて役者絵、相撲絵、風俗画を描いている。万延、文久ごろ製作の横浜絵は初代国明の作と区別がつき難い。明治になると蜂須賀国明と称して西南戦争の錦絵などを残した。1888年没、54歳。江戸時代末期から明治時代の浮世絵師

歌川国貞（うたがわ・くにさだ/1786～1864 年）
江戸生れ。一世歌川豊国の門人。1844年二世豊国を称したが実は三世目。亀戸豊国と呼ばれる。版画，肉筆画，絵本，挿絵本などを描き，浮世絵師中第一の多作家。妖艶な美人画で活躍，文政期後半には猪首で猫背に描くようになり，豊国襲名後は類型的となる。主要作品『大当狂言内』（1811 頃），合巻『修紫（にせむらさき）田舎源氏』、『蛍狩り』『江戸名所百人美女』。江戸で没、78歳。江戸時代後期の浮世絵師、版画，肉筆画，絵本，挿絵

二代 **歌川国貞**（うたがわ・くにさだ/1823～1880 年）
江戸生れ。初代歌川国貞の門人。はじめ 3 代歌川国政を,ついで師の娘婿となり 2 代国貞を名のる。師の没後,4 代豊国をつぐ。通称は政吉,清太郎。別号に梅堂,一寿斎,梅蝶楼,香蝶楼,一陽斎,宝来舎。1880 年没、58歳。幕末-明治の浮世絵師

三代 **歌川国貞**（うただわ・くにさだ/1848～1920 年）
江戸生れ。四代歌川国政。幼少から初代歌川国貞門下に学び、初代没後は二代国貞に学ぶ。1889年三代国貞を襲名。一寿斎、香蝶桜とも号し、国貞襲名以降は豊斎、芳斎などと称した。鉄道など、明治の開

化を積極的に取材したことでも知られる。1920年没、72歳。江戸末期-明治の浮世絵師

歌川国輝（うたがわ・くにてる/生没年不詳）
歌川国貞（三代目歌川豊国）の門人。作画期は文政から安政の頃にかけてで、初めは歌川貞重と称し弘化 4 年頃まで子供絵、教訓絵などの錦絵を多く描く。1843年～1847年にかけての頃の錦絵「花のえん日商売のあきうど」において「貞重改国輝画」と落款しており、この時期に貞重から国輝に名を改めたと見られる。47年頃に国輝と改名したともいう。国輝と改めてからは嘉永から安政にかけて合巻の挿絵を多く手がけ、美人画、役者絵も描いた。さらに85年以降は二代国彦と名を改め、55年の「当世美人花之賑」などに「国輝舎国彦画」と落款している。また歌川芳艶と競って刺青の下絵を描いた。江戸後期の浮世絵師

二代 **歌川国輝**（うたがわ・くにてる/1830～1874 年）
三代目歌川豊国の門人。深川御蔵前町に住む。文久ごろから二代目歌川国綱または一蘭斎国綱と称し作画活動をし始め、1865年頃国輝と改めた。国綱の時代には諷刺画や街道物、役者絵などで活動。国輝となって以降は四代目歌川国政との合作「東京十二景」をはじめとして「東京名所図絵」、「東京名勝」など開化絵を描く。「東京汐留鉄道蒸気車通行図」のような鉄道絵もかなり多く、蒸気機関車の描写は他の絵師よりもずっと精緻に観察して描いた。73年文部省が教育目的の錦絵 104 枚を発行し、「文部省製本所発行記」との朱印が押され、うち 30 枚は「曜斎国輝」のものとある。1874年没、45歳。江戸末期-明治の浮世絵師

歌川国利（うたがわ・くにとし/1847～1899 年）
三代目歌川豊国の門人。三代目豊国没後は二代目歌川国貞の門人。歌川の画姓を称し、国登志、梅寿、梅翁、梅翁道人と号す。屋号は三河屋。1884年からは楳樹邦年とも称した。神田小川町 35 に住む。作画期は慶応から明治 29 年頃にかけてで、74年頃から銀座の風景、鉄道馬車、三井銀行などの名所絵の他、開化絵、切組絵、風俗画、また銅版の地図も描いている。1899年没、53歳。明治時代の浮世絵師

歌川国直(初代)（うたがわ・くになお/1795～1854 年）
信濃生れ。初代歌川豊国の門下。合巻,滑稽本などの挿絵を制作。美人画、役者絵、洋風の風景画を描く。1854年没、60歳。江戸後期の浮世絵師

歌川国政（うたがわ・くにまさ/1773～1810 年）
会津生れ。紺屋で働いたが役者の似顔が得意、初代歌川豊国に入門。1796年ごろから作画。錦絵では役者似顔絵が主、美人画にも佳品。99年の絵本『俳優楽室通』では師と合作する。1805，6年画業を廃した。その後は役者似顔の面を製造販売したという。江戸後期の浮世絵師

歌川国政・四代、三代 歌川国貞（うただわ・くにまさ/1848～1920年）
江戸生れ。初代歌川国貞門下に学び、初代没後は二代国貞に学ぶ。1889年三代国貞を襲名。一寿斎、香蝶桜とも号し、国貞襲名以降は豊斎、芳斎などと称した。鉄道など、明治の開化を積極的に取材したことでも知られる。1920年没、72歳。江戸末期から明治の浮世絵師

歌川国芳（うたがわ・くによし/1797～1861年）
江戸生れ。15歳で歌川豊国の門下。30歳を過ぎ、水滸伝の英雄に取材した一連の作品で脚光。当時の浮世絵師の番付には、名所絵の広重に対し、武者絵の国芳として名前が掲った。また、筋骨隆々の武者絵を描く一方で、自身の大好きな猫をはじめ、魚や狸などを擬人化したコミカルで愛らしい戯画も多く描いた。反骨と風刺の精神に富んだ作品群は、当時の人々の圧倒的支持を得、多くの門人が集まり、浮世絵師の最大派閥を形成。その系譜は昭和の日本画家まで連なっています。歌川国芳は、「奇想の絵師」などと呼ばれ、江戸で没、65歳。幕末の浮世絵師

歌川国芳 II（うたがわ・くによし/1797～1861年）
江戸生れ。世歌川豊国の門人。俗称は井草孫三郎。号は一勇斎，朝桜楼，採芳舎。武者絵で有名。洋風画の明暗法や遠近法を応用した風景画にすぐれる。主要作品『東都名所』(1834頃），『源頼光公館土蜘作妖怪図』（43年），『大物之浦，平家之怨霊』（50年頃），浅草寺本堂額『浅茅原一つ家之図』（55年）。江戸で没、65歳。江戸後期の浮世絵師

歌川国安（うたがわ・くにやす/1794～1832 年）
江戸生れ。初代歌川豊国の門人。作画期は文化から没年にかけてで、1808年の役者絵に「豊国門人安画」と落款、豊国に入門、当初は豊国と同居。役者絵のほか美人画や浮絵、合巻の挿絵、団扇絵、肉筆画を描く。一時、画名を西川安信と称したが後に旧名の国安に戻った。歌川国安、歌川国丸、歌川国直の 3 人は豊国門下の三羽烏といわれ、国安がその第一人者であった。1832年没、39歳。江戸後期の浮世絵師

歌川豊国（うたがわ・とよくに/1769～1825 年）
江戸生れ。人形師の息子として生まれる。幼少期に歌川派の創始者歌川豊春の元で学び、役者絵や美人画で絶大な人気を得た。また、錦絵、草双紙、読本などの挿絵の分野でも活躍。門下から国貞、国芳らの有力な絵師も輩出。のち門人豊重が二代豊国を称した。1825年没、57歳。江戸後期の浮世絵師

三代 **歌川豊国** 歌川国貞（うたがわ・くにさだ/1786～1864年）
江戸生れ。一世歌川豊国の門人。1844年二世豊国を称したが実は三世目。亀戸豊国と呼ばれる。版画，肉筆画，絵本，挿絵本などを描き，浮世絵師中第一の多作家。妖艶な美人画で活躍，文政期後半には猪首で猫背に描くようになり，豊国襲名後は類型的となる。主要作品『大当狂言内』（1811 頃），合巻『倦紫（にせむらさき）田舎源氏』、『蛍狩り』『江戸名所百人美女』。江戸で没、78歳。江戸後期の浮世絵師

四代 **歌川豊国**（うたがわ・とよくに/1823～1880年）
江戸生れ。初代歌川国貞の門人。はじめ3代歌川国政を,ついで師の娘婿となり2代国貞を名のる。師の没後,4代豊国をつぐ。通称は政吉,清太郎。別号に梅堂,一寿斎,梅蝶楼,香蝶楼,一陽斎,宝来舎。1880年没、58歳。幕末-明治の浮世絵師

歌川豊春（うたがわ・とよはる/1735～1814 年）
江戸生れ。俗称但馬屋庄次郎，のち新右衛門。号は一龍斎，潜龍斎，松爾楼。初め京都へ出て狩野派鶴沢探鯨に師事，1764年江戸へ移り，鳥山石燕に入門したとされる。肉筆美人画を多作，版画では丹絵（たんえ）時代の浮絵を風景画錦絵にも応用。洋風画法を取入れ，ヨーロッパ渡来の銅版画を木版画で復刻した作品も作る。主要作品は肉筆『仲秋名月』，浮絵『洛陽四条河原夕涼図』『阿蘭陀雪見之図』『紅毛フランカイノ湊万里鐘響(しょうけい)図』。歌川派の祖。江戸中-後期の浮世絵師

歌川広景（うたがわ・ひろかげ/生没年不詳）
歌川広重の門人。安政から慶応(1854～1868 年)大判錦絵「江戸名所道化(戯)尽」31 枚揃制作。現在確認されている作品は65点、いずれも大判錦絵で、版本、摺物、肉筆浮世絵は確認できない。江戸後期の浮世絵師

歌川広重（うたがわ・ひろしげ/1797～1858 年）
江戸生れ。幼少より絵を好み、15歳で歌川豊広の門下。美人画や役者絵を描いた。「東都名所」のシリーズを皮切りに、数々の風景画を制作、人気絵師となる。天保年間に保永堂から出版された全 55 図の「東海道五十三次」が大ヒットし、以降数々の東海道の風景画を描きました。花鳥画にも詩情溢れる優品を残し、最晩年に手がけた一大連作「名所江戸百景」では、四季折々の江戸の風景を、独特の視点と豊かな感性で描いた。同シリーズは、ゴッホが模写したことでも知られています。1858年没、61歳。江戸後期の浮世絵師

歌川広重 三代（うたがわ・ひろしげ/1842～1894 年）
江戸生れ。初代広重の門人。2 代広重と離婚した初代の養女と結婚。2代(実は 3 代)広重を名のる。横浜絵、東京名勝絵、文明開化絵をおおくかいた。1894年没、53歳。幕末-明治の浮世絵師

歌川広重 五代（うたがわ・ひろしげ・ごだいめ/1890～1967年） 四代目歌川広重の次男として生まれ、父が開いた書道塾を継いで経営。団扇絵など若干の作品を残してた。「雪月花図」（紙本着色、浮世絵太田記念美術館所蔵）には「五世歌川広重」と落款しており、画面上部に「月」と墨書し中央部に浅草待乳山の雪景、下部に三囲神社と桜を描く。1932年写真師東々亭主人こと戸塚正幸とともに五世歌川広重の名で写真集『江戸の今昔』を刊行。1967年没、77歳。書、日本画

歌川(落合)芳幾（うたがわ・よしいく/1833～1904 年）
江戸生れ。1849年歌川国芳に入門。55年安政の大地震で吉原の惨状を錦絵に描き名をあげる。61年歌川国芳が没し、芳幾は遊女屋風俗などを描いて浮世絵師の第一人者のひとり。66年兄弟弟子月岡芳年との無残絵の競作「英名二十八衆句」が発行。72年「東京日日新聞」の発起人となり74年錦絵版『東京日日新聞』に新聞錦絵を書き始め、錦絵新聞流行の先駆け。87年春陽堂から刊行された『新作十二番之内』の口絵を描き、これが木版口絵のはしり。東京で没、72歳。幕末-明治の浮世絵師、木版口絵

歌川芳員（うたがわ・よしかず/生没年不詳）
江戸生れ。歌川国芳の門人。歌川の画姓を称し一寿斎、春斎、一川、一川斎と号す。江戸芝露月町に住む。作画期は嘉永頃から1870年頃にかけてで、合戦絵、武者絵、花鳥画、草双紙の挿絵などを描いたが、横浜開港後は異人の生活風俗に興味を持ち、横浜絵を手掛けた。ただし鉄道がまだ日本に無い1861年に描いた「亜墨利加国蒸気車往来」や70年の「東京繁栄車往来之図」には、船ともトレーラーともつかない奇妙な汽車を描いた。江戸末期から明治の浮世絵師

歌川芳艶（初代）（うたがわ・よしつや/1822～1866 年）
江戸生れ。歌川国芳の門人。武者絵を得意とした。刺青の下絵,江戸浅草奥山の生き人形の看板絵で知られた。姓は甲胡。通称は万吉。別号に一栄斎,一英斎。1866年没、45歳。江戸後期の浮世絵師

歌川芳虎（うたがわ・よしとら/生没年不詳）
江戸生れ。歌川国芳の門人。武者絵,役者大首絵を得意としたほか,横浜絵,開化絵をおおくかく。明治初めの錦絵絵師番付では歌川禎秀と人気をあらそった。師の十三回忌のとき同門からしりぞけられ,以後孟斎と号した。姓は永島。通称は辰五郎。別号に一猛斎,錦朝楼。江戸後期-明治の浮世絵師

歌川芳宗　二代目・新井芳宗　（うたがわ・よしむね/1863～1941年）
初代歌川芳宗の末子。13歳で月岡芳年に入門。15歳で西南戦争錦絵を手掛けた。明治錦絵類、小説挿絵、口絵も描く一方、縮緬本の版元として知られる長谷川（西宮与作）より、夜景や美人などを描いて、外国人向け木版画の制作にもかかわった。縁あって新井芳宗を名乗る。1941年で没、79歳。錦絵、挿絵、口絵、木版

宇田川民生（うだがわ・たみお/1947年～　）
鳥取県生れ。約10年間油絵を描く。1980年頃、前川千帆の木版画に出会い、独学で木版画の世界に入る。現在の作品は「猫」を中心の創作。2007～08年東京新聞夕刊「文学碑よこんにちは」を連載。芭蕉「奥の細道」全編木版画の頒布会を09より年より10年間かけて進行中。グループ展・個展を中心に年5回開催。版画

宇田川宣人（うだがわ・のりと/1944年～　）
横浜市生れ。東京芸術大学美術部絵画科から同大研究科、1971年同科修了。九州産業大学に赴任、教授、芸術学部長、学長。国際青年美術家展、安井賞展、北九州絵画ビエンナーレ、グループ瑠玻会などグループ展で発表するかたわら個展も多数開催。海外でも盛んに制作、発表を続ける。2004年福岡市文化賞。洋画、美教、大学長

宇田荻邨（うだ・てきそん/1896～1980年）
三重県生れ。1913年菊池芳文に師事。17年京都市立絵画専門学校卒。18年芳文没後は菊池契月に師事。19年帝展入選、25、26年帝展で特選、帝国美術院賞。36年京都市立絵画専門学校教授。母校の絵専で長く後進の指導。50年日展参事。61年日本芸術院会員。1980年没、84歳。日本画、版画、美教

宇田義久（うだ・よしひさ/1966年～　）
福島県生れ。1992年岩手大学特設美術科卒。96年岩手県芸術選奨。2003年にはVOCA展（東京・上野の森美術館）に参加し、同年ホルベイン・スカラシップ。岩手県盛岡市を中心に個展、グループ展問わずに活動し、ほぼ毎年展覧会に参加。洋画

内田昭人（うちだ・あきと/1949～2005年）
埼玉県生れ。75年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。81年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官、2000年保存工学研究室長。02年東京文化財研究所修復技術部応用技術研究室長。「文化財の防災計画に関する調査研究」の主担として文化財建造物の防災情報システムの構築。論文執筆・講演等を行うとともに、古建築の鑑賞方法に関する随筆を執筆。著書;『発掘を科学する』(「建築や石室の健康診断」、岩波新書、1994年)、平尾良光・松本修自編『文化財を探る科学の眼-第六巻　古代住居・寺社・城郭を探る』(「五重塔の構造と揺れ」、国土社、1999年)、東京で没、55歳。（引用　東文研）修復、防災、建築、東文研

内田　晃（うちだ・あきら/1918～2004年）
埼玉県生れ、1954年白日展入選、58年白日会会員。67年第一美術展で特選、同会会員、68年同会委員、70年同会常任委員。74年大調和会会員。75年大調和会委員のち常任委員。89年大調和展文部大臣賞。85年銀座松屋で個展。02年二元会常任委員推挙、渡欧30回超える。04年没、86歳。洋画

内田一郎（うちだ・いちろう/1910～1995年）
東京生れ。甲府中学在学中に画家を志す。1925～29年和田英作に師事、阿以田治修に就いて太平洋美術学校に学ぶ。40年創元会創立終生出品。文展、帝展、太平洋洋画会展に出品。埴原桑喜代と共に甲斐美術会の創立に参加、創立会員として出品。戦後、内田美術研究所を設立、後進の指導。1995年没、85歳。洋画

内田　巌（うちだ・いわお/1900～1953年）
東京生れ。父は内田魯庵。1926年東京美術学校西洋画科卒。29年光風会展で光風会賞を受賞。30～32年渡仏。33年光風会会員。36年新制作派協会創立会員。日動画廊等で個展を開催。戦後、藤田嗣治と論争。東京で没、53歳。（出典　わ眼）洋画、版画

内田九一（うちだ・くいち/1844～1875 年）
長崎県生れ。前田玄造などから写真術を学ぶ。1865年大坂に写真館を開業し、歌舞伎役者や芸者を撮影して評判を得、69年浅草で写真館「九一堂万寿」を開業、「東都随一」の写真師と名を馳せた。72年明治天皇の西国御巡幸の際、宮内省御用掛の写真師第一号として随行し、名所旧跡の写真を数多く撮影。御巡幸出発前の72年束帯姿と小直衣・金巾姿の天皇を、73年洋装礼服姿の天皇を撮影し、複製が「御真影」として地方官庁・学校などに下賜。九代目市川団十郎、五代目岩井半四郎の歌舞伎役者や有名芸妓を撮影。75年没、32歳。浅草の写真館は、81年写真師だった北庭筑波が購入し、「旧内田舎」として再開業。写真

内田静馬（うちだ・しずま/1906～2000 年）
埼玉県生れ。川越中学校を経て、1927年東京高等工芸卒。28年春陽会入選。32年日本版画協会会員。62年日版会会員。伝統的な木版画技法による力強い風景画を制作。2000年没、94歳。版画

内田進久（うちだ・しんきゅう/1901～1958 年）
埼玉県生れ。1926年東京美術学校図案科卒。栃木県師範学校教諭、43年同校教授。30年栃木県美術会を組織。48年日本版画協会会員。50年宇都宮大学学芸学部教授、58年宇都宮大学学芸学部附属中学校長。53年日本銅版画協会創立。栃木県文化功労者。1958年没、57歳。洋画、美教、版画

内田慎蔵（うちだ・しんぞう/1912～1993 年）
秋田県生れ。同郷の浜松小源太と共に、秋田県前衛絵画の草分けの一人。1932年帝国美術学校入学、一年で退学。33年独立展入選、独立美術研究所で福沢一郎に師事。36年浜松小源太、長谷川善四郎らとエコール・ド・東京創立会員。旧満州に渡り奉天の協和会文化班勤務。亜土美術会創立、奉天省美術展で省長賞。46年大館市比内町の中学教師。57年師福沢一郎と新象美術協会創立会員。東京で没、81歳。洋画、美教　100

内田武夫（うちだ・たけお/1913～2000 年）
東京生れ。兄は内田巌。1938年帝国美術学校西洋画科卒。37、38年新作家協会展で新作家賞、41年会員、53年同協会の事務所を引き受ける。53～84年武蔵野美術学校で後進の指導。88年『内田武夫画集』（日本経済新聞社）刊行、自薦展（銀座セントラル美術館）開催。93年小山敬三賞、日本橋高島屋にて受賞記念展。横浜市で没、86歳。洋画、美教

内田智也（うちだ・ともや/1947～2009 年）
岡山県生れ。1971年同志社大学文学部卒。オーストラリアのキャンベラ芸術大学、スロバキアのプラチィスラヴァ国立美術アカデミー、オーストリアのウィーン国立応用美術大学に学ぶ。春陽会展、クラクフ国際版画ビエンナーレ展、大阪府現代版画コンクール展出品。97年岡山県芸術顕賞。春陽会会員。就実短期大学教授。2009年没、62歳。版画、美教

内田如風（うちだ・じょふう/1921～2009 年）
台湾生れ。1943年安井曾太郎に師事。48年一水会出品、55年船岡賞。58年梅田画廊で個展。61、66、69、72年渡欧米。76、79渡メキシコ。80、83、90年梅田近代美術館にて個展 。2009年没、88歳。洋画

内田晴子（うちだ・はるこ/1974 年～ ）
長崎市生れ。長崎大学教育学部中学校過程理科専攻中退、1998年愛知県立芸術大学美術学部油画科卒。2000年岐阜県立国際情報科学芸術アカデミーアートアンドメディア・ラボ科卒。97年 FUKUI サムホール美術展、長崎新美術展大賞。99年関口芸術基金賞優秀賞。2001年雪梁舎フィレンツェ賞展佳作個展（長崎新聞社文化ホール）、interaction ’01(大垣市ソフトピア)、熊日総合美術祭アートグランプリ 21 熊本県賞。洋画

内田美絵（うちだ・みえ/1970 年～ ）
銚子市生れ。1989年女子美術短期大学入学。93年銀座・ギャラリーねこで個展。94年女子美術短期大学絵画研究科修了。同年聖路加国際病院にて父・娘の二人展。2008年かずさアカデミアホールアートギャラリー個展。09年目黒三田アップアップギャラリー個展。洋画

内野　猛（うちの・たけし/1878～没年不詳）
宮崎県生（東京説も）れ。1896 年明治美術学校で夏井潔に水彩画など学ぶ。99 年第 4 回白馬会展に出品、以後 5～6回展に出品。1902 年東京美術学校西洋画科本科卒。03 年から府立第三中学で教える。12 年第 6 回文展に初入選。13 年東美同級生らと五更会を結成。18 年第 12 回文展、24 年第 3 回帝展に出品。36 年旺玄社第 4 回展に出品。日本山岳画協会創立会員。41 年第 4 回失明勇士に感謝する素人美術展に出品。以後の活動、没年不詳。（佐）洋画

内野秀美（うちの・ひでみ/1911～1998 年）
福岡県生れ。1928年南筑中学卒、日本大学芸術学科入学、中退。35年本郷絵画研究所に通い辻永に師事。49年西部示現会、久留米連合文化会結成に参加、50年示現会展受賞、会員。51年来目会幹事長。71年久留米連合文化会会長。79年久留米市

文化賞。筑後の風土や装飾古墳を抽象化、穏健で滋味深い画風。1998年没、87歳。洋画

内堀　功（うちぼり・いさお/1917～1978 年）
小諸市生れ。戦後、吉田三郎、昼間弘に師事。1946年日展に入選、47年白日会展で白日会賞、48年白日会会員、61年委員。60年日本彫塑会会員。72、74年日展で特選、73年無鑑査出品。75年白日会展で特別賞、中沢賞。77年日彫展審査員。改組日展の委属出品。小諸市で没、61歳。彫刻

内堀　勉（うちぼり・つとむ/1911～1991 年）
長野県生れ。帝国美術学校卒。1935国画会展入選、国画会賞、会員。個展でも発表。東京で没、79歳。2014年南木曽町博物館で内堀勉絵画展。洋画

内間安瑆（うちま・あんせい/1921～2000 年）
カリフォルニア生れ。1940年早稲田大学建築科入学、44年中退。独学で絵を学ぶ。木版画制作は52年頃から。55年日本版画協会会員。55年養精堂画廊で個展。57年同画廊で二人展。58年「版画八人展」。59年米国NYに移住。国際展に出品。サラ・ローレンス大学、コロンビア大学で版画の指導。「色面織り」版画制作。NYで没、79歳。版画

内間俊子（うちま・としこ/1918～2000 年）
満州生れ。1928年大連洋画研究所で石膏デッサンと油彩を学ぶ。39年神戸女学院専門本科卒。小磯良平に師事。53年デモクラート美術家協会会員。56年まで抽象的油絵、木版画制作。55年日本女流版画協会の創立会員。海外に発表の場を求め、60年渡米NYに定住し、制作。アッサンブラージュやコラージュの制作。NYで没、82歳。版画、デモクラート

内山嘉吉（うちやま・かきつ/1900～1984 年）
岡山県生れ。丸亀中学校卒。成城学園美術教師時代の1931年作家魯迅の招きで版画講習会を行い、現代中国版画界の基礎をつくった。帰国後の 10 年、中国書籍を扱う内山書店を東京で開くなど、日中文化交流に貢献した。1990年倉石賞。1984年没、84歳。版画、美教、内山書店

内山武夫（うちやま・たけお/1940～2014 年）
兵庫県生れ。1963 年 3 月京都大学文学部哲学科卒。65年京都大学大学院文学研究科修士課程修了。75年国立近代美術館主任研究官。98～2005年京都国立近代美術館長。文化功労者選考審査会委員、文化財保護審議会専門委員、文化審議会(文化財分科会)専門委員、京都美術文化賞選考委員、京都国立博物館、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の評議員、公私立美術館の各種委員として美術館の設立、運営等について指導と助言、40年我が国の文化行政・教育研究の推進に貢献。97年「土田麦僊」展は長年の研究の集大成。「生誕 110 年・没後 20 年記念展小野竹喬」展に貢献。2014年没74歳。美術館長、美教、美政

宇都宮周策（うつのみや・しゅうさく/1907～1988 年）
愛媛県内子生れ。1930年この頃から油絵を描き始める。39年東京帝国大学法学部卒。56年愛媛県松山市民病院を設立、後に真光園(病院)設立に携わる。67年四国遍路参りを完拝する。俳画を描き始める。88年没、81歳。(出典　わ眼)洋画、俳画

内海柳子（うつみ・りゅうこ/1921 年～　）
大阪生れ。1941年関西女子美術学校洋画科卒。41年独立展入選。55～57年「デモクラート美術家協会」参加。この頃から「銅版画」を始める。59年春陽展入選、64年大阪市長賞、準会員。71年渡仏、翌年までアトリエ17で「ヘイター」に学ぶ。75年頃から日本のみならず海外で作品を発表する。洋画、版画、デモクラート

畝村直久（うねむら・なおひさ/1909～1962 年）
金沢市生れ。東京美術学校(現東京芸大)卒。1930年帝展入選。51年日展審査員。61年日展文部大臣賞。日展彫塑の重鎮として活躍し,東京学芸大の助教授。東京で没、53歳。彫刻

宇根元警（うねもと・けい/1904～1970 年）
広島県生れ。1924年師範学校卒。清水登之に師事。1931年独立展に出品。40年独立美術協会賞。48年独立美術協会会員。戦後、呉市美術館に作品100点搬入前日に焼失。呉市で没、66歳。洋画

宇野亜喜良（うの・あきら/1934 年～　）
名古屋市生れ。1952年名古屋市立工芸高等学校図案科卒。55年興和新薬のカエルマーク1等。59年日宣美展で特選、東京会員、会員賞。82年講談社出版文化さしえ賞。99年紫綬褒章。2008年、『悪魔のりんご』(作・舟崎克彦, 小学館)で日本絵本賞。10年旭日小綬章。刈谷市美術館で個展。洋画、挿絵、絵本、版画、イラスト

宇野千里（うの・せんり/1902～1993 年）
熊本県生れ。1929年東京美術学校西洋画科卒。32、53年光風会展に出品、61年光風会会員。44年白日会展で招待者佳作賞。53年日展出品、76年日展会員。52年熊本大学講師(教育学部美術科)、58年熊本大学助教授。65年熊本大学教育学部教授を退職。66年熊本商科大学教授。東京で没、91歳。洋画、美教

宇野政之（うの・まさし/1948 年～ ）
豊田市生れ。1968年新宿美術研究所にて麻生三郎、山口長男に油絵を学ぶ。画商木村東介に見出された。73年新宿紀伊国屋画廊、76年現代画廊、東京梅田画廊、84年松坂屋上野店、羽黒洞、アート紀元で個展開催。95年宇野マサシ画集出版。洋画

宇野満寿美（うの・ますみ/1932 年～ ）
1932年生れ。52年第 12 回水彩連盟展資生堂賞、H.A.C.特別顧問芸術賞、H.A.C.名誉理事長芸術大賞、ウィーン芸術文化交響賞を受賞。日本美術家連盟会員。水彩

梅木英治（うめき・えいじ/1951 年～ ）
大阪生れ。1977年銅版画集『夢魂』出版。78年版画ハガキコンクール・優秀賞。80年個展（ダビッドソンギャラリー・シアトル）。81年トレントユーモアビエンナーレ（トレント）・入賞。89～90年現代日本版画展。89年個展（ホールワースギャラリー・シドニー）。94年インドネシア展（ジョグジャ、ジャカルタ、バンドン）。95～98年『梅木英治日本幻想文学集成版画集』第 1・2・3 集刊行。98年個展（青木画廊・銀座）。版画

梅澤静雄（うめざわ・しずお/1914～1943 年）
和歌山県生れ。1934年天王寺師範学校卒。小学校教師。禾光会美術研究所で絵の研鑽、頭角。全関西洋画協会公募展、二科展、新制作派展に出品。1941年大阪市展で大阪毎日新聞社賞。42年大阪市展で市長賞1席。将来嘱望されたが43年没、28歳。洋画

梅田哲男（うめだ・てつお/1932年～ ）
君津市生れ。1961年武蔵野美術学校洋画科卒。85年白亜美術会会員（賞 4、審、県支部長）。94年日展会友（入選 20 回）、2006年千葉県展理事（賞 1、審 2）、日洋会委員（賞 1・審 3）。11年紺綬褒章。13, 14年県展代表作家展出展。14年九州臼杵を描く絵画展特選。15年木更津わたくし美術館で個展。洋画

梅津拓雄（うめつ・たくお/1974年～ ）
山形県生れ。雑誌の技法講座やインターネットで独学。油彩画を学ぶ。2018年6月都内京橋にて初個展。所沢市在住。洋画

梅野隆・木雨（うめの・たかし・もくう/1926～2011年）
福岡県生れ。父は青木繁の友人。サラリーマン蒐集家。定年後、東京京橋に「美術研究藝林」を開設。1998年長野県御牧村に梅野記念絵画館（現東御市）が開館、館長を務める。2011年没、85歳。「わの会」発足、発展に貢献。（出典 わ眼）画廊主、美術館長。コレクター

梅野 亮（うめの・まこと/1952年～ ）
福岡県生れ。父は梅野隆（元梅野記念絵画館館長）。10歳より油絵を始める。1973年彩壺堂で個展、美術留学のため渡仏グランド・ショミエールに通う。渡伊。80年会社経営などのため絵画活動を休止。1998年梅野記念絵画館運営委員。ギャラリー上田、ギャラリーゴトウで個展、海外でも発表。洋画、版画

梅原龍三郎（うめはら・りゅうざぶろう/1888～1986年）
京都市生れ。1906年関西美術院で浅井忠に師事。08～13年渡仏、09年ルノアールに師事。14年二科会創立会員。22年春陽会創立会員。26年国画創作協会洋画部を設立、28年国画会を結成、主宰。35年帝国美術院会員。（37年帝国芸術院会員）。44～52年東京美術学校教授。52年文化勲章。57年日本芸術院会員。73年フランス政府よりコマンドール勲章。東京で没、97歳。洋画、美教、版画

梅宮英亮（うめみや・えいすけ/1941～1994年）
福島県生れ。1960年福島高等学校卒。65年福島大学学芸学部卒。73年第41回独立展で独立賞。74年第42回独立展で奨励賞。福島大学で教鞭をとる。75年第43回独立展で独立賞。76年第44回独立展で会員。77年安井賞候補展入選。84年絵本「にじのカーネーション」発行。87年絵本「金のゆき」発行。94年1月20日没、享年53歳。時期不明ながら昭和会展、現代展招待、国際展、日仏現代美術展などに出品入選している。（佐）洋画、絵本、美教

浦上玉堂（うらかみ・ぎょくどう/1745～1820年）
岡山市生れ。玉堂の号は、35歳時に入手した七絃琴に刻された印「玉堂清韻」にちなんだもの。琴士、詩人、書家であり、とりわけすぐれた水墨画家であった。画業に関しては、直接的な師承関係は認められず、画譜・画論書類から独学で学んだらしい。50歳で脱藩、出奔し、京都を拠点に諸国を遊歴しながら琴詩書画に親しむ文人生活を送った。専門家・職業画人であることを拒否し、胸中の山水を描き続けた。江戸時代の文人（南画）、美普、水墨、書

浦上秋琴（うらかみ・しゅうきん/1785～1871年）
岡山市生れ、玉堂の次男。10歳で父の脱藩に伴い岡山を出奔したが、父が会津藩の招聘に応じて土津神社神楽を再興した功により11歳で同藩士となる。兄同様、早くから詩画や七絃琴に親しんだが、とりわけ音楽の才に恵まれた。23歳で同藩雅楽方頭取となり、藩内では詩画をたしなむものの音楽面での活動が中

心となる。1869年会津戦争終戦に際し、85歳の彼は備前藩の兵士とともに岡山へ帰って宗尚らと住み、山水や竹を好んで描くも1871年没、87歳。江戸時代の文人画

浦上春琴（うらかみ・しゅんきん/1779～1846年）
岡山市生れ。玉堂の長男。少年の頃より詩画に才を発揮する。16歳の時、父の脱藩に同行して岡山を出奔、以後、京都を活動の拠点とした。写生に基礎を置く温和な山水・花鳥を描き、洗練されて気品のある画面を持ち味とする。京坂文人画壇きっての人気作家で、頼山陽や小石元瑞らとの交友で知られる。晩年の玉堂と同居していたが、弟秋琴の次男宗尚が春琴の養子となって備中鴨方藩に仕え岡山に浦上家を再興した。江戸後期の文人画

浦久保義信（うらくぼ・よしのぶ/1903～1988年）
奈良市生れ。渡英、滞仏。1923年帰国。三岸好太郎らに評価され、春陽展、二科展に出品。32年より独立展に出品。35年独立賞。47年行動美術協会会員に推挙。88年没、86歳。（出典　わ眼）洋画

浦崎永錫（うらさき・えいしゃく/1900～1991年）
那覇市生れ。1921年上京、川端画学校に入学。藤島武二に師事、夜間工業学校の図画教師。1930年雑誌「美術界」を刊行。60年美術教育者たちの作品発表の場として「大東会」を設立、発展解消させて33年「大潮会」を結成、戦後も同会を率い、のち会長。74年『日本近代美術発達史・明治篇』（東京美術）を刊行。東京で没、90歳。洋画、美術雑誌、美史、美教

浦田正夫（うらた・まさお/1910～1997 年）
熊本県生れ。松岡映丘に師事。東京美術学校卒。1932年帝展入選。36年杉山寧らと瑠爽(るそう)画社を結成。51年からは山口蓬春に師事。73年日展で文部大臣賞。78年芸術院賞。88年芸術院会員。1997年没、87歳。日本画、版画

瓜生　剛（うりゅ・つよし/1981 年～　）
ニューヨーク州(LL.S. A)生れ。2006年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒。08年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画研究分野修了(坂田哲也研究室)。08年 シェル美術賞 2008 入選。08年ホノルベインスカラシップ奨学生。09年シェル美術賞 2009 中井康之審査員賞 。09年日本芸術センター絵画公募展入選。10年 ワンダーシード2010 入選。洋画

漆畑廣作（うるしばた・ひろさく/1905～1990 年）
静岡県生れ。1930 年第 7 回白日展に出品。37 年第 1 回新文展に出品、以後4～6回まで出品し、第 6 回展で＜夕仕度＞が特選。39 年第一美術展で奨励賞。47 年第 2 回日展から出品を続け、56 年第 12 回日展で出品依嘱者となる。日本水彩画会にも出品を続け、同会理事を務める。90 年 7 月 12 日東京で没、享年 85 歳。（佐）洋画、水彩

漆原英子（うるしばら・えいこ/1928～2002 年）
ロンドン生れ。1946年聖心女子学院語学部卒。父は漆原木虫、46年聖心インターナショナル卒。47年阿部展也に師事。52年タケミヤ画廊で個展。瀧口修造が企画したタケミヤ画廊でデビューし、ここを舞台に活動を展開した。81年「1950 年代―その暗黒と光芒」展（東京都美術館）に出品。94年日本画廊で個展。2002年没、74歳。洋画

漆原木虫・由次郎（うるしばら・もくちゅう/1888～1953 年）
東京生れ。摺師。1909年審美書院の一員として1910年開催の日英博覧会に木版画実演の為、渡英（19歳）。大英博物館の嘱託として1919年まで表具師、紙本修復家として活躍。24年ブランギンの木版作り担当。その後パリへ移り、日本の伝統的版画技術作品で英仏に愛好家を育てた。41年帰国。日本橋三越で個展。53年没、64歳。版画、表具師、修復

宇和川通喩（うわがわ・みちとも、みちさと/1877 年～没年不詳、1942年没説あり）
函館市生れ。松本楓湖に日本画を学ぶ、のち洋画に転向。1902年東京美術学校西洋画科選科卒。00～03年白馬会展に出品。09、11年文展に入選。14～18年外遊。帰国後、大坂三越で個展。20、28年帝展に入選。29年阪神婦人洋画研究所で桜井忠剛、赤松麟作らと指導。没年不詳、1942年説であれば65歳。洋画、洋画研究所

雲渓永怡（うんけい・えいい/生没年不詳）
雪舟没年前後の1505年、雪舟による中国絵画の模写を師から相伝したという記事が伝わることから、雪舟の孫弟子にあたると思われる。生没年は不明、遺された伝称作品や資料等から、1532～1555年頃に周防長門を中心に活躍した。大内氏と関係寺社における活動、雲渓は大内氏周辺をパトロンとしていたと考えられ、雪舟以降の大内氏による雪舟流画人の庇護を具体的に示す。山水・道釈人物・花鳥・仏画・肖像などから絵馬・天井画まで多岐にわたり、職業画家的な活躍をしていたことが窺える。室町時代後期の絵師

雲谷等益（うんこく・とうえき/1591～1644 年）
広島県生れ。名は元直のち、治兵衛。宮法師と称し、友雪と号す。雲谷等顔の二男。父、等顔とともに萩の毛利輝元に仕え、等顔の死去にともない 28 歳で家督

を相続、「雪舟四代」を称す。1626年法橋に叙される。等顔の画風をさらに装飾化を加えた洗練された様式に特色がある。また幕末まで続く雲谷派の流派としての基盤を確立した功績は大きい。桃山時代の絵師

雲谷等顔（うんこく・とうがん/1547～1618 年）
肥前生れ。雲谷派の祖、雪舟に私淑、広島城主毛利輝元の命で雪舟筆の山水長巻を模写、雪舟の旧跡雲谷庵を継いで姓とした。法橋に叙せられる。代表作に大徳寺黄梅院の障壁画がある。1618年没、72歳。安土・桃山時代の絵師

海野　経（うんの・おさむ/1919～1998 年）
盛岡市生れ。盛岡中学、東京美術学校油絵科卒。岩手大学や盛岡大学で後進の指導にあたる。1998年没、79歳。版画、美教

海野三岳（うんの・さんがく/1851～1911 年）
盛岡市生れ。海野楳岳の二男。1878年上京、宮本三平に入門した。79年内務省地理局地籍課に勤務。81年に帰郷。84年に盛岡中学校の図画教師27年間勤務。1911年没、61歳。洋画

海野光弘（うんの・みつひろ/1939～1979 年）
静岡市生れ。 1952年静岡市立末広中学校入学。作品が教諭の目に留まり、日本教育版画協会所属の教諭・蒔田晋治を紹介され、以後版画制作に没頭。静岡商業高校卒。日立製作所東京本社に就職。59年退職、本格的に版画家としての道を歩む。静岡市内で初の個展を開く。64年日本版画協会賞奨励賞。72年静岡県芸術祭賞。77年スイス美術賞展優秀賞。1979年没、39歳。版画　　145

え

瑛　九（えい・きゅう/1911～1960 年）
宮崎市生れ。日本美術学校中退。洋画家、版画家、写真家。前衛的、抽象的な作品で知られる。フォトデッサンを制作。1937年自由美術家協会創立会員。51年デモクラート美術家協会を結成。創造美育協会に参加。東京で没、48歳。（出典　わ眼）洋画、版画、写真、コラー、デモクラート、創造美育

瑛　九 Ⅱ（えい・きゅう/1911～1960 年）
宮崎市生れ。本名・杉田秀夫。1936年にフォト・デッサン作品集「眠りの理由」を刊行。37年自由美術家協会創立に参加。既存の画壇や公募団体を批判し、51年デモクラート美術家協会を創立。アイオー、池田満寿夫、磯辺行久、細江英公ら若い作家たちに大きな影響を与えた。油彩、水彩、フォト・デッサン、版画などに挑み、独自の世界を生み出し、現代美術史上に大きな足跡を残した。また、久保貞次郎が提唱した子どもを開放し自由に表現することをめざした美術教育運動のための創造美育協会のブレーンとして参加し、大きな役割を果たした。東京で没、48歳。（荒由）洋画、写真、版画、デモクラート

栄永大治良（えいなが・だいじろう/1925 年～ ）
神戸市生れ。1949年自由美術展に出品。関西独立展受賞。57年自由美術賞受賞、自由美術家協会会員。71年北欧、73年南欧、77年ネパールに取材。80年梅田近代美術館個展。83年東急個展。87年セントラルギャラリー個展。98年、市立枚方市民ギャラリー個展。洋画

江上計太（えがみ・けいた/1951 年～ ）
福岡県生れ。東京芸術大学芸術学科卒、抽象版画やドローイングを制作。モダニズムの文脈と自身の音楽体験をベースにした、ミニマルな構成原理、単純な形体、明快な色彩が特徴的な作品を制作し、平面からレリーフ、そしてインスタレーションへと展開。1992年バングラデシュ・ビエンナーレで最高賞。95年ガスコーニュ・ジャパニーズ・アート・スカラシップの支援作家として南仏で滞在制作。99年度福岡県文化賞。洋画、インスタ

江上茂雄（えがみ・しげお/1912～2014 年）
福岡県生れ。第五太牟田尋常小学校卒業後、三井三池鉱業所建築課入社、以後 45 年間会社勤めをしながら主にクレパス・クレヨンで地元の風景を描きつづける。60歳退職後、水彩画を67歳から30年間続ける。他にも鉛筆による植物細密画や実験的・抽象的な即興絵画、木版画、染め紙など制作した。2014年没、102歳。2018年武蔵野市立吉祥寺美術館で開催。水彩、パス、鉛筆、版画

江川和彦（えがわ・かずひこ/1896～1981 年）
東京生れ。1920年早稲田大学文学部哲学科卒。数年にして美術雑誌に美術評論を発表、以後約50年の間、美術展評を中心に作家論、現代美術の紹介など毎年数多くの論考を執筆した。40年美術問題研究会の会員、49年の美術評論家組合の創立に加わり、50年の改組と51年の美術評論家クラブへの改称後幹事。54年の美術評論家連盟の結成、会員、55年から5年間は常任委員。62年武蔵野美術大学教授。現代美術の動向を注視し、新宿・風月堂画廊では新人紹介企画を10年続け、美術雑誌に執筆した展覧会評は約480に達する。主要著述：26年『民族文化史雑話』美之国、37年『ピカソの芸術（サルバドル・ダリ）（訳）』アトリエ、38年『原始ネグロ芸術の現代への関心』美之国。東京で没、84歳。（引用　東文研）美評、

美教

絵　金（え・きん/1812～1876 年）
土佐生れ。江戸にでて駿河台派の狩野洞益に学ぶ。土佐高知藩の絵師となるが,偽絵をつくり,その地位をうしなう。町絵師として絵馬や,夏祭りの宵宮をかざる台提灯絵をかいた。歌舞伎を主題にした独特な血みどろ絵で知られる。1876年没、65歳。絵金は絵師金蔵の略称。号は洞意。代表作に「双生(ふたご)隅田川」など。江戸後期-明治の絵師

江口　週（えぐち・しゅう/1932 年～　）
京都府生れ。東京芸大卒。1965年現代日本彫刻展で大賞。74年平櫛田中賞。木肌を生かしつつ，表面に走る削り跡が微妙な表情を作り，スケール感の大きい木彫を生む。彫刻、版画

江口　良（えぐち・りょう 1926～1980 年）
佐賀県生れ。1948年佐賀師範学校卒。唐津市で教職。鈴木保徳に師事。53年独立展入選、58年独立賞、61年会員。61～63年アールヌーボォを結成。その後も独立展に出品を続ける。65年「卍」展(クリスタル画廊)、73年「海と花と山高帽」展などの個展開催。79年一艸会を結成する。東京で没、53歳。洋画

江崎寛友（えざき・ひろとも/1910～1984 年）
岐阜県生れ。小山正太郎の不同舎に学び、中村不折、石井柏亭に師事。1934年太平洋画会会員、47年示現会創立に参加、のち理事。58年新日展で特選。1984年没、73歳。洋画

江崎義郎（えざき・よしろう/1891～1938年）
福岡県生れ。満鉄従業員として奉天駅にて勤務中、事故で右腕を失って帰国。失意の中で一念発起して画業を志し、黒田清輝に師事。1926年渡仏。滞欧中に「ピカソ展」に入選 5 回。33年一旦帰国。35年に再度渡欧し、37年帰国。パリの「福島派」グループの一員としても名前が見える。九州で没、47歳。(清水)洋画

江藤純平（えとう・じゅんぺい/1898～1987 年）
大分県生れ。1923年東京美術学校西洋画科卒。24年帝展入選。28、29、33年帝展特選。37年光風会会員、理事、名誉会員。55年日展審査員、58年評議員、69年日展で内閣総理大臣賞、監事、参与。83年小田急百貨店で回顧展。東京で没、89歳。洋画

江藤　哲（えとう・てつ/1909～1991 年）
大分県生まれ。1931年東京高等工芸学校図案科卒。33年熊岡絵画道場に学ぶ。39年東光会会員。新文展無鑑査。47年日展特選。65年日展会員。68、73年欧州巡遊。下村画廊個展、銀彩堂画廊個展。銀座アートギャラリー個展。東武個展。77年東光会副理事長。80年日展で内閣総理大臣賞。86年日展参与。87年日展評議員。71～81年名古屋芸術大学教授。鹿児島市で没、82 歳。洋画、パス、美教

江南史朗（えなみ・しろう/1901～2000 年）
東京生れ。1916～45年博文館勤務。本郷洋画研究所に通う、28、29年木版画、30年日本版画協会展出品、31年同人。料治熊太の主宰する『版芸術』(32～36年)、「土俗玩具集」(35～36年)、「再刊　白と黒」(35年)、「おもちゃ絵集」(36年)に発表。静岡の童土社が主催する展覧会にも参加し、31、32年に出品。童土社の栗山茂が主宰する「飛白」に作品発表。また、武井武雄の年賀状の交換会「榛の会」に、35～53年同人参加。2000年没、99歳。『江南史朗木版画集 昭和初期の東京風景と郷土玩具』(博文館新社89年)/『創作版画誌の系譜』『童土社展目録』。版画、パステル

榎戸庄衛（えのきど・しょうえ/1908～1994年）
茨城県生れ。1925年笠間農学校卒。32年太平洋美術学校洋画科本科卒。33年帝展入選、42年新文展特選、43年新文展に招待出品。41年安宅安五郎、大久保作次郎、鈴木千久馬等が結成した創元会創立に参加、42年創元会会員。49年牛島憲之、須田寿、有岡一郎と立軌会結成、59年まで出品。選抜秀作美術展(朝日新聞主催)や、日本国際美術展(毎日新聞社主催)に出品。茨城県で没、85歳。洋画

榎倉康二（えのくら・こうじ/1942～1995年）
東京生れ。父は榎倉省吾。1966年東京芸術大学油画科卒。68年同大学院修了。グループ・ル・モンに参加。モノ派。69年椿近代画廊で個展。71年パリ青年ビエンナーレで留学賞、72～73年パリ滞在、フロッタージュ、シルクスクリーンの技法を学ぶ。インスタレーション作家。78年東京画廊で個展。79年東京国際版画ビエンナーレで東京都美術鑑賞。81年東京芸術大学美術学部講師、58年同校助教授、93年同校教授。東京で没、52歳。インスタ、洋画、版画、モノ派、美教

榎倉省吾（えのくら・しょうご/1901～1977年）
兵庫県生れ。榎倉康二の父。1927年頃より信濃橋洋画研究所。28年槐樹社展入選、28年二科展入選、34年二科展で特待、42年二科会会員。43年文展無鑑査。46年行動美術協会創立会員。64年アトリエを香川県小豆島に設けた。小豆島町で没、75歳。洋画、版画

榎本千花俊（えのもと・ちかとし/1898～1973年）

東京生れ。1916年鏑木清方に師事。21年東京美術学校日本画科卒。22年帝展に入選。日展委員。清方塾の郷土会や伊東深水、山川秀峰らの青衿会に参加。27年『婦人グラフ』に木版、口絵、表紙絵を担当。1973年没、75歳。日本画、版画、挿絵

江原 順（えばら・じゅん/1927～2002 年）
岐阜県生れ。1951年東京大学文学部哲学科卒。54年雑誌「美術批評」「美術手帖」「ユリイカ」に寄稿、G.アポリネール、ダダ、シュルレアリスムなど、戦前のフランス文芸・美術思潮を紹介。文芸評論家の武井昭夫と交わしたアヴァンギャルド論争、「美術批評」誌上で行われた「シュルレアリスム研究会」など56年ごろの活動で注目された。59年に評論集『私のダダ』『見者の美学』を出版。62年フランスに渡り、国際美術評論家連盟フランス支部員となって『モンパルナス動物誌』を出版。また東京国立西洋美術館の贋作購入事件を告発し、ヨーロッパ美術の日本展をプロモートした。他の著書に『日本美術界腐敗の構造』がある。ベルギーで没、75歳。（引用:コトバンク）美評

江原全秋（えばら・ぜんしゅう？/1893～1978 年）
東京生れ。東京経済大学卒。1955年新世紀美術協会創立会員、以後同展へ出品を続け、73年和田賞、75年大久保賞。鎌倉市で没、85歳。洋画

蛯子善悦（えびこ・ぜんえつ/1932～1993 年）
北海道生れ。北海道在住の画家田辺三重松、橋本三郎に学ぶ。57年武蔵野美術学校図画工作教員養成科卒。61年国展に入選、62年国画会賞、65年国画会会員。72年渡仏、74再渡仏、パリに住み制作、サロン・ドートンヌ会員。日動サロン、画廊で度々個展。パリ市で没、61歳。洋画

胡子修司（えびす・しゅうじ/1957 年～ ）
広島県生れ。多摩美術大学大学院修了。日本版画協会展奨励賞、春陽会展,研究賞、大学版画展買上賞、西武美術館版画大賞展、現代美術選抜展(文化庁主催)、日本版画協会展新人賞、日動版画グランプリ展グランプリ、カンピナス国際版画ビエンナーレ入賞ブラジル)、銅版画集。吉祥寺ギャラリーポエム等で個展。版画

海老塚耕一（えびづか・こういち/1951 年～ ）
横浜市生れ。多摩美術大学美術学部建築科卒。1979年多摩美術大学大学院美術研究科修了。多摩美術大学美術学部教授。主に木、石、金属を素材とした作品を制作している。1986年インド・トリエンナーレゴールド・メダル。91年平櫛田中賞。2003年高島屋文化賞。15年春陽展で岡鹿之助賞。現代美術、彫刻、版画、映像、美教

海老名文雄（えびな・ふみお/1890 年～不詳）
東京生れ。高等商業学校卒。洋画を独学。太平洋画会展、水彩画展に出品。1914年二科展に7点出品。15年二科賞。17年横浜で個展。19年二科会会友推挙。22年平和記念東京博覧会美術館展に出品。22年二科展出品を最後に出品止め、画壇から去る。「欧州では、映画のコーディネイターのような仕事をしていた」随筆が、『文芸春秋』誌に掲載。21年？(23年)渡欧～39年帰国。洋画、水彩

海老名文雄 Ⅱ（えびな・ふみお/1890～没年不詳）
東京生れ。高等商業学校卒業後、1913 年太平洋画会展に出品。14 年第 1 回二科展に出品。15 年第 2 回二科展で＜藪＞が二科賞。17 年第 4 回二科展に出品。横浜で個展。19 年第 6 回二科展に出品。会友となる。20 年第 7 回二科展に出品。21 年渡仏。22 年第 9 回二科展への出品を最後に画壇から遠ざかった。没年不詳。（佐）洋画、水彩

海老原喜之助（えびはら・きのすけ/1904～1970 年）
鹿児島市生れ。1922年上京、有島生馬に師事。川端画学校に学ぶ。23～34年渡仏、藤田嗣治に師事。23年二科展入選。24年サロン・ドートンヌ入選。27年サロン・ド・レスカリエ展にカンピリ、ジャコメッティと三人展。アンリ・ピエール・ロッシュと契約。28、29年NYでロッシュ企画の個展。34年日動画廊で個展。35年独立美術協会会員。50年南日本美術賞。読売アンデパンダン展。59年日本国際美術展最優秀賞。64年芸術選奨文部大臣賞。再渡仏。パリで没、66歳。洋画、版画、水彩

蛯名優子（えびな・ゆうこ/1970 年～ ）
岩手県生れ。1995年多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。91年神奈川県美術展で神奈川県立近代美術館賞。99年にホルベイン・スカラシップ。2004～05年ポーラ美術振興財団在外研修員、06～07年文化庁芸術家在外派遣研修員アムステルダム滞在。日本以外でも韓国やオランダ、スウェーデンやスロバキアで活動。現在日本以外に韓国、リトアニア、スロバキア、オランダでパブリックコレクション。洋画

江見絹子（えみ・きぬこ/1923～2015 年）
兵庫県生れ。1945～49年神戸市立洋画研究所に学ぶ。49年行動美術展入選。50年同展奨励賞。52年行動美術賞。53年行動美術協会会員。53年女流画家協会会員。53～55年渡米欧。56、58年シェル美術賞。抽象画に転じる。58年女流画家協会展で毎日新聞社賞。62年現代日本美術展で神奈川県立近

代美術館賞、ヴェネツィア・ビエンナーレに出品。2004年神奈川県立美術館で個展。15年没、91歳。洋画

江村正光（えむら まさみつ/1934 年～ ）
山口県生れ。1958年東京藝大油絵科卒、60年同大学専攻科修了、国展出品(以降,76 年を除き毎年)、73年国展会員。78年日動サロンで個展開催(80'84')88年日動画廊で個展開催(90'93'98')。94年東京国際美術館で自選展開催。95年日本橋三越本店で個展開催。2013年呼友館で自選展 -無限なる生成-開催。洋画

江守若菜（えもり・わかな/1922～2014 年）
東京生れ。1948年東京美術学校日本画科卒。山口蓬春に師事。53年日展入選。65年日展特選。67年日春展日春展賞。69年日展特選。79年日展特選。2000年第 32 回日展日展会員賞。現在日展参与。2014年没、92歳。日本画

円城寺昇（えんじょうじ・のぼる/1901～1953 年）
千葉県香取郡生れ。1923 年千葉県立茂原農業学校卒、在学中に日本水彩画会に入選。27 年青山熊治に師事、東京美術学校西洋画科入学、藤島教室に入る。29 年第一美術協会展で＜岩＞が協会賞。30 年第 11 回帝展初入選。以後 15 回展まで出品。36 年昭和十一年文展監査展、37 年第 1 回新文展に出品。以後 6 回まで出品し 41 年から無鑑査。41 年第 1 回創元会展に出品。42 年第 2 回創元会展で会員。46 年第 1 回日展に出品。47 年日展で岡田賞。49 年創元会退会。49 年立軌会創立に参加。50 年立軌会退会。53 年 9 月 14 日東京で没、享年 52 歳。(佐)洋画

圓鍔勝三（えんつば・かつぞう/1905～2003 年）
広島県生れ。1932年日本美術学校彫刻科卒。30年回帝展入選。沢田政広に師事。39年文展で特選。47年多摩造形芸術専門学校教授。51年以来日展審査員、65年日展で文部大臣賞、66年日本芸術院賞、70年日本芸術院会員。木彫に明るい叙情性を盛り込み。80年日本彫刻会理事長。82年文化功労者。88年文化勲章。多摩美術大学名誉教授。『円鍔勝三彫刻集』(1983・実業之日本社)、円鍔勝三著『わが人生』(1989・時の美術社)』。川崎市で没、97歳。彫刻、日本彫刻会理事長

遠藤彰子（えんどう・あきこ/1947 年～ ）
東京生れ。武蔵野美術短期大学油絵学科卒。1972年女流画家協会展。77年紀伊国屋画廊で個展。78年昭和会展・林武賞。86年安井賞。90年日本秀作美術展出品。95年日本橋三越本店で個展。96年武蔵野美術大学油絵学科助教授～教授。2004年府中市美術館にて「力強き生命の詩」。07年芸術選奨文部科学大臣賞。14年紫綬褒章。2011年年相模原市民文化表彰。二紀会理事、女流画家協会委員。洋画

遠藤原三（えんどう・げんぞう/1947 年～ ）
長野県生れ。1969年多摩美術大学油画科卒。63年光風会入選、86年光風会展文部大臣奨励賞、光風会理事、監事。2004、07年日展特選、11年審査員、日展会員。洋画

遠藤幸一（えんどう・こういち/1950～2011 年）
東京生れ。1974年東京藝術大学美術学部芸術学科卒。77年同大学大学院美術研究科修士課程(日本東洋美術史専攻)修了。78年富山大学教育学部講師(美学・美術史担当)。82年富山大学教育学部(美学・美術史担当)助教授。金沢美術工芸大学、群馬県立女子大学、東京理科大学等で非常勤講師。93年～2002年高岡市美術館収集美術品選考委員。02～11年同美術館長。長谷川等伯研究が専門。東京で没、61歳。美史研、美術館長、美教

遠藤香村（えんどう・こうそん/1787～1864 年）
会津若松市生れ。藩士・黒河内会山について画法の手ほどきを受けた。文化年間、会津藩絵師・田村観瀾について本格的に狩野派の画法を学び、江戸に出て谷文晁に入門、洋風画を学び、蠣崎波響や書家の石川悟堂らとも交友。1804年姓を遠藤、号を香村と改め、円山四条派の筆法を学ぶため京に上り、森徹山、長山孔寅らと交友を深め、帰郷、須賀川の亜欧堂田善を訪ね、西洋画法の伝授を受けた。会津に油絵を伝えた。1805年京に上り、東東洋、浦上春琴らと交友し、さらに岸駒に入門した。1864年没、78歳。江戸絵師、洋風画

遠藤　享（えんどう・すすむ/1933 年～ ）
甲府市生れ。1959年武蔵野美術学校デザイン科中退。62年桑沢デザイン研究所グラフィックデザイン研究科卒。ドイツ、ユーゴスラビア、ブルガリア、フィンランド世界各国で賞。80年 ADC賞。84年日本国際美術展国立京都近代美術館賞。92年インタープリント国際版画ビエンナーレ、グランプリ。92年 SDA大賞(通産大臣賞)。東京 ADC 会員、GDA 会員。デザイナー、版画

遠藤正三（えんどう・しょうぞう/1907～1982年）
福島県生れ。福島師範学校卒。小中学校教師。洋画家、1952年独立美術協会会員、いわき市内の小

中学校で学校教育に携わる、64年創立のいわき美術協会副会長。1982年没、75歳。洋画、美教

遠藤 董（えんどう・ただし/1853～1945 年）
鳥取市生れ。1875年広島師範卒。76年上京、高橋由一の画塾「天絵社」で西洋画を習得。78年師の油絵を持参し、帰郷、鳥取に西洋画を広め、鳥取洋画壇創始者。1908年鳥取高等小学校校長を辞任するまで23年間初等教育。90年因幡高等小学校の専任校長だった時、学校内に「久松文庫」の名称で図書収集を開始。鳥取県の近代図書館のはじまりとなった。1902年鳥取市教育会長。18年私立鳥取図書館の建物、図書などの一切を鳥取市に寄贈し、鳥取市立図書館長。08年私立鳥取女学校設立、校長兼教諭。10年私立鳥取盲唖学校（現：県立盲学校・県立鳥取聾学校）創立、初代校長、県特殊教育確立に尽力。1945年没、93歳。図書館、美普、美教、洋画

遠藤田一（えんどう・でんいち/1765～1834 年）
福島県生れ。別号に如洋、曙山楼、晩年は趣雲斎文豊と名乗。亜欧堂田善に洋風画を学んだ。銅版画を学んだことは不明。1822年田善が没した年に田善の肖像を描いた。ほかに、須賀川の俳人・石井雨考の肖像も描いている。1834年没、70歳。江戸後期の洋風画絵師

遠藤典太（えんどう・てんた/1903～1991 年）
福岡県生れ。三井三池工業学校中退。1924 年本郷洋画研究所に学ぶ。26 年第4回春陽展に初入選。29 年春陽会研究所に学ぶ。石井鶴三、中川一政に師事。31 年第 9 回春陽展で春陽賞。40 年紀元二千六百年奉祝展に出品。47 年第 24 回春陽会展で春陽会会員。68 年資生堂ギャラリーで開催の三歳会展に出品、以後 17 回まで出品。91 年 8 月 8 日横浜市で没、享年 88 歳。（佐）洋画　39

お

小穴隆一（おあな・りゅういち/1894～1966 年）
長崎県生れ。開成中学校にすすんだが、中退し、太平洋画会研究所に学び、中村不折に師事。太平洋画会展、1922年二科展に出品。春陽展に出品。26年春陽会無鑑査。27年春陽会系「麗人社」に出品。34年春陽会会員。芥川龍之介と交游。57年まで出品。随筆、俳句、挿絵も描く。66年没、72歳。洋画、挿絵、版画

及川正通（おいかわ・まさみち/1939 年～ ）
大連市生れ。63年日宣美展入選。64～68年主婦と生活社のデザイン課勤務、『週刊女性』デザイン担当。68～72年横尾忠則とザ・エンドスタジオを発足、フリーランスのイラストレーター。72年、『平凡パンチ』に「ドッ！キュリメント劇画」を連載。赤塚不二夫責任編集の『まんが NO.1』に「ノンセクション劇画」を連載。75～2011年雑誌『ぴあ』の表紙を担当。1300点以上を描く。2002年『及川正通イラストレーションの世界-ぴあの表紙を飾った 1000 の顔』（ぴあ）刊行。2012 年横須賀美術館で個展。イラスト、劇画、表紙

及川康雄（おいかわ・やすお/1891～没年不詳）
三重県生れ。1915 年東京美術学校西洋画科本科卒。27 年第 8 回帝展に初入選。以後 10 回まで出品。30 年織田一麿らと洋風版画協会を創立、第 1 回展に出品。31 年日本版画協会の創立会員。33 年巴里日本現代版画展準備展に出品。没年不詳。（佐）版画、洋画

大河内夜江（おうこうち・やこう/1893～1957 年）
山梨県生れ。高等小学校卒、上京、白馬会洋画研究所に学び、光風会展、日本水彩画会展入選。28歳で帝国美術展入選。1924年京都絵画専門学校選科に学び、菊池契月の画塾に入門。25年帝展入選、26、27年特選特選。28年推選、無鑑査出品者。第 15 回帝展まで連続出品。一時東京に転居するが京都に戻り以後個展を発表の場とし、晩年再び京都に転居して制作。1957年没、64歳。日本画

大池宗作（おおいけ・そうさく/1916～1994 年）
松本市生れ。中信地域に洋画界の基礎を築いた宮坂勝、小林邦に師事。1956年大池絵画研究所を設立し、30年以上にわたり絵画指導にあたりました。美術団体連合展に出品。67年国画会会員。1994年没、78歳。2017年朝日美術館で個展。洋画、美教、絵画研究所

大石可久也（おおいし・かくや/1924～2018 年）
兵庫県生れ。1943年兵庫師範学校卒。51年京都大学で美学美術史を学ぶ。59年一陽会展で特待賞。60年安井賞展入選。64年一陽会会員。一陽会常任委員。西宮美術協会副代表。94年兵庫県文化賞。2004年大石可久也美術館開館。07年地域文化功労者、文部大臣表彰。2018年没、94歳。洋画、個人美術館、美普

大石七分（おおいし・しちぶん/ 1890～1959年）
名古屋市生れ。西村伊作の末弟。叔母・大石くわに預けられる。1904年同志社普通科に入学。06年渡米し、ボストンの高校に入学。18年帰国後、二科展出品。東京に自邸を購入。その後、家族で渡仏。東京・阿佐ヶ谷に伊作の自邸を設計、監修する。自ら設計

した家を世田谷・大原に建て、息子家族と住む。東京で没、69歳。(田村)洋画

大石七鳳（おおいし・しちほう/1907～1984 年）
徳島県生れ。元独立美術協会会友。白日会会員。1984年没、77歳。洋画

大石　隆（おおいし・たかし/1915～1977 年）
福岡県生れ。1934年県立中学明善校卒。その後台湾の新竹師範学校演習科に学ぶ。74年まで久留米の市立学校の教師。48年来目会展で活躍し、55年来目賞。伊東静尾に師事、二科展に出品、71年特選、72年会友。久留米市美術展で受賞を重ね、60年久留米市文化功労賞。筑後画壇で活躍。1977年没、62歳。洋画

大石哲路（おおいし・てつろ/1908～1990 年）
満州生れ。川端画学校卒。1935年煌土社、38年新美術人協会各会員となる。48年創造美術に参加し、51年新制作協会第 1 回展に出品。68年日韓交流五元美術連盟を結成、五元美術連盟会長。日本画の作品に「飛行雲」「静」、童画に「白いすずめ」など。洋画、日本画、童画

大石輝一（おおいし・てるかず/1894～1972 年）
大阪生れ。1916年上京、本郷洋画研究所に学ぶ。24年大阪市美術協会展に出品。26年岸田劉生主宰の草土社の影響の元「艸園会」を結成。32年艸園美術研究所を開設。30年兵庫県美術連盟の結成に参加。34年茶房「ラ・バボーニ」を開店。45年神戸洋画会を結成。60年「アート・ガーデン」の建設を始めた。72年没、77歳。洋画、美教、美術研究所

大泉茂基（おおいずみ・しげもと/1913～1960 年）
宮城県生れ。1934年東北学院高等部文科を退学。49年春版画詩集「けやき」を出版。51年NHK 仙台放送局の音楽番組「詩と音楽の時間」で朗読される詩の原稿担当。57年抽象版画が高い評価、初めての個展開催。抽象版画に新境地。1960年没、46歳。作品は宮城県美術館に所蔵。版画

大泉米吉（おおいずみ・よねきち/1910～2002年）
宮城県生れ。1931年東京美術学校卒、和歌山県、新潟県、東京都、鹿児島県の旧制中学で48年まで美術の教師。大阪府庁に勤務し、府のポスターや出版物にカットや挿絵を描た。79年大阪百景展を開いた。毎日新聞がこれを機に十景を選び紙面化した。80年毎日新聞社大阪社会部が「大泉米吉作品集　大阪十二景」(絵葉書)(30)を発行。二元会重鎮のち顧問、総理大臣賞、紺綬褒章。洋画、挿絵、水彩

大内香峰（おおうち・こほう/1940 年～　）
日本画、墨彩画、現代詩画、俳画、また新窮地を開いた。木口木版画多色摺り、蔵書票やガラス絵など、広い分野で、その独特の土着的な郷愁を誘う作風を浸透させて、個展で発表。日本画、墨彩、詩画、俳画、版画、ガラス、蔵書

大内青坡（おおうち・せいは/1896～1974 年）
東京生れ。麻布中学校卒、東京美術学校西洋画科卒。1917年文展入選。大乗美術会、五明会創立。太平洋画会会員。34年作品発表を停止。1974年没、78歳。洋画

大内青圃（おおうち・せいほ/1898～1981 年）
東京生れ。兄は洋画家の大内青坡。1922年東京美術学校彫刻家卒、高村光雲に師事。27年日本美術院同人。36年より帝展、文展に出品し、戦後は日展に出品。58年日本美術院評議員。60年院展で文部大臣賞。63年日本芸術院賞。69年日本芸術院会員。71年勲三等瑞宝章受章。東京で没、82歳。彫刻、仏師、版画

大内田茂士（おおうちだ・しげし/1913～1994 年）
福岡県生れ。県立朝倉中学校卒。1937年上京、新宿絵画研究所で鈴木千久馬に師事。43～47年国展出品、47年国画賞。48年示現会を創立、51年理事長。51年日展で特選、朝倉賞、63年日展審査員、64年日展会員、78年評議員、84年日展で内閣総理大臣賞、87年日展出品作88年日本芸術院賞恩賜賞。89年理事、常務理事、92年理事長。90年日本芸術院会員。92年資生堂ギャラリー個展。東京で没、80歳。洋画

大浦周蔵（おおうら・しゅうぞう/1890～1928 年）
東京生れ。溜池洋画研究所に学ぶ。1913年『美術週報』誌への寄稿から、丸善に勤務。21年未来派美術協会展に出品。23年未来派美術協会習作展に参加、詩人洋画展に出品。「MAVO」の創立に参画、翌年脱退し、木下秀一郎の提唱によって具体化した「三科」の結成に参加、会員。24年丸善画廊を開設。25年三科会員展、三科公募展に出品。26年「単位三科」に参加し、27年三科形成芸術展に出品。1928年没、38歳。洋画、未来派、画廊

大浦信行（おおうら・のぶゆき/1949 年～　）
富山県生れ。1971年國學院大學卒。72年8mm 映画製作を開始。76～86年NYに滞在し、その内7年間は荒川修作の元で助手。77年リュブリアナ国際版

画ビエンナーレに出品。78年クラコウ、ノルウェー、フレッヘンの各国際版画ビエンナーレ出品。86年から彫刻制作を開始。86年富山県立近代美術館事件後に95年天皇作品問題を描いた映像作品発表。2002年には『日本心中』の続編である『針生語録』を製作。09年沖縄県立美術館の「アトミックサンシャインの中へ in 沖縄 ― 日本国平和憲法第九条下における戦後美術」展で展示拒否。2019年あいちトリエンナーレの企画展「表現の不自由展・その後」、『遠近を抱えて PartII(4 点)』が出展。映像、彫刻、版画

大浦信行 II (おおうら・のぶゆき/1949 年～)
富山県生れ。1971年國學院大學卒。72年 8mm 映画製作を開始。プリントアートギャラリーで個展。74年東京、天井桟敷館で映像個展。76～86年NY滞在、7年間は荒川修作の助手。77年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ、84年東ベルリンのインターグラフィック'84、85年リュブリアナ国際版画ビエンナーレに出品。86年彫刻制作。95年天皇作品を描いた映像作品《遠近を抱えて》発表。2002年には『日本心中』の続編『針生語録』を製作。映像、版画、彫刻

大浦正夫 (おおうら・まさお/1910～1997 年)
熊本県生れ。松岡映丘に師事。東京美術学校卒。1933年帝展入選。36年杉山寧らと瑠爽(るそう)画社を結成。51年から山口蓬春に師事。73年日展で文部大臣賞。78年芸術院賞。88年芸術院会員。1997年没、87歳。日本画

大兼 實 (おおかね・みのる/1908～1976 年)
東京生れ。1926年太平洋画会研究所に入所、33年文化学院美術科卒。29年二科会展入選、34年中国、欧州取材。37年渡欧ローマの国立美術学校に学ぶ。フレスコ画法を研修、パリ、アカデミー・グラン・ショミエールで学び、44年まで滞在。サロン・ドートンヌ、サロン・ナショナル・デ・ボザール、サロン・ド・チコイレリーに出品、43年にはベルリンで個展。45年に帰国し、46年日展出品、一水会会員。47年日展委員を依嘱。二紀会創設に際してこれに参加し、以後、二紀会に作品を発表すると共に監事、委員。東京で没、67歳。洋画

オーガフミヒロ・大鋸史浩 (おーが・ふみひろ/1971年～)
愛媛県生れ。1991年大阪総合デザイン専門学校絵本科修了。大阪専門学校絵本科特待生として学ぶ。専門学校修了後、デザイン業界に勤めるがその後独立し絵画の道で生きることを決意し、95年初個展、個展中心に発表。2016年詩画集(夜鳥の手帳)自著(ギャラリー枝香庵出版企画)。洋画

大川栄二 (おおかわ・えいじ/1924～2008年)
桐生市生れ。桐生高等工業専門学校色染化学科卒。1948三井物産株式会社に入社。69年株式会社ダイエーに入社。76年マルエツ株式会社代表取締役社長。81年株式会社ダイエー取締役副社長、同年株式会社ダイエーオーエムシー(旧ダイエーファイナンス)代表取締役会長。88年玉川近代美術館名誉館長。89年財団法人大川美術館が開館理事長兼館長。95年群馬県総合表彰、2005年群馬県文化功労賞。大川栄二コレクションは40年間、6500点。2008年没、84歳。(引用 東文研)美術館長、コレクター

大川逞一 (おおかわ・ていいち/1899～1992年)
千葉県生れ。1927年東京美術学校彫刻科卒。高村光雲らに師事。同校研究科に進学し、3年間在籍した。32年二科展に入選。以降、団体に属さず、日本彫刻史を独自に研究しつつ、法隆寺慈恩大師像、81年奈良薬師寺の玄奘三蔵法師像等を制作し、日光輪王寺の薬師如来像などの補修にも当たった。千葉県で没、93歳。仏像彫刻

大河原愛 (おおかわら・あい/1979 年～)
東京生れ。2002年武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業、同大学院入学、04年武蔵野美術大学大学院造形研究科日本画コース修了。主な個展は12年大阪高島屋、11年Hellion Gallery アメリカ、08年/10年/13年新宿高島屋、09年名古屋松坂屋本店。国内外のアートフェアに参加。昭和女子大オープンカレッジ元講師。日本画

大河原隆則 (おおかわら・たかのり/1964 年～)
宮崎県生れ。国立福島大学教育学部美術科卒。白沢菊夫、佐藤忠良に師事。1984年全日本美術協会展で会友。86年新制作展で入選。95年福島県展で県美術大賞(最高賞)。97年木内克美術大賞展、2000年自由美術に出品、05年クンスト・イン・ハイデルブルク賞。06年マルタ国観光文化大臣賞。16年新構造展、会員、会員賞・奨励賞。彫刻

大川 亮 (おおかわ・りょう/1881～1958 年)
青森県生れ。東奥義塾に入学、八戸中学に転校。農業実科(現東大農学部)入学。東京美術学校に入学し、岡田三郎助について学んだ。1903年帰郷、青森御料林局に勤務。青森県初の「洋画研究所」を第三中学校の教室を借りて開所。07年大光寺村村会議員。13年農事研究所を組織、集落毎に農事実行組合を組織。1958年没、77歳。洋画、洋画研究所

大木 茂（おおき・しげる/1899～1979 年）
広島県生れ。斎藤与里に師事。帝展、新文展、日展に出品。東光会の初代広島支部長を務め、広島の洋画壇をリード。東光会委員。1979年没、80歳。洋画

大木 卓（おおき・たかし/1899～1969 年）
東京生れ。官立千葉医学専門学校卒。薬剤師の免状。家業の大木同名会社の副社長時代を経て大木製薬会社取締役会長。白日会、自主連立展、光風会等へ出品入選。55年太平洋画会会員、委員、同会に52年～出品続けた。1969年没、70歳。洋画

大口 登（おおぐち・のぼる/1901～1967 年）
愛知県生れ。安藤邦衛が名古屋で開いた画塾に学ぶ。ここで猪飼重明、福原武夫、戸川金雄、吉川三伸らと会う。1930年「一九三〇年協会」展入選。32年二科会展に出品。1939年美術文化協会創立同人。新象作家協会会員。1967年没、67歳。洋画

大口理夫（おおぐち・まさお/1909～1948 年）
愛知県生れ。1932年東京帝国大学文学部美学及美術史科卒。日本国宝全集の編輯にたずさわる。脇本楽之軒の東京美術研究所或は国際文化振興会に勤務。文部省国宝調査室に嘱託として勤め、機構改正に際し国立博物館に転じた。この頃から病床に在り、遂に再び立たなかつた。彫刻史専攻の新進学者として又美術評論家として招来の大成を期待されていた。著書に『日本彫刻史研究』がある。東京で没、39歳？（引用:東文研）美史、彫刻

大國章夫（おおくに・あきお/1923～2006 年）
満州生れ。画家を志し、猪熊弦一郎に師事。1946年中央大学卒。48年相原求一郎に会う。50年新制作協会会員。88年「大國章夫」画集刊行。アジア青年美術展、日本秀作美術展、安井賞展等に出品。2006年没、83歳。洋画

大国貞蔵（おおくに・ていぞう/1890～1950 年）
大阪生れ。元帝展審査員大国貞蔵　1916年東京美術学校彫刻科卒、16年文展初入選以来終始官展に作品を発表し、20、21年帝展で特選、22年推薦。同年東京平和博覧会彫刻部審査員、23年帝展審査員。彫塑界の重鎮。29～30年文部省より嘱託され外遊。極東選手権競技大会の優勝楯「勝者に栄光あれ」や大阪ビルデイング玄関上部の「少女と鷲」がある。23年関東大震災以来、関西にあり、大阪近辺の彫塑家の育成に貢献。芦屋市で没、61歳。彫刻

大久保為世子（おおくぼ・いよこ/1897～1973 年）
東京生れ。実践高等女学校卒。1932年より小林萬吾。耳野卯三郎に師事。光風会展に出品。34年朱葉会展で朱葉会賞、同会会員。女流画家協会会員。47年青葉会（国際親善）創立、理事。1973年没、76歳。洋画

大久保英治（おおくぼ・えいじ/1944 年～ ）
西宮市生れ。1967年日本体育大学卒。75年京都教育大学養護教育課程専攻科修了。78年流木作品制作。80年度々渡英。木、石、自然物を素材として表現するランド・アート作家と交流、フィールドワークに基づく独特の作風確立。99年徳島県立美術館個展。2005年西宮市大谷記念美術館個展。廃材利用フィールドワーク

大久保喜一（おおくぼ・きいち/1885～1948 年）
埼玉県生れ。東京開成学校卒。1911 年東京美術学校西洋画科本科卒。岡田三郎助に師事。13 年第 2 回光風会展で今村奨励賞。14 年東美西洋画科研究科卒業。15 年福島県石川郡私立石川中学校に奉職。18 年同校退職。埼玉県立熊谷中学校に奉職。19 年熊谷周辺の画家を中心に坂東洋画会を創立。22 年第 4 回帝展に初入選。22 年平和記念東京博覧会に出品。26 年聖徳太子奉賛美術展委員。27 年白日会会員。42 年熊谷中学校を退職。47 年熊谷高校で回顧展。48 年 5 月 5 日没、享年 63 歳。（佐）洋画、美教

大久保作次郎（おおくぼ・さくじろう/1890～1973 年）
大阪生れ。1915年東京美術学校西洋画科卒。16，17，18年文展で連続特選。23～27年渡仏。38年槐樹社会員。39年創元会創立会員。55年新世紀美術協会創立会員。60年年日本芸術院賞を受賞。63年日本芸術院会員。東京で没、82歳。（出典 わ眼）洋画、版画

大久保実雄（おおくぼ・じつお/1911～1977 年）
佐賀県生れ。1934年帝国美術学校本科卒、37年独立展入選。50年二紀展に出品、57年同人、60年同人優賞、61年二紀会委員。71年鍋井賞、72年二紀会理事、75年菊華賞。武蔵野美術大学評議員。東京で没、66歳。洋画

大久保泰（おおくぼ・たい/1905～1989 年）
豊橋市生れ。山本鼎に師事。1928早稲田大学商学部卒。28～59年第一銀行。31～32年渡欧、ロンドンで野口弥太郎を知り、兄事。帰国後は児島善三郎に兄事。39年独立展に出品、47年独立賞、49年岡田賞、50年独立美術協会会員。52～57年新樹会

会員。日動画廊で個展。文筆活動も活発にし、特に後期印象派の画家たちの巻を執筆、西洋近代画家たちを広く世に紹介した。美術評論家。東京で没、83歳。洋画、美評

大久保百合子（おおくぼ・ゆりこ/1904～1945 年）
千葉県生れ。旧姓渡辺。1921 年青山女学院卒。朱葉会会員。 24 年～27 年にかけて渡仏、パリのゲーテ研究所に学ぶ。大久保作次郎と結婚。第 8 回帝展に初入選。以後 15 回展まで出品。37 年第 1 回新文展で無鑑査。以後第 6 回まで出品。40 年紀元二千六百年奉祝展。44 年戦時特別展に出品。45 年 10 月 30 日疎開先で没、享年 41 歳。（佐）洋画

大熊 峻（おおくま・しゅん/1933～2013 年）
京都市生れ。1956年京都学芸大学特修美術西洋画科卒。55年石原薫らと「目撃者」を結成。56年京展、行動美術展に出品。68年行動美術協会会員。71年京展審査員。梅田近代美術館、京都文化博物館、梅田画廊で個展。95年紺綬褒章。2013年没、80歳。洋画

大倉孫兵衛（おおくら・まごべえ/1843～1921 年）
東京生れ。父から絵草紙出版の錦栄堂万屋をつぐ。1875年大倉書店、89年大倉洋紙店を創業。絵草紙屋・萬屋を開店、主に豊原国周、昇斎一景、3 代目歌川広重、落合芳幾、武田幾丸、月岡芳年、歌川芳虎、4 代目歌川国政、楊洲周延、小林進斎、井上探景、安達吟光、東洋斎斐章らの開化絵、戦争絵などを出版。1904年森村市左衛門らと日本陶器を設立。陶器,雑貨などの輸出に力をそそいだ。1921年没、79歳。絵草紙屋・萬屋開店、明治-大正時代の実業家

大倉正愛（おおくら・まさよし/1868～1903 年）
福岡県生れ。祖父の種周は測量術、父の種教は西洋軍学で藩に仕え、ともに絵の才能に秀でていた。1900年福岡県出身者として最初の東京美術学校西洋画科卒業生。明治美術会に出品し、その後継団体の太平洋画会の結成参加し、将来を嘱望されたが、1903年没、35歳。高島野十郎の叔父にあたる。洋画

大黒愛子（おおぐろ・あいこ/1937～1995 年）
福岡市生れ。1955年福岡雙葉学園高等部洋裁科卒。田中冬心、寺田健一郎に洋画を学び、前衛芸術家集団九州派に加入。読売アンデパンダン展に出品。60年小幡英資との共同自宅アトリエで画塾を開き、以後晩年まで児童の絵画教育に取り組む。74年元九州派の田部光子とともに九州女流画家展を創設。1993年由布院空想の森美術館にて個展開催。1995年没、58歳。洋画、美教、九州派

大河内信敬（おおこうち・のぶひろ/1903～1967 年）
東京生れ。1928年明治大学商科卒。18，19年頃、水彩画を板倉賛治、版画を小泉癸巳男に学ぶ。太平洋画会研究所に学ぶ。岡田三郎助に師事。30，31年本郷絵画研究所で寺内萬治郎に師事。34年光風会展で受賞、37年渡欧、40年光風会会員、光風会展で岡田賞。47年朝井閑右衛門らと新樹会を結成。東京で没、64歳。水彩、版画

大古田艶子（おおこだ・つやこ/1909～1982 年）
埼玉県生れ。1968年光風会会員。日展会員。1982年没、72 歳。洋画

逢坂恵理子（おおさか・えりこ/1950 年～ ）
東京生れ。学習院大学文学部卒。1994年水戸芸術館現代美術センター主任学芸員。97年～2006年まで同センターで芸術監督。07～09年森美術館のアーティスティック・ディレクター。09～20年横浜美術館館長。19年国立新美術館館長。現代美術国際展を手掛けてきた。第 3 回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（1998）日本部門コーキュレーターをはじめ、第 49 回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2001）日本館コミッショナー、第 4 回から第 7 回の横浜トリエンナーレにおいて、総合ディレクター、組織委員会委員長、組織委員会副委員長を務めた。美術館長

大沢海蔵（おおさわ・かいぞう/1906～1971 年）
名古屋市生れ。1924年川端絵画研究所に入り辻永に師事。松下春雄と共同生活。26～33年サンサシオン展に出品。28年光風会展で光風会賞。34年光風会会員。40年岡田賞。52年相互賞。67年光風会理事。28年帝展入選。38年新文展で特選。58年日展会員。56～57年渡欧。60年日展評議員。61年新日展で文部大臣賞。65年名古屋画廊、68，70年名古屋丸善画廊で個展。東京で没、65歳。洋画

大澤邦雄（おおさわ・くにお/1912～1989 年）
長野県生れ。立教大学卒。本郷洋画研究所に学ぶ。第一美術協会会長。日本山林美術協会会員。1989年没、77歳。洋画

大沢昌助（おおさわ・しょうすけ/1903～1997 年）
東京生れ。1928年東京美術学校西洋画科卒。42年二科賞。43年二科会会員。54年多摩美術大学教授。65年国際形象展で受賞。81年池田20世紀美術館で個展。91年練馬区美術館で回顧展。95年中村彝賞受賞。東京で没、93歳。（出典 わ眼）洋画、版

画、水彩50

大澤鉦一郎（おおさわ・せいいちろう/1893～1973 年）
愛知県生れ。1914年東京高等工業学校図案科中退。絵は独学。17年宮脇晴らと「愛美社」を結成。19、20年院展洋画部入選。32 年春陽会賞第2席。36年帝展無鑑査。42～71年常滑実業女学校美術講師。46年日展で特選。49年春陽会会員。64年CBC文化賞。71年常滑市立図書館で画業60年回顧展。73年没、79歳。（出典 わ眼）洋画、美教、「愛美社」を結成

大澤 寛（おおさわ・ひろし/1924～2007 年）
埼玉県富士見市生れ。1949年東京美術学校師範科卒。49～87年川越高等学校で美術教師を務める。2007年没、83歳。（出典 わ眼）洋画、美教

大澤正夫（おおさわ・まさお/1916～1990 年）
東京生れ。1940年東京美術学校油画科卒。白日会委員。日展会友。1990年没、73歳。洋画

大沢康夫（おおさわ・やすお/1939年～ ）
東京生れ。大沢昌介の長男。1962年多摩美大図案化卒、67年同大学大学院修了、デザイン科専任講師。70年学園紛争で、教職をはなれ、制作活動に専任。84年鉛筆による作品を発表、以降、東京をはじめ各所で鉛筆作品を中心に個展。現在に至る。99年鉛筆画集『エロスコスモス』を美術出版社より刊行。洋画、鉛筆

大下藤次郎（おおした・とうじろう/1870～1911 年）
東京生れ。1891年頃中丸精十郎に学ぶ。93年明治美術会会員。98年豪に取材。1900年パリ万国博物館に出品。01年太平洋画会創立に参加。02～03年渡米のち渡欧。05年水彩画研究団体「春鳥会」（現、美術出版社）創立、『みづゑ』創刊。07年日本水彩画会研究所を設立。水彩画の普及に努めた。東京で没、41歳。水彩、日本水彩画会研究所を設立、「みづゑ」創刊、版画、美普

大下正男（おおした・まさお/1900～1966 年）
東京生れ。大下藤次郎の長男。（1905年藤次郎は美術雑誌〝みづゑ〟を発行、11年没、母の春子が刊行を継続）。1925年早稲田大学建築学科卒。曽根・中条建築事務所に勤務。38～41年岡本馨と大下・岡本建築事務所を自宅に設けた。〝みづゑ〟は赤城泰舒に代わって大下正男の編集となり、水彩専門の記事から一般洋画関係に内容を変化。41年美術図書出版に専念し、『みづゑ』は『新美術』と改題し創刊号を出し、18年の第二次統制に際しては中心となって統合に当たり日本美術出版株式会社を設立し、『美術』を19年1月から発行した。46年『美術』を『みづゑ』の名称に戻し、『三彩』を発行。48年『美術手帖』、52年『美術批評』を創刊。『美学』『ミューゼアム』研究雑誌発行に協力。1966年没、66歳。美術雑誌、みづゑ〟の編集

大島士一（おおしま・しいち/1911～1997 年）
東京生れ。1937年東京美術学校油画科卒。30年独立美術展に出品。41年新文展入選、43年文展特選、49年日展で岡田賞、64年新日展で菊華賞、67年会員、78年評議員、93年参与。52年高島屋日本橋展で個展。65年新世紀美術協会会員、66年新世紀展で黒田賞、67年紅珠賞。82年スペインに取材。97年『大島士一画集』を求龍堂より出版。洋画

大島清次（おおしま・せいじ/1924～2006 年）
宇都宮市生れ。1951年早稲田大学文学部卒。栃木県立美術館の副館長、館長。86～2005年世田谷美術館長。西洋近代美術を中心にした翻訳、著述、評論活動、80年に刊行した『ジャポニスム:印象派と浮世絵の周辺』(美術公論社)は、今日までのジャポニスム研究にあって先駆的で本格的な研究業績。美術評論家連盟の常任委員。82年公立美術館 35 館と読売新聞社、日本テレビ放送網が参加した美術館連絡協議会設立に尽力。美術館長時代、国内美術館の問題点を現場から指摘し、改善策を積極的に提言。『美術館とは何か』(青英舎、1995年)。同書の続編として刊行された『「私」の問題:人間的とは何か』(青英舎、2001年)。栃木県で没、82歳。（引用 東文研）美評、美史研、美術館長、美教、美術館の専門家

大島辰之助（おおしま・たつのすけ/1892～1973年）
茨城県生れ。太平洋美術会研究所に学ぶ。岡田三郎助に師事。太平洋美術会会員。1973年没、81歳。洋画

大島哲以（おおしま・てつい/1926～1999 年）
名古屋市生れ。1948年中村貞以に師事。55年上京。60年新制作展（日本画）に出品。羽黒洞、東京・銀芳堂画廊、日本画廊で発表。71～72年文化庁在外研修員（日本画家ではじめて）として渡欧、主にウィーン工芸大学で幻想絵画を研究。74年从会を結成。装丁画も手掛けた。日本のシュルレアリスム代表作家の一人。99年没、73 歳。日本画、洋画、版画、装丁ウイーン幻想派

大城晧也（おおしろ・こうや/1911～1980 年）
那覇市生れ。1934年東京美術学校西洋画科卒、30年白日会展入選。旺玄社展入選。36年開南中学の美術教師。38年二科展入選、49年沖縄美術展覧会創設に参加。50年琉球大学応用学芸学部芸術科助教授。56年二科会沖縄支部結成、責任者、64年二科会会員、67年会員努力賞。49年沖縄美術連盟幹事。50年琉大応用学芸部芸術科助教授。69年大丸

東京店、71年日動サロン、73年京成百貨店画廊で個展。沖縄県で没、69歳。洋画、美教

大城真人（おおしろ・まこと/1958 年～ ）
富山県生れ。東京学芸大学美術学科、ナント美術学校卒(仏)。1989年ピィポー美術学校講師(仏)。95年サロン・デ・ソニエールにてピュブリック賞。フランス国内具象・抽象アートフェスティバル最高賞。97年サロン・デ・サンテニャン・ドグランリュー絵画部第一賞。2002年フランス郵政省 2003 年カレンダー採用。04年山之内製薬 2005 年度カレンダー採用。現在、フランスナント在住。洋画

O Jun（オー・ジュン/1956 年～ ）
東京生れ。1982年東京芸術大学大学院修士課程美術研究科修了。82年ギャラリー泰明で初個展。84年スペイン、バルセロナに滞在、翌年帰国。90年ドイツ、デュッセルドルフに渡航、94年帰国。96年「撃墜王」「秋水」他のリトグラフを制作。2000年横須賀・カスヤの森現代美術館で個展。02年大阪・国立国際美術館で個展。洋画

大須賀力（おおすか・つとむ/1906～2009 年）
東京生れ。1931年東京美術学校卒。建畠大夢に師事。32年帝展特選。50年東京美術学校の昭和6年卒業の有志で六窓会を結成。73年日展内閣総理大臣賞。76年千葉県文化功労者。78年勲四等瑞宝章受賞。94年市川市名誉市民。2005年市川の文化人展「彫刻家　大須賀力　白寿記念展」開催。千葉県で没、103歳。彫刻

太田喜二郎（おおた・きじろう/1883～1951 年）
京都市生れ。1908年東京美術学校西洋画科卒。08～13年ベルギーに留学、ガン市立美術学校に入学、エミール・クラウスに師事。新印象派の画風を習得。14年東京大正博覧会で二等賞。14、15年文展で二等賞。帝展、新文展、日展審査員。25年日展参事。18年光風会会員。47年京都市立美術専門学校教授。50年京都学芸大学教授。京都で没、67歳。洋画、美教

太田三郎（おおた・さぶろう/1884～1969 年）
愛知県生れ。1901年上京、白馬会洋画研究所で黒田清輝らに師事。日本画を寺崎広業に学ぶ。13年文展三等賞。18年加藤静児らと「愛知社」を結成。20～22年渡欧、フォーヴズム、キュビスムの影響を受ける。24年光風会会員。33年帝展審査員。46年中部美術協会委員長。55～60年愛知県文化会館初代館長。挿絵も描いた。東京で没、84歳。洋画、日本画、挿絵、版画

大竹茂夫（おおたけ・しげお/1955 年～ ）
神戸市生れ。1979年京都市立芸術大学美術学部卒。81年同校美術専攻科修了。文化庁芸 術家国内研修員。独特の幻想的作品で早くから注目。82年青木画廊個展、2002年神戸・ギャラリー島田個展。09年 NHK「熱中時間・忙中趣味あり」に出演、冬虫夏草に熱中する画家と紹介。洋画

大竹伸朗（おおたけ・しんろう/1955 年～ ）
東京生れ。1974年武蔵野美術大学造形学部油絵学科に入学、75年渡英、デビッド・ホックニーやラッセル・ミルズらと親交。80年大学卒業後に再度渡英。帰国後82年に東京のギャルリー・ワタリ(現、ワタリウム美術館)個展。85年ロンドンの現代芸術研究所(ICA:Institute of Contemporary Arts)で個展。「LTD/Psychedelic Magazine」(1981)を皮切りに刊行されたアーティスト・ブックは 30 冊を超えた。スクラッププブックなども多数制作、これらのアーティスト・ブックは、スロバキアのプラチィスラヴァ世界絵本原画コンクール金牌(1995)、第 35 回造本装丁コンクール日本書籍出版協会理事長賞(1998)。2006年東京都現代美術館で開催された「全景展」は、大規模な回顧展。版画、コラージュ、インスタレーション、音楽、挿絵、装幀、アーティスト・ブック、現代美術、洋画、現代美術、コラ、絵本

太田清蔵（おおた・せいぞう/1888～1977 年）
福岡市生れ。修猷館では、同期の児島善三郎や 2 年下級の中村研一らと共に、絵画同好会「パレット会」を結成。東大卒業後、三井銀行に入社し、3 年間勤務後に退社。1922年から米英を 1 年間回って、金融界、保険業界を視察する。23年にシカゴ美術館を訪ねた際に、浮世絵が日本の代表的絵画であると認識。浮世絵が欧米に膨大な数量流出していた実情を嘆き、半世紀以上に渡り浮世絵の蒐集に努め、約 12000 点のコレクションを集大成。1977年没、83歳。遺族はその遺志を受け、太田のコレクションの一般展示を目的に、1980年太田記念美術館を開館。福岡市美術館に太田コレクションが 383 点(古美術 141 点、近現代美術 242 点)寄贈、青木繁《「黄泉比良坂」習作》、和田三造《博多繁昌の図》などが収めらた。浮世絵コレクター、太田記念美術館

大嵩双山（おおたけ・そうざん/1892～1965 年）
宮崎県生れ。洋画を広瀬勝平に学ぶ。鹿児島で商業美術家としてスタート、看板や郷土土産品などのデザイン。同じ仲間の小倉静三とともに、谷口午二に師事し、金羊会が結成された。南国美術展にも積極的に参加した。後年、水墨画を描く。弟に洋画家の禮造、

デザイナーの文雄がいる。1965年没、73歳。洋画、水墨

太田　忠（おおた・ただし/1908～1971 年）
広島市生れ。1923年国鉄に就職。小磯良平に師事。38年新制作派展に入選、41年同展で岡田賞、48年新作家賞、51年15周年賞、52年同会会員。美術団体連合展、日本国際美術展、日本現代美術展、秀作展に出品、外遊二回、機関士出身の画家として知られた。広島県で没、63歳。洋画

太田聴雨（おおた・ちょうう/1896～1958 年）
宮城県生れ。1910年上京。22年プロレタリア美術の先駆となる第一作家同盟を結成。27年前田青邨に入門。30年日本美術院賞。36年同人。帝展にも出品する。51～58年東京藝術大学助教授。東京で没、62歳。（出典　わ眼）日本画、版画、美教

太田洞玉（おおた・どうぎょく/生誕没年不詳）
久留米藩の家士。本姓は源、姓は太田、名は資彬。洞玉と号した。天明元年には絵を描いていたことがわかっているが、どこで画技を身に付けたかなど詳細は不明。江戸絵師、秋田蘭学

大舘健三（おおだち・けんぞう/1901～1977 年）
東京生れ。1920年川端画学校で藤島武二に師事、27年東京美術学校西洋画科卒、奨励賞を受け、引き続き研究科へ進んだ。28年和田英作教室の制作助手。在学中太平洋画会、聖徳太子奉讃展に出品、29年一水会入選、46年一水会会員、のち委員。69年山元好信と二人展開催。71年六悠会創立。1977年没、75歳。洋画

太田天橋（おおた・てんきょう/1893～1972 年）
京都府生れ。昭和の中国戦線に従軍し広報・宣伝の絵も描いた（後に“軍国画家”のイメージを生む）がために、戦後は作品を焼かれるなどし、中央画壇からも顧みられることはなかった。時代に翻ろうされた悲運の「報道画家」。1972年没、79歳。洋画、漫画

大谷房吉（おおたに・ふさきち/1890～1960 年）
和歌山市生れ。1908年慶応義塾商業学校卒。1917年頃日本画を学ぶ。24年頃洋画を学ぶ。30年頃梅原龍三郎に師事。34年国画会奨学賞。37年国画会会員～同人～43年会員。奉職展、新文展出品。明治屋専務。42年個展中心に発表。48年杉本健吉らと「ともゑ会」展を開催。53年白鶴美術館で自選展を開催。神戸市で没、70歳。洋画

太田　実（おおた・みのる/1927～1977 年）
北海道生れ。上野山清貢に師事。元一線美術会委員。無所属。1977年没、50歳。洋画

太田由美（おおた・ゆみ/1976 年～　）
滋賀県生れ。1997年京都芸術短期大学ファッションデザイン科卒。98年上京。99～2007年デザイン・フェスタ出品。02GEISAI2 出品。03年 NY ウィリアムズバーグアート&ヒストリカルセンター展示。GEISAI4 出品。パリ M.T.B.にて企画 3 人展。（出典　わコレ）デザイナー

太田洋愛（おおた・ようあい/1910～1988 年）
愛知県生れ。19 歳で旧満州に渡り、ハスで知られる大賀一郎博士に植物画の才能を見出され、日本における植物画の草分けに。15 年に及ぶサクラの旅は「日本桜集」（平凡社）に結実。1980年サクラ行脚を文章で綴った「さくら」（東京書籍）を出版。ボタニカルアート協会創立委員。1988年没、78歳。洋画、植物画

太田良平（おおた・りょうへい/1913～1997 年）
福島県生れ。1931年三木宗策の主宰する彫刻塾に入門して彫刻を学び、後、北村西望塾および藤野舜正にも学ぶ。36年文展鑑査展入選。53年日展で特選、朝倉賞受賞。54年日展連続特選。54年日展依嘱出品。60年日展会員、同展審査員、日展評議員、参与。穏やかな写実的女性像に季節感や抽象的な概念を託した作品を多く制作した。福島県で没、83歳。彫刻

大津逸次（おおつ・いつじ/1891～1961 年）
熊本県生れ。鹿本中学校卒業後上京、1914年に東京美術学校西洋画科に入学。卒業後、文部省留学生として里見勝蔵らと渡欧、この間にマルケに強い影響を受けた。28年朝鮮に渡り、終戦まで朝鮮で教職。45年熊本に帰り、翌年熊本県美術協会の創立委員。以後、鹿本高等学校、信愛女学院で美術教師。1961年没、70歳。洋画、美教

大津英敏（おおつ・えいびん/1943 年～　）
熊本市生れ。1963年東京芸術大学油画科入学、同大学院修了後、73年まで油画科助手。69年独立美術協会展出品、奨励賞、独立賞を連続受賞、73年会員。79～81年渡仏。83年安井賞展安井賞。86年大牟田文化会館陶壁画制作。89年多摩美術大学教授。93年宮本三郎記念賞。2007年日本芸術院賞、同会員。洋画、版画、壁画、美教

大塚金吾（おおつか・きんご/1893？～1941 年）
仙台市生れ。1911年葵橋研究所に入学、黒田清輝に師事し、その後河北新報社東京支局に勤務してゐた。海軍省嘱託を命ぜられた。南支沿岸封鎖作戦

に従軍中斎藤八十八とともに戦死。1941年没、48歳。洋画

大塚耕二（おおつか・こうじ/1914～1945 年）
熊本県生れ。坂本善三に師事。1939年帝国美術学校卒。35年浅原清隆、米倉寿仁らと「表現」を結成、出品。36年アヴァンガルド芸術家クラブ結成に参加。36年藤田嗣治の案内で、詩人ジャン・コクトーが展覧会を訪れ、大塚耕二の作品を称賛した。独立展に出品。39年美術文化協会創立に同人として参加。超現実的で構成的な作風を展開、シュルレアリスト。フィリピン・ルソン島で没、30歳。洋画

大塚伊次（おおつか・これじ/1909～1986 年）
長崎市生れ。1928年長崎県師範学校本科卒。35年全国指導者クレパス画展特選、36年同展特選。39年二科展初入選。45年同志と「長崎洋画家倶楽部」結成、50年長崎市民美術展設立協力、審査員。戦後長崎市の美術振興に尽力。山本鼎の自由画運動時代に平山国三郎、荒川秀男らと長崎の児童美術教育改革。57年一陽会出品、71年会員。86年長崎県美術協会名誉会員。1986年没、77歳。88年長崎県立美術博物館にて「大塚伊次」遺作展開催。洋画、パス、美教、版画

大塚左十志（おおつか・さとし/1922～1990 年）
徳島県生れ。15歳で短歌と絵を始める。1942年徳島県師範学校卒、教職に就くが応召。戦後1948年、画家を志し上京、フレーベル館入社し、編集の仕事に就く。水道橋美術研究所で絵画を学ぶ。59年頃から仏の姿を描く。90年没、68歳。2002年梅野記念絵画館で個展。洋画

大塚清六（おおつか・せいろく/1923～1974 年）
福島県生れ。1941年喜多方商業学校卒。48年東京美術学校卒。安井曾太郎の教室で学ぶ。50年代～70年代前半、小説の挿絵や装幀、油彩画、商業デザインでも活躍。多くの雑誌にイラストを描く。62年からは 7 年にわたり新聞や雑誌にアンネ株式会社の広告イラストを描き、日本雑誌広告賞。66年には手塚治虫の依頼により、手塚のアニメ映画「展覧会の絵」のイラストを描く。74年挿絵の仕事を制限し、ブラジル人女性をモデルとした油彩画の連作に取り組み、50点の作品を描く。1974年没、50歳。リネ夫人は大塚の死後、画家として活動し、画廊も経営した。88年喜多方市で遺作展。洋画、イラスト、装幀、グラフィック・

大塚 武（おおつか・たけし/1927～1979 年）
栃木県生れ。1948年栃木県師範学校卒。50年上京、公立学校に勤務しながら油絵を学ぶ。57年朔日会同人。同会展で各賞を受賞。60年安井賞候補。69年朔日会退会。東京都昭島市で大塚アトリエ主宰。79年没、52歳。（出典 わ眼）洋画、美教

大束昌可（おおつか・まさよし/1878～1945 年）
福岡県生れ。1898 年第 3 回白馬会展に初入選、以後、7 回展まで出品。1902 年東京美術学校西洋画科本科卒。旧制徳島県立富岡中学校図画教師。03 年召集。05 年除隊後、大分に住む。12 年那賀郡立那賀実科高等女学校教師。徳島市の千秋閣で開催の紅灯会に写真出品。19 年東京の郁文館中学校と郁文館商業学校に図画教師として着任。29 年この頃、東京写真専門学校の講師を務める。この頃、東京高等工芸学校写真科に入学。30 年「大束写真修正術」上函を刊行。31 年徳島市の千秋閣で開催の四国写真師聯合人会に来賓出席し、講演を行う。45 年没、享年 67 歳。（佐）洋画、写真、美教

大塚 稔（おおつか・みのる/1888～1951 年）
長野県生れ。12 歳上京、辛酸を嘗めつつ克苦勉励、写真技術及びコロタイプ印刷術を習得。1919年神田大塚巧芸社を創業、19年日本美術院関係の出版物一切の依嘱を受けた。宮内省、内務省、文部省等より美術印刷物及び貴重な文献類多種の複製を下命、文部省より技術保存証を受領。静岡県で没、64歳。41～44年郷里上田郊外に独力にて信州夢殿を建立し宝蔵の国宝救世観音像を安置。名画の複製、美術図書の出版多数。戦後株式会社大塚巧芸社を復興。美術印刷

大塚 睦（おおつか・むつみ/1916～2002 年）
佐賀市生れ。1933年東京美術学校油画科に入学。藤島武二教室に学ぶ。39年福沢一郎に師事。独立美術協会展出品。40年福沢一郎が独立を離脱し、美術文化協会を結成したため、同会に参加、43年美術文化協会賞、44年会員。46年前衛美術会結成に参加。翌年より毎回出品。54年美松書房画廊「4人展」（入江比呂・山下菊二・高山良策・大塚睦）を行う。60年革命芸術家戦線RAFを結成。吉本隆明らと安保デモに参加。70年前衛美術展を齣展開催。75年前衛美術会退会。無所属。東京で没、86歳。洋画

大月源二（おおつき・げんじ/1904～1971 年）
函館市生れ。1921年川端画学校を経て、27年東京美術学校を卒業した後、島崎翁助などと美術集団『赤道社』を結成。27年日本プロレタリア文芸連盟美術部に加入。31年日本プロレタリア文化連盟に参加、中央協議員。36年都新聞に沖一馬のペンネームで「時局漫画」を連載。43年文展の特選。一水会展入選。46年日本美術会北海道支部の支部書記長、一

水会会員。59年『草炎会』を結成。70年滝川市『大月源二油彩小品展』開催。1971年没、67歳。洋画、漫画、装填

大月源二 Ⅱ （おおつき・げんじ/1904～1971 年）
北海道函館市生れ。27 年東京美術学校西洋画科卒。プロレタリア運動に参加。29 年第 2 回プロレタリア美術展に出品。都新聞に沖一馬のペンネームで政治漫画を描く。43 年第 7 回一水会展で一水会賞。第 6 回新文展で特選。44 年戦時特別展に無鑑査出品。46 年一水会会員。日本美術会の創立に参加。草炎会会員。71 年 3 月 18 日没、享年 67 歳。（佐）洋画、漫画

大津鎮雄 （おおつ・しずお/1920～2008 年）
東京生れ。1939年日本美術学校本科洋画科卒。46年安井曽太郎に師事。48 年舞台美術デザイン担当。50年一水会賞、51年一水会会員、57年会員優賞、68年一水会委員。49年日展入選、51年日展岡田賞、65年菊華賞、68年日展会員。86年日展評議員。91年文部大臣賞、2000年日本橋高島屋で個展。2001年日展参与。04年サトエ記念21 世紀美術館で個展。2008年没、87歳。洋画、舞美

大歳克衛 （おおとし・かつえ/1929～2014 年）
広島市生れ。1954年東京芸術大油絵科卒。56年国画会初入選、58年新人賞、62年会員。64～65年パリに滞在。94年広島市立大芸術学部教授、98年同大大学院教授、2000年同大名誉教授、中国文化賞。2014年没、85歳。洋画、美教

大西伸明 （おおにし・のぶあき/1972 年～ ）
岡山市生れ。2008年岡山県新進美術家育成「I 氏賞」大賞。1998年京都市立芸術大学大学院版画専攻修了、同大学美術研究科准教授。造形作家。凹凸を利用の版画技法を平面のみならず三次元へと応用したマルチプルを制作。身近なモノを型取りし、樹脂で成型後、本物と見紛うほどの精度で着色することでオリジナルを正確に複製する。造形、版画、美教、三次元複製

大西 博 （おおにしひろし/1961～2011 年）
徳島県生れ。1982年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻に入学。89年同大学大学院美術研究科油画技法・材料第一研究室を修了。92～97年ドイツのニュルンベルク美術大学絵画科に留学。和紙に日本画の技術で描くことを試みた。帰国後は東京藝術大学油画研究室、油画技法・材料研究室の非常勤講師を担当、2002年より同研究室の常勤講師。2003年画材メーカーと水彩絵具「本瑠璃」を開発。自身の制作においても、同画材を使用したモノトーンの静謐な作風に到達する。06年東京藝術大学美術学部絵画科(油画技法・材料)助教授。個展(表参道画廊)では南禅寺塔頭天授庵に設置される襖絵十二面を発表。滋賀県で没、49歳。洋画、日本画、美教

大西守博 （おおにし・もりひろ/1963 年～ ）
大阪生れ。1991年京都市立芸術大学美術学部日本画卒、同大学院修了。日本画家・山岸純ゼミで学ぶ。池田遙邨が創立した画塾・青塔社に入塾し、後を引き継いだ池田道夫に師事。2009年日春展で日春賞。08、10年日展で特選。16年日展会員推挙。大阪芸術大学客員教授。日本画、美教

大谷郁代 （おおたに・いくよ/1981年～ ）
1981年生れ。2000年広島市立大学芸術学部入学、02年象の会奨励賞、05年FUKUIサムホール美術展入選、上野の森美術館最優秀賞。06年西脇市サムホール大賞展入選、しんわ美術展入選。14年シェル美術賞、オーディエンス賞。洋画

大槌 隆 （おおづち・たかし/ 1949 年～ ）
岩手県生れ。1974年三軌会展出品。84年日本国際美術展出品。86昭和会展招待・銀座大賞展奨励賞。91年ビブリオティク・デ・ザール賞一席／サロン・ド・ボザール賞(具象傾向部門一席)、フランス環境庁自然保護芸術賞、日本テレビ奨励賞、安井賞展出品。92年三軌会賞。93年日仏現代美術展佳作賞。94年磯良平大賞展出品、21 世紀アート大賞展奨励賞。97年安井賞展賞候補 海の大賞展奨励賞。2000年北の大地展ビエンナーレ日本通運賞。現在、三軌会会員、日本美術家連盟会員。洋画、水彩

大貫松三 （おおぬき・まつぞう/1905～1982 年）
神奈川県生れ。1931年東京美術学校西洋画科卒。33年太平洋展で中村彝賞。37、38年新文展で特選。41～49年創元展に出品。49年立軌会創立会員。後に無所属。川崎市で没、76歳。（出典 わ眼）洋画

100

大貫松三 Ⅱ （おおぬき・まつぞう/1905～1982 年）
神奈川県生れ。1931 年東京美術学校西洋画科卒。28 年第 9 回帝展に初入選。以後 15 回まで連続入選。33 年第 29 回太平洋画会展出品中村彝賞。35 年第 31 回太平洋画会展で会友。36 年第 1 回新文展、37 年第 2 回新文展で連続して特選。41 年創元会第 1 回展に会員出品。以後 43 年第 3 回展まで出品。49 年創

元会を退会。立軌会創立に参加、以後退会。無所属。82年8月31日川崎市で没、享年76歳。(佐)洋画

大沼かねよ（おおぬま・かねよ/1905～1939年）
宮城県生れ。1925年宮城県女子師範学校卒。28年東京女子高等師範学校図画専修科卒。岩手、浅草で教職。31年橋本八百二、堀田清治らの槐樹社展に出品、田中賞。32年独立展に出品。33年作品頒布のための「大沼かねよ画会」を実施。10年ほどの作家活動ながら労働者の姿を力強く描く。1939年没、34歳。洋画

大沼静巌（おおぬま・じょうごん/1899～1983年）
福井県生れ。1919年上京、太平洋画会研究所で石川寅治、中村不折に師事。30，31，32年帝展入選。52年日展特選、朝倉賞、63年日展会員、67、73年日展審査員。57年示現会創立会員、のち専務理事。東京で没、84歳。大沼映夫の父。洋画

大沼映夫（おおぬま・てるお/1933年～ ）
東京生れ。父は大沼静巌。1960年東京藝術大学美術学部油画科卒、62年同油画専攻科修了、60年大橋賞、サロン・ド・プランタン賞。61年国展で国画賞、62年会員推挙。63年オランダ政府給費留学生渡欧、アムステルダム王立美術学校に留学。65年サンパウロ・ビエンナーレで日本代表出品。71年帰国、愛知県立芸術大学講師。83年東京藝術大学美術学部教授。95年同美術学部長。85年東郷青児美術館大賞。88年宮本三郎記念賞。個展、グループ展多数。洋画、版画、美教

大野五郎（おおの・ごろう/1910～2006年）
東京生れ。1926年川端画学校に入学。28年「一九三〇年協会」展に入選、29年同協会の絵画研究所に学ぶ。里見勝蔵に師事、フォーヴィスムの影響を受ける。31年独立美術協会展でO氏賞。43年井上長三郎らと新人会を結成。47～64年自由美術協会に参加。64～2005年寺田政明らと主体美術協会を結成。東京で没、96歳。洋画

大野静方（おおの・しずかた/1882～1944年）
東京生れ。水野年方に入門し絵を学んだ。鏑木清方らと烏合会発足時の会員。日本美術院褒賞、日本美術院銅牌を受けた。1896年村岡応東、遠山素香らとともに巽画会を結成する。1904年日本新聞に入社し、挿絵画家として活躍する。後に浮世絵を研究。東京で没、63歳。日本画、口絵、挿絵

大野(曽山)幸彦（おおの・そやま・さちひこ/1860～1892年）
鹿児島県生れ。1878年工部美術学校入学、サン・ジョヴァンニの指導を受け、80年画学助手、83年修業証取得、工部省御用掛を拝命。84年私立の画学専門美術学校を堀江正章らと興す。その後自宅に私塾を開き、指導にあたった。曽山の指導は鉛筆やコンテで石版画や石膏像を模写させる厳格なものだった。89年明治美術会の結成に参加。90年内国勧業博覧会出品褒状。1892年没、33歳。洋画、版画、美教

大野隆司（おおの・たかし/1951年～ ）
東京生れ。1981年谷中安規作品に感銘。83年独習、木版画制作開始。85年月刊版画同人誌「汎画」に参加(90年終刊)。87年小論「版画家谷中安規」(『美術手帖』9月号)。92年NHKモーニングワイド頒布作品紹介。94年NHK日曜美術館「谷中安規」出演。96年『版画芸術』88～95号「谷中安規供養塔」。版画

大野麦風（おおの・ばくふう/1888～1976年）
長原孝太郎に洋画を学び、白馬会、太平洋画会、光風会で活躍。その後版画家に転向し、日本各地の魚の生態を色鮮やかに描く版画集『大日本魚類画集』を出版。同作は、会員を対象に頒布される500部限定の木版画集。1937～44年全72点が刊行され、麦風の画業を代表する作品となった。日本画、洋画、版画

大野俶嵩（おおの・ひでたか/1922～2002年）
京都市生れ。1941年京都市立美術工芸学校日本画科卒。43年京都市立絵画専門学校日本画科卒。47年日展入選。49～58年三上誠、星野眞吾らとパンリアル美術協会を結成。56年京都美術懇話会展。58、61年ピッツバーグ国際現代絵画彫刻展(カーネギー・インスティチュート)。70年京都市立芸術大学美術学部助教授、74年教授。73年戦後日本美術の展開-抽象表現の多様化(東京国立近代美術館)。83年京都市文化功労者。89年京都府文化功労者受賞。個展(O美術館)。98年戦後日本画の革新運動-パンリアル創世紀展(西宮市大谷記念美術館)。2001年京都府文化賞特別功労賞。2002年没、70歳。日本画、パンリアル、美教

大野昌男（おおの・まさお/1933年～ ）
日展会友、東光会審査員。中・高・大学において長年美術教育に携わる。1992年新見美術館で大野昌男展。倉敷市美術協会会長。2013年倉敷市文化連盟賞昨年秋、倉敷市文化連盟賞。2014年ギャラリー倉敷で個展。洋画、美教

大野米次郎（おおの・よねじろう/1884～1920年）
久留米市生れ。久留米高等小学校卒。在学中から森三美に洋画の手ほどき。1906年森三美、青木繁、坂本繁二郎を名誉会員として洋画グループ「審美会」を結成。発展的に解消して13年松田諦晶らと来目洋画会を組織して中心的役割。14年第1回二科展から連続3回入選し、前途を期待されたが、1920年没、36歳。洋画

大野隆徳（おおの・りゅうとく/1886～1945 年）
千葉県生れ。1911年東京美術大学西洋画科卒。09年文展入選、12年文展褒状、光風会展で今村奨励賞。18年光風会会員。16年文展で特選。19年帝展で特選。37年新文展で優秀賞。帝展、新文展無鑑査。21～24年渡欧。31年大野洋画研究所開設。東京で没、58歳。洋画、美教、版画、洋画研究所

大野隆徳 Ⅱ（おおの・りゅうとく/1886～1945 年）
千葉県生れ。千葉中学校卒。堀江正章に師事。1907 年第 11 回白馬会展に初入選。10 年第 13 回白馬会展に出品。11 年東京美術学校西洋画科本科卒。12 年第 1 回光風会展で今村奨励賞。第 6 回文展初出品。15 年第 9 回文展で三等賞。16 年第 10 回文展で特選。18 年光風会会員。19 年第1回帝展で特選。20 年第 2 回帝展で無鑑査出品。20 年～22 年渡欧。27 年東京大正博覧会で二等賞。31 年大野洋画研究所設立。44 年戦時特別展に無鑑査出品。45 年 4 月 4 日戦災のため東京で没、享年 58 歳。（佐）洋画、美教、版画

大庭勝郎（おおば・かつろう/1931～1982 年）
福岡県生れ。1954年東京芸術大学油画科卒。春陽会に出品、59年春陽会賞、63年会員。50年代半ば、色彩を黒味のある青に絞り、形態を単純化。60年代白っぽい絵具の厚塗りでミニマルな形態画面を抽象化。さらに70年代には具象に回帰し、裸婦の連作を発表。1982年没、51歳。84年北九州市美術館で大庭勝郎遺作展。洋画

大橋エレナ（おおはし・えれな/1895～1966 年）
ブラジル生れ。1911年渡仏。27年グラン・ショミエールに学ぶ。33年来日。松坂屋服飾デザイナー。40年台北で夫妻展。41年南米で夫妻展。42年国内で夫妻展。47年了介遺作集刊行。49年ブラジルに帰国。66年没、71 歳。（出典 わ眼）洋画、服飾デザイナー

大橋嘉一（おおはし・かいち/1896～1978 年）
大津市生れ。1918年 京都高等工芸学校（現 京都工芸繊維大学）色染科卒。三井鉱山三池染料工業所に入社、福井染色株式会社技師長、28年 大橋焼付漆工業所（現、大橋化学工業株式会社）創立。43年大橋式焼付漆の特許取得。約 80 件の特許を取得し、54年工業博士。実業家。50年代後半から75年頃にかけて、戦後の現代美術作家、約 200 人の絵画、版画、彫刻を蒐集し、コレクターとして知られる。53年 東京芸術大学油画科に奨学金、大橋賞を設置。1978年 没、82歳。同年、遺族のご好意により、約 2,000 点のコレクションは、国立国際美術館、奈良県立美術館、その後、京都工芸繊維大学に分けて寄贈。コレクター、大橋賞

大橋 城（おおはし・きずく/1897～1984 年）
福島県生れ。17 歳で上京後、川島理一郎に師事、駐米大使秘書として渡米。米ワシントンのコーコラン美術学校に学ぶ。創元会運営委員。日展会友。「にっぽんの門」シリーズ、著書もある。日本美術家連盟会員。1984年没、86歳。2015年大橋城没後 30 年記念個展がかわべ美術で開催。洋画

大橋孝吉（おおはし・こうきち/1898～1984 年）
京都市生れ。1917年京都市立美術工芸学校卒。日本画を志す。20年京都市立絵画専門学校卒。20年上京、川端画学校で洋画を学ぶ。24～27年渡欧。28年国画創作協会会員。日本各地を取材旅行。ギリシャ古代彫刻研究。京都で没、85歳。洋画、日本画、版画、ギリシャ古代彫刻研究

大橋翠石（おおはし・すいせき/1865～1945 年）
大垣市生れ。上京して渡辺崋山の息子、渡辺小華に師事。日本美術史の中でも特異な存在。1900年のパリ万国博覧会で、日本人画家として唯一の金メダル（金牌）に輝き、4 年後のセントルイス万国博覧会でも連続して金メダルを受賞。1945年没、80歳。日本画

大橋 正（おおはし・ただし/1916～1998年）
京都市生れ。1937年東京高等工芸学校工芸図案科卒。39年報道美術協会結成に参加。41年日本電報通信社より日本宣伝技術協会に出向。大蔵省ポスター手掛ける。45年「銀座工房」を開く、宝くじのポスター制作。野田醤油や明治製菓のグラフィック・デザイナー。81年武蔵野大学教授。1998年没、82歳。グラフィック、ポスター、美教

大橋貞一（おおはし・ていいち/1888～1967 年）
弘前市生れ。1906年弘前中学校卒。卒業後は東京美術学校に進んだ。最初日本画科に入り、その後西洋画科に移ったとされ、在学中青森師範学校で開催された北洋画会展に水彩画出品、弘前美弘会の会員。15年東京美術学校を卒業し、名古屋中学校、満州の大連中学校で教鞭をとる。31年東京に帰った。1967年没、79歳。洋画、水彩、美教

大橋康邦（おおはし・やすくに/1865～没年不詳）
岡山県吉備郡高松町生れ。松原三五郎、満谷国四郎、中川八郎に師事。1901 年新古美術品展で一等賞褒状。関西美術会に出品。02 年関西美術会批評会で褒状。03 年第 2 回太平洋画会展に出品。以後 21 年の第 18 回展まで出品を続ける。07 年第 1 回文展、09 年第 3 回展に出品。11 年第 4 回文展で褒状。13 年日本水彩画会創立に参加。13 年、18 年の太平洋画会展出品作が宮内省買上げとなる。国民美術協会会員。洲本中学、中津中学、神奈川県師範教諭として奉職。晩年は鎌倉町小町 425 に居住。(佐)洋画、水彩、美教

大橋 泰（おおはし・ゆたか/1923～1989 年）
広島県生れ。1946年東京美術学校工芸科卒、48年新制作派展入選。50～83年渡米、ボストンに滞在。東京展会員。個展多数開催。アメリカ事情を日本に紹介。帰国後埼玉に住む。1989年没、66歳。洋画、版画

大橋了介（おおはし・りょうかい/1895～1943 年）
彦根市生れ。台北一中卒、台湾総督府勤務。1919年上京、本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事。27年渡仏。佐伯祐三らと行動。岡田三郎助と中欧旅行。33年帰国。37年台北で個展。40～41年南米で夫妻展。芦屋市で没、48歳。(出典 わ眼)洋画、水彩

大畑稔浩（おおはた・としひろ/1960 年～ ）
島根県生れ。1984年東京芸術大学入学。90年同大学大学油画技法材料研究室修了。88年白日会展に出品。04年呉市の野呂山芸術村退村。2001年呉市美術館で大畑稔浩展。07年三越で個展。白日会委員。洋画

大場千秋（おおば・ちあき/1902～1978年）
北海道生れ。1928年東京帝国大学文学部心理学科卒。水戸高等学校教諭、茨城大学教授等を歴任。退官後、茨城キリスト教大学の創設に尽力し、初代学長。東京の料治熊太主宰の版画誌『白と黒』に発表。『版藝術』に発表。58年日本板画院茨城支部を創設、事務局長。『原始民族の実験心理学』(1948)を始め、文化人類学者としての著書多し。1978年没、76歳。84年『大場千秋版画集』が刊行。版画、大学長

大場正男（おおば・まさお/1928～2008 年）
福島県生れ。1956年孔版画を始めると同時に銅版画、リトグラフ、木版画、金工、陶芸等の技法を学ぶ。69年日本版画協会展、国展、版画グランプリ展、第16回CWAJ 現代版画展(以後毎年)。76年日輝展(東京都美術館、以後毎年)・78年日本美術協会賞)、現代日本の版画と彫刻 34 人(NY)。83年'83 年度アカデミー文化賞受賞(スウェーデン、86 年も)。98年国際Exlibrisビエンナーレ・大賞。99年「大賞受賞作家」個展(ワルシャワ)。2000年個展(アメリカ)。2008年没、79歳。版画

大林千萬樹（おおばやし・ちまき/1887～1959 年）
岡山市生れ。富岡永洗に日本画を学び、川合玉堂、鏑木清方に師事。主に再興院展で活躍。1923年大阪毎日新聞社・東京日日新聞社主催日本美術展に入選。時代考証にもとづく濃密な美人画や、風俗を描いた軽妙で洒脱な風俗画が知られている。清方門下では伊東深水と対比されることが多く、弟子に新興美術院創設の茨木衫風。京都で没、72歳。日本画

大場芳男（おおば・よしお/1914～1987 年）
山梨県生れ。日本水彩画会会員、一水会会員。1987年没、73歳。水彩

大原紀美子（おおはら・きみこ/1934～2003 年）
兵庫県生れ。具体美術協会会員。国立新美術館開館 5 周年「「具体」―ニッポンの前衛 18 年の軌跡」2012 年 7 月 4 日(水)～9 月 10 日(月)に作品展示。具体、前衛

大原省三（おおはら・しょうぞう/1920～1992 年）
秋田県能代市生れ。1938年光風会展入選、42年光風会賞、会員。41年新文展に入選、のち会友。49年国立聾唖学校の文部教官、61年高等部美術科主任教諭。自画像等人物画を描く。73年博報賞。84年ヘレン・ケラー教育賞。市川市で没、72歳。1993年に能代市で個展開催。洋画

大原孫三郎（おおはら・まごさぶろう/1880～1943 年）
倉敷市生れ。早稲田大学専門部卒。実業界に重きをなしたほか、社会問題研究所、労働科学研究所、大原美術館を創立し、文化事業にも大きい功績。倉敷紡績、倉敷絹織(現在のクラレ)、倉敷毛織、中国合同銀行(中国銀行の前身)、中国水力電気会社(中国

電力の前身）の社長を務め、大原財閥を築き上げる。その西欧絵画の蒐集品は大原コレクションとして知られるが、また児島虎次郎その他美術家のよい後援者でもあつた。倉敷市で没、62歳。実業家、コレクター、大原美術館

大平敬次郎（おおひら・けいじろう/1903～1993 年）
大阪生れ。1924年私立大阪美術学校洋画科入学、斎藤与里に師事。同校で日本画を教授していた矢野橋村にも手ほどきを受けた。1931年帝展入選。帝展や設立されたばかりの東光会展に出品を続け、その後渡った朝鮮でも朝鮮美術展で受賞。終戦後は宇佐市に引き揚げ、日展や東光展に出品。東光会で委員、審査員、大分支部長。県美展を舞台に活躍した。大分で没、90歳。洋画

大平華泉（おおひら・かせん/1913～1983 年）
福島県生れ。1946年以来連続 20 回日展入選。70年日本南画院展審査員。71～74年東京・日本橋三越で個展。日本南画院理事、産経学園講師。日展白寿賞、65年日展特選、67年日本南画院展文部大臣賞・桂月賞。1983年没、69歳。南画、版画

大渕繁樹（おおぶち・しげき/1953 年～ ）
東京生れ。1977年樋口洋に師事。79年示現会展入選、83，88年示現会展佳作賞。90年示現会会員。91年示現会展安田火災奨励賞、日展初入選（'92～'02）2001年示現会展楢原賞。05年示現会展示現会賞。13、17年日展特選。示現会理事・日展会友。洋画

大渕武夫（おおふち・たけお/1905～1958 年）
姫路市生れ。1926年国画創作協会展で奨学賞。29年東京美術学校彫刻科卒。在学中より洋画に専念。30年国展で樗牛賞、33年国展で奨学賞、34～35年渡欧、37年国画会同人。東京で没、53歳。洋画

大松伸洋（おおまつ・のぶひろ/1979 年～ ）
兵庫県生れ。英国の高等学校卒（Cambridge Centre for six-form studies 卒）。英国に 5 年滞在。嶋本昭三に師事。宝塚造形芸術大学大学院メディア造形研究科基礎造形修士課程修了。インスタレーションの作品を制作、発表。2017年九州大学大学院芸術工学府博士後期課程満期退学、鹿児島県立短期大学助教。ホップアート、インスタ、美教

大嶺政寛（おおみね・せいかん/1910～1987 年）
那覇市生れ。1930年沖縄師範学校本科二部卒。那覇市立商業学校、沖縄県立第一高等女学校等で教鞭。33年春陽展に入選、40年春陽会賞、53年春陽会会員。39年文展入選。43年新文展に入選。49年第 1 回沖縄美術展審査委員、沖縄美術連盟幹事。51年琉球列島米国民政府より国民指導員としてアメリカ合衆国視察。56年沖縄美術家連盟を結成。沖縄民芸協会会長。81年新生美術協会会長。那覇市で没、77歳。洋画、美教

大嶺政敏（おおみね・せいびん/1912～1994 年）
那覇市生れ。兄は大嶺政寛。沖縄師範学校卒。二科展入選，白日会船岡賞，白日会奨励賞、春陽会賞，毎日連合展（毎日新聞社主催）出品。春陽会会員。1994年没、82歳。洋画

大宮　昇（おおみや・のぼる/1901～1973 年）
松山市生れ。北予中学校卒。1925年上京。日本版画協会展に出品。39年新版画協会創立同人。51年農民美術運動から離れ、版画制作に専念。57年愛媛大学講師。1973年没。72歳。版画

大宮政郎（おおみや・まさお/1930 年～ ）
岩手県生れ。1949年岩手県立美術工芸学校油画科入学。60年に「岩手美術家会議」を結成、議長。3年～69年盛岡で結成した先鋭的な美術グループ「集団 N39」の先導的メンバーとして、前衛美術を発信し続けた。68年モスクワに向かう機内で新しい造形的発想動的視点による新たな造形活動を展開。洋画、前衛、造形、版画

大村西崖（おおむら・せいがい/1868～1927 年）
静岡県生れ。新間雲屏に師事して絵画・彫刻・鑑定を学ぶ。1893年東京美術学校彫刻科卒。（第 1 回の卒業生）後、京都に赴き、教員や雑誌編集者を務める。96年東京美術学校の助教授。一時退職、98年復職して、1905年教授。彫刻、美術、美学、考古学、東洋史、東洋美術史を講じた。「無記庵」の号で『東京日日新聞』に美術批評を寄稿した。帝室博物館監査部彫刻科主任、古社寺保存計画調査員を歴任した。『密教発達志』全 5 巻により帝国学士院賞。1927年没、58歳。美史、美評、彫刻

大牟礼南島（おおむれ・なんとう/1874～1935 年）
鹿児島県生れ。鹿児島造士館を卒業後、東京美術学校西洋画科に入学、1900年同校を卒業。帰郷。アトリエを開設し公開制作、鹿児島に油彩画を宣伝。11～30年鹿児島第二中学校で教鞭。27年西郷南州50周年忌を記念して描いた西郷隆盛の肖像画は高い評価を得た。晩年は水墨画もよくした。1935年没、61歳。洋画、墨画、美教

大桃 寛（おおもも・ひろし/1908～1979 年）
新潟県生れ。1929年新潟師範学校卒。公立学校の教員。東光会展、光風会展、新文展、日展に出品。53年光風会会員。63年光風会新潟支部設立委員長。1979年没、71歳。洋画、美教

大森栄八郎（おおもり・えいはちろう/1915～1990 年）
島根県生れ。1951年日展入選。日展、光風会展で入選を重ねる。64年光風会会員。1990年没、75歳。洋画

大森運夫（おおもり・かずお/1917～2016 年）
豊川市生れ。1937年愛知県立岡崎師範学校を首席卒。小学校教員。50年中村正義の影響を受け日本画を描く。51年中日美術教室を開設。51年新制作展、日展で入選。58年日本画総合展で最高賞。62年新制作展で新作家賞。71年新制作協会会員。74年 74年新制作協会日本画部会員による創画会結成に参加し、以後会員として活動。92年豊橋市美術博物館で回顧展。2016年没、99歳。日本画

大森啓助（おおもり・けいすけ/1898～1987 年）
神戸市生れ。1920年関西学院高等部商科卒。上京し、金山平三に師事、川端画学校に学ぶ。26～32年仏留学、サロン・ドートンヌ入選、サロン・ザンデパンダン出品。33年春陽会賞、同会会友。36年国画会入会、43年国画会会員。文筆、訳書にモロオ・ヴォチェー著『絵画』。著書に『ヴァン・ゴッホ』、『印象派の話』。東京で没、89歳。洋画

大森朔衛（おおもり・さくえ/1919～2001 年）
香川県生れ、1940年独立美術協会展入選、41年日本美術学校洋画科卒。以後、自由美術協会、新制作派協会など入選、1944年第二次世界大戦応召によりスマトラへ、46年復員、戦災で全作品が焼失、1950年モダンアート協会設立会員、1959年行動美術協会会員、60年現代日本美術展K氏賞、以後行動展、毎日現代美術展、みずゑ賞選抜展など多数入選、80年武蔵野美術大学教授。82年フジテレビ「テレビ美術館・大森朔衛特集」出演、1999年行動美術協会退会、以後無所属。東京で没、82歳。洋画

大森祥吾（おおもり・しょうご/1947 年～ ）
長野県生れ。1972年東京芸術大学油画科卒、大橋賞、東京芸術大学大学院修了。渡欧(同、81年、83年、92年)。83年油絵大賞展に招待出品。88、89、91年中国へ取材旅行。91年秋川美術家連盟(現、あきる野美術家連盟)結成に参加。94年金山平三記念展出品。96年「新しい世代の信州風景展」に出品。個展多数開催。洋画

大森商二（おおもり・しょうじ/1891～1973 年）
熊本県生れ。第七高等学校卒。1912年東京帝国大学英文科中退。13～14年本郷洋画研究所に学ぶ。二科展、槐樹社展,春陽展などに出品。50～74年太平洋画会会員。セザンヌの影響をうけた。1973年没、82歳。洋画 150

大森明恍（おおもり・めいこう/1901～1963 年）
福岡県生れ。1919年本郷洋画研究所に入る。21年二科会展出品、33年富士山研究、御殿場に移住。38年東京銀座資生堂ギャラリー第1回富士山画個展開催、北海道九州等各地で個展、多くの富士図を発表。芸術新潮(4巻7号)に「富士を描いて30年」の一稿。1963年没、61歳。洋画

大森義夫（おおもり・よしお/1900～1978 年）
福島県生れ。17 年磐城中学卒。22 年第 4 回帝展に初入選。24 年東京美術学校西洋画科本科卒。第 5 回帝展出品、以後7～9 回展に出品。33 年この頃、大連に渡り同地の女学校の美術教師となる。46 年大連より帰国。江戸川区の中学校の美術教師となる。48 年第 24 回白日会展に会員出品。63 年頃、妻の実家のある と栃木県大田原市に転居。78 年 2 月 20 日大田原市で没、享年 77 歳。(佐)洋画、美教

大八木一郎（おおやぎ・いちろう/1869～没年不詳）
京都市生れ。1889年京都府画学校卒、同校専門油画科を中退。明治美術会会員。96年中村勝治郎、安藤仲太郎と交友。1902年東京美術学校西洋画科選科卒。99～04年白馬会展に出品。三重県立第一中学校、私立真宗勧学院で美術教師。没年不詳。洋画、美教

大矢 紀（おおや・のり/1936 年～ ）
新潟県生れ。日本画家大矢黄鶴の長男。前田青邨、平山郁夫に師事。1955年本美術院展 19 歳で入選。70年院展奨励賞、白寿賞。71年院展奨励賞、白寿賞、受賞作品は文化庁買い上げ。76年院展美術院賞。83年春季院展外務大臣賞。84年前田青邨賞。2005年院展文部科学大臣賞受賞。日本日本美術院招待。85年～6年間、NHK「趣味の園芸」の表紙の装画を担当。2008年院展で内閣総理大臣賞。13年紺綬褒章、芸術文化新潟県知事表彰。2020年川崎市民ミュージアムで個展。日本画、表紙絵

大藪雅孝（おおやぶ・まさたか/1937 年～ ）
ソウル市生れ。1958年新制作協会展入選。60年東京芸術大学美術学部卒。62年シェル美術賞展で佳作賞。78年資生堂ギャラリーにて個展。90年東京芸術大学美術学部教授。94年小川美術館にて大藪雅孝展開催。2013年画業50周年を記念した巡回展を開催(軽井沢アートミュージアム他)。洋画、立体、オブジェ、美教

大山忠作（おおやま・ちゅうさく/1922～2009 年)
福島県生れ。1943年東京美術学校卒。46年日展入選。47年高山辰雄らの日本画研究団体「一采社」に参加。山口蓬春に師事。61年日展会員、事務局長、理事長を歴任。73年日本芸術院賞。86年日本芸術院会員。96年勲三等瑞宝章受章。99年文化功労者。2006年文化勲章受章。2009没、86歳。日本画

大山美信（おおやま・よしのぶ/1947～2013 年)
福島県生れ。1970年文化学院美術科卒。村井正誠に師事。75年一陽会会員、88年一陽会委員、理事。78年小説「琴爪の箱」に挿絵を描く。85年文化学院芸術専門学校設立に参加。開校当初から講師を務める。96年文化学院芸術専門学校校長(12年間)。2013年没、66歳。洋画、現代美術、美教、校長

大山魯牛（おおやま・ろぎゅう/1902～1995 年)
東京生れ。1919年下野中学校卒。小室翠雲が主宰する環堵画塾で南画を学ぶ。日本南画院や帝展を中心に作品を発表、 新進の南画家として活躍。1935年、魯牛と改号してから、終戦を迎えるまでは、銀座の資生堂画廊において、3年連続して個展を開催するなど、充実した生活を送りました。55年作品発表の場を 新興美術院へ移し、本格的な制作を再開。1995年没、93歳。南画と真摯に向き合った作家。南画、パステル

おおらい えみこ（ORAI Emiko/1962 年～ ）
埼玉県生れ。1985年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒。2001年9年間滞在したトルコ共和国より帰国。02年銅版画を古茂田杏子氏に師事。銀座 La Mer 2003 2004 2005 2006 2007 2008、銀座ツープラス 2009、2010、2011、2012。2014 年よりオーライタローとのユニット「生賴(おおらい)制作所」での活動開始。版画

オーライ タロー（ORAI Taro/1963 年～ ）
宮崎市生れ。88年武蔵野美術大学大学院油絵専攻修了。99年銅版画を古茂田杏子氏に師事。個展・グループ展を中心に発表し、人と街の記憶をたたえた古い建物を、油彩画・銅版画に描く。神田神保町界隈のミニコミ誌「本の街」の表紙画(2004～08 年)朝日新聞「俳壇・歌壇」欄の挿絵(2008 年 2～4 月)。生賴範義は父。洋画、挿絵、装幀、版画

生賴範義（おおらい・のりよし/1935～2015 年)
兵庫県生れ。1945年鹿児島県に疎開。高校卒業後、東京芸術大学美術学部入学、中退。62年イラストレーター活動開始。80年 SF 雑誌に発表「スター・ウォーズ」のイメージ画が、ジョージ・ルーカスの目に留まり、続編ポスター用イラスト採用、『スター・ウォーズ帝国の逆襲』の国際版ポスターのイラストが評価。80年星雲賞アート部門受賞。83年書籍『東宝特撮映画全史』(東宝)表紙担当。84年映画『ゴジラ』ポスター担当。平成ゴジラシリーズのポスターイラスト。2013年宮崎県文化賞芸術部門受賞。2015年没、79歳。イラスト

大和田篤治（おおわだ・とくじ/1875～1913 年)
高知県生れ。高等小学校卒業後、1891年に神田の淑美館で鉛筆画、コンテ画を修業。93年小山正太郎の開いた画塾・不同舎に入り、5年間学ぶ。1900～04年富山県魚津中学校図画教員、04年青森市第三中学校赴任、同中学校内に洋画研究所組織。09年高知県師範学校に転勤。1913年没、38歳。洋画、美教

岡畏三郎（おか・いさぶろう/1914～2010 年)
東京生れ。兄は洋画家の岡鹿之助。1939年東京帝国大学農学部農学科卒。41年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。42年財団法人国際文化振興会(現、国際交流基金)に勤務。45年美術研究所に助手として入所。隈元謙次郎、河北倫明らとともに日本近代美術の調査研究事業に従事、大正期の洋画と18 世紀以降の浮世絵・木版画を研究対象。51年『明治末期に於ける「新傾向」に就て』(『美術研究』160 号)を発表。日本美術の近代化の中で江戸時代までの造形の蓄積を表現に取り入れた作家たちを積極的に評価。戦後、美術研究所は東京国立文化財研究所となったが、同所美術部第二研究室長を長く務め、72年同部長となった。76年同所を退官。76～86年群馬県立近代美術館館長。東京で没、96歳。(東文研 引用)美史、東文研、美術館長

岡上りう（おかうえ・りう/1896～1969 年)
大高床右衛門・せつの子。岡上の姓となり、1924年岡上りうは、岡田謙三、高崎剛、高野三三男と渡欧。後、高野三三男と結婚、川村記念美術館に作品所蔵。1969年没、72歳。洋画

岡倉天心・覚三（おかくら・てんしん・かくぞう/1863～1913 年）
横浜市生れ。東大卒業後文部省に入り，鑑画会の創設に加わる。文明開化の風潮の中で，フェノロサとともに日本美術の復興に尽力。1890年東京美術学初代校長に就任，伝統を重視する美術教育の基礎を定めるなど美術行政に腕をふるい，美術界に君臨した。98年美術学校内部の排斥運動で辞職した後，橋本雅邦や門下の菱田春草，横山大観らと官学に対抗して日本美術院を創立，新日本画運動を展開。1904年以降ボストン美術館東洋部長を兼任。《東洋の理想》《茶の本》などを英文で刊行，独特のアジア観に立脚する文明批評を内外に広めた。《岡倉天心全集》全9巻がある。1913年没、50歳。明治時代の美術界の指導者。文人、思想家、美政、日本美術院

岡崎　紀（おかざき・おさむ/1938 年～　）
広島市生れ。1961年多摩美術大学絵画科油画専攻卒、68年大学院絵画修了。60年新制作展で新作家賞受賞（同'62'66 年受賞）。67年新制作展で協会賞。68年新制作協会会員推挙。83年在外研修員として渡欧。多摩美術大学名誉教授。洋画

岡﨑乾二郎（おかざき・けんじろう/1955 年～　）
東京生れ。多摩美術大学彫刻科中退。B ゼミスクール修了。平面・立体での両面で多彩な創作活動を展開、2002年「ART TODAY 2002　岡﨑乾二郎展」（セゾン現代美術館）。02年のヴェネツィア・ビエンナーレ建築展で日本館のテーマ展示「漢字文化圏における建築言語の生成」のディレクター。07年舞踏家トリシャ・ブラウンとのコラボレーション「I Love my robots」。美術雑誌『FRAME』、共編著『批評空間　増刊号　モダニズムのハードコア』(1995)。近畿大学国際人文科学研究所の活動として主任ディレクター、四谷アート・ステュディウムは、新しい教育・創造活動の拠点として注目。19年『抽象の力　近代芸術の解析』で芸術選奨文部科学大臣賞。武蔵野美術大学客員教授。造形、美評、舞踏、洋画、美教

岡崎信吾（おかざき・しんご/1938 年～　）
中国営口市生れ。北九州市の高校を卒業。東京芸術大学美術学部で油彩画を学び、卒業後に渡欧。1975年ウィーン美術大学に在籍。現在ウィーン在住。風景画や静物画を多く制作、麦畑、麦の穂を描いた作品が評価。2016年岡山県立美術館で岡崎信吾展。洋画

岡崎精郎（おかざき・せいろう/1898～1938 年）
高知県生れ。高知県立第一中学卒。1918年硲伊之助に師事。同年劉生の書生として7ヶ月指導を受ける。劉生は《岡崎精郎之顔》をデッサン。草土社同人。帰郷、部落差別を知り解放運動に専心。秋川村村長、高知県会議員。35年頃から農民を主題とした絵を描き始める。種間寺に「岡崎精郎先生之碑」が高知県農民により建立される。洋画

岡崎桃乞（おかざき・とうこつ/1902～1972 年）
岐阜県生れ。1917年大澤鉦一郎に師事。18年本郷絵画研究所に入学。26年岸田劉生と交遊。宗元画の蒐集に没頭。28年京都に移住。31年から個展活動、京都寺町アズマギャラリー、大阪丸善で椿貞雄と二人展。和辻哲郎宅を譲り受け、画業に精進、東京麹町「室内社」で個展。その後自由に創作活動した。72年没、70歳。和辻哲郎宅は「蜜語庵」原三渓の大番頭、古郷時侍が建てた数寄屋住宅、梅原猛が買い取った。洋画

岡崎信夫（おかざき・のぶお/1906～1978 年）
長野県生れ。葵橋洋画研究所に学ぶ。山本鼎、林倭衛に師事。新世紀美術協会会員。1978年没、72歳。洋画

岡崎勇次（おかざき・ゆうじ/1924～1991 年）
広島市生れ。1945年大阪青年師範学校卒。51年日展入選。55年光風会展A氏賞、56年で光風特賞、同年会友、60年会員。59年新日展で特選。60年渡仏、パリ、グラン・ショミエールに学ぶ。著書『色彩の造形美学』『黒から白へ生命をみつめる岡崎勇次』。83年因島市主催「岡崎勇次」展。広島修道大学教授。広島市で没、66歳。洋画、美教

岡澤喜美雄（おかざわ・きみお/1932 年～　）
長野市生まれ。武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）を卒業後、故郷に戻り「岡澤絵画研究所」を1997年まで主宰した。画家としては一貫性のあるエロティシズムを追及し個展を中心に発表。絵画研究所では自由な教えの許、美大進学デッサン教室からは多くの美術家を輩出。洋画、美教、絵画研究所

小笠原哲二（おがさわら・てつじ/1903～1980年）
岩手県生れ。盛岡工業卒。1930年から県内の高校で教職につく傍らグループ展、個展で画家として活躍。太平洋洋画家会展、光風会展、白日会展入選。岩手美術連盟幹事。県高校美術連盟顧問。1980年没、77歳。版画、美教

小笠原尚司（おがさわら・なおし/1961年～　）
高崎市生れ。武蔵野美術大学中退。1980年代中

頃よりパリを中心にフリーの写真家として雑誌、広告、建築写真の分野活躍。フランス文化庁、パリ国立図書館、ヨーロッパ写真館等に公的コレクションとして保存。9年帰国後、都内に額装スクールAtelier YO、額装ショップ、ギャラリーsur-mursをオープンし、アートと壁面装飾、そして空間との可能性について額装を通して提案。写真、額装

小笠原久松（おがさわら・ひさまつ/1914～1978 年）
岩手県生れ。樋口加六に師事。創造美術会会員。1978年没、64歳。洋画

小笠原豊涯（おがさわら・ほうがい/1870～1920 年）
兵庫県生れ。札幌農学校でクラーク博士に学ぶ。浅井忠に私淑。1889年京都府画学校で田村宗立に師事。98, 99年新古美術品展覧会で褒状一等賞。1901年関西美術会（第3次）結成参加。05年関西美術院の創立参加。16年大阪洋画会結成に参加。淡路島で没、50歳。洋画

小笠原亮一（おがさわら・りょういち/1952 年～ ）
岩手県生れ。師・樋口加六。1977年より個展多数開催。94年「基の会」結成、代表。95年「基の会」（埼玉県立近代美術館）開催。2004年深沢紅子野の花美術館で「花を描く展」奨励賞。06年同、野の花美術館賞。09年利根山光人記念大賞展「祭り」トリエンナーレで北上奨励賞。作家集団実在派員。日本美術家連盟会員。洋画

岡鹿之助（おか・しかのすけ/1898～1978 年）
東京生れ。父は劇作家岡鬼太郎。1924年東京美術学校卒。渡仏、藤田嗣治に師事、スーラの描法を学ぶ、点描風タッチを習得。39年帰国、春陽会会員。国際形象展、現代日本美術展に発表。52年芸術選奨文部大臣賞。57年毎日美術賞。64年日本芸術院賞。69年日本芸術院会員。72年文化勲章。東京で没、79歳。洋画、版画

岡 精一（おか・せいいち/1868～1944 年）
大坂生れ。上京して浅井忠・本多錦吉郎に師事。1888年小山正太郎の不同舎に入門。明治美術会展、内国勧業博覧会などに出品・受賞を重ねる。1900 年渡米し、さらに 02 年ヨーロッパに渡り、パリでジャン・ポール・ローランスに師事。08 年帰国後、太平洋画会会員となり出品を続けた。44 年没、享年 76 歳。（佐）洋画

緒方一成（おがた・いっせい/1934～2006 年）
熊本県生れ。1956東京芸術大学卒。61～71年にパリに渡り、65年パリ青年ビエンナーレ、66年フレンヘン国際版画ビエンナーレ（西独）、67年日本現代美術展、68年東京国際版画ビエンナーレなどに作品を発表する。ギャルリーヴィヴァン（銀座）設立。ドローイング、版画、洋画

岡田和夫（おかだ・かずお/1910～1937 年）
延岡市生れ。旧制延岡中学校で有田四郎に学び、東京美術学校に進学、在学中に帝展に初入選し、卒業制作は奨励賞を受けた。将来を嘱望されたが、1937年没、27歳。洋画

尾形亀之助（おがた・かめのすけ/1900～1942 年）
宮城県生れ。東北学院普通部中退。詩人。1919年に上京し、木下秀一郎のすすめで絵を始める。21年未来派美術協会展に出品し、会友。22年三科インデペンデント展に出品。23年村山知義らと「MAVO」を結成する。25年詩集を刊行。32年仙台市の官吏。仙台市で没、41歳。洋画、詩人

尾形月耕（おがた・げっこう/1859～1920 年）
江戸生れ。独学で絵をまなび人力車の蒔絵や輸出用七宝焼の下絵をかく。1887年前後「絵入朝野新聞」などおおくの新聞,雑誌に挿絵、口絵などを制作。風俗をかいた錦絵「月耕漫画」を発刊。1898年日本美術院の創立に参加、正員。1920年没、62歳。作品に「山王祭」など。浮世絵、挿絵、口絵、日本画、版画。漫画

岡田謙三（おかだ・けんぞう/1902～1982 年）
横浜市生れ。1922年東京美術学校西洋画科入学、2年後中退、24年渡欧、アカデミー・ド・ラ・グランド・ショミエールに学ぶ。27年サロン・ドートンヌに入選。29年二科展に出品。33年特待。37年二科会会員。39年昭和洋画奨励賞。50年渡米NYに住む。画風を抽象に転じる。53年NYベティ・パーソンズ画廊で個展。「ユーゲニズム」の名で呼ばれる画風を展開。58年ヴェネツィア・ビエンナーレでアストーレ・マイエル賞（日本人初）、ユネスコ絵画コンテスト最高賞。60年アメリカの市民権取得。東京で没、79歳。洋画、水彩、版画

岡田行一（おかだ・こういち/1907～1991 年）
東京生れ。文化学院卒業後、石井柏亭・有馬生馬に師事。はじめ帝展、日展に作品を発表。その後一水会会員。1991年没、84歳。洋画、版画

尾形光琳（おがた・こうりん/1658～1716 年）
京都生れ。尾形宗謙の次男。尾形乾山の兄。狩野派山本素軒にまなぶ。本阿弥光悦、俵屋宗達、野々村仁清の遺風をうけ、装飾性にとむ光琳模様ともいえる独自の大和絵画風を確立。のち琳派とよばれる。蒔絵、茶器、小袖の下絵などでも弟の乾山とともに活躍

した。作品はほとんどが 40 歳以後にえがかれたと推定されている。京都で没、58歳。代表作の屏風に「燕子花(かきつばた)図」「八橋図」「紅白梅図」,蒔絵に「八橋蒔絵螺鈿(らでん)硯箱」など。江戸前期-中期の絵師、工芸意匠

尾形乾山（おがた・けんざん/1663～1743 年）
京都の人。光琳の弟。陶法を野々村仁清に学び、京都で鳴滝窯を開き、晩年は江戸入谷に窯を築いた。絵画は「八ツ橋図」「花籠図」など。江戸中期の陶工、画家

岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ/1869～1939 年）
佐賀市生れ。1887年曽山幸彦に師事、93年大幸館修了。94年黒田清輝に出会い天真道場で学ぶ。96年白馬会の創立に参加。97年文部省留学生としてフランス留学、ラファエル・コランに師事。1902年東京美術学校教授。07年東京勧業博覧会で一等賞。12年藤島武二と本郷洋画研究所設立。19年帝国芸術院会員。34年帝室技芸員。37年文化勲章、帝国芸術院会員。東京で没、70歳。洋画、美教、版画、口絵、本郷洋画研究所

岡田七蔵（おかだ・しちぞう/1896～1942 年）
札幌市生れ。1914 年上京。日本水彩画会研究所、本郷洋画研究所に学ぶ。16 年第 3 回二科展に初入選。22 年中央美術展入選。24 年春陽会展に出品。26 年 9 月三岸好太郎と中国旅行。12 月帰国。28 年春陽会展で春陽賞。30 年春陽会会友となるが、35 年春陽会退会する。40 年国画会展に出品。42 年 11 月 11 日没、享年 47 歳。(佐) 水彩

岡田正二（おかだ・しょうじ/1913～1981 年）
東京生れ。保善商業学校卒、1934年蒼原会研究所を経て中西利雄に師事。38年新制作協会水彩画初入選、61年新制作協会絵画部会員。38年日本水彩画会展入選、63年日本水彩画会賞、会員。54年国立近代美術館「日米水彩画展」出品、63年個展(中央公論画廊)開催。64、66年の現代日本美術展入選し、67年水彩画が国立近代美術館に収蔵。千葉県で没、68歳。水彩

岡田節子（おかだ・せつこ/1917～2008 年）
宮城県生れ。1937年女子美術専門学校高等科西洋画部卒。39年朱葉会賞。47年女流画家協会創立会員。52年女子美術大学助教授、71年教授。55～56年桜井悦と渡欧。92年「桜井悦・岡田節子2人展」。71年女子美術大学教授。93年「画集刊行記念岡田節子自選展」東京セントラル美術館で開催。2008年没、90歳。洋画、美教

岡田龍夫（おかだ・たつお/1904 年～没年不詳）
1904年生れ。12年頃、17歳で上京、東銀座の切りぬき通信社に勤める。23年に首都無選展に出品。24年に三科インデペンデントを退会。ヌームを結成する。同年『MAVO』を創刊。チェルチルの会で村山知義とノイエ・タンツの舞踏を行う。27年三科形成芸術展に出品。分裂後は雑誌「MAVO」で活動。リノリューム版画による装幀や挿絵を残している。版画、装幀、挿絵
雑誌MAVOを創刊

岡田淡雅（おかだ・たんが/1913～1992 年）
倉敷市生れ。南画家矢野橋村に内弟子として学び、大阪美術学校日本画科本科卒。東京の横尾深林人に師事。1940年紀元 2600 年奉祝展に出品、大東南宗院に出品。60年に再興された日本南画院に出品、文部大臣賞、文化賞、院賞、会長賞、奨励賞、常務理事。83年岡山県美術展の審査員を委嘱。倉敷市で没、79歳。日本画、南画

岡田　徹（おかだ・てつ/1914～2007 年）
名古屋市生れ。1932年滋賀県立長浜農業学校卒。35年安藤洋画自由研究所に通う。37年「ナゴヤアヴァンガルドクラブ」を下郷羊雄らと結成。39年美術文化協会の創立に参加。48年同会会員。53年美術文化展で会員努力賞。64年日本国際アーティスト協会結成。67年中日文化センターで洋画部講師。94年名古屋市民ギャラリーで個展。岡田徹画集が刊行(生活の友社)。2007年没、93歳。洋画

緒方洪章（おがた・ひろあき/1940 年～　）
東京生れ。緒方洪庵の子孫。1963年東京藝術大学日本画科卒、卒業制作買上、65年同大学院修了、安宅賞。68年文藝春秋画廊個展。74年日本国際美術展招待出品。89年和光で個展、以降8回の個展開催。他に東京、横浜、大阪、京都で個展。2014年日仏芸術交流 90 周年記念 エトワール芸術大賞。15年評論家推薦作家大賞、美術評論家大賞。16年伊国交樹立150 周年記念 ブリンディジ創世芸術祭芝蘭文化賞。緒方家洪庵会会長。点描による細密ペン画、透明感溢れる水彩画で地位確立。洋画、ペン、水彩

岡田又三郎（おかだ・またさぶろう/1914～1984 年）
東京生れ。1938年東京美術学校油画科卒。40年光風会会友、43年光風会会員。46年日展で特選、岡田賞、53年日展で特選、朝倉賞、62年日展で菊華賞、のち理事。60～63年渡仏、63年サロン・ドートンヌ会員。63年ル・サロンで銀賞、会員。62年フランス・アカデミー賞。65年再渡仏し、ル・サロン展金賞。66年日本橋・三越で個展。71年芸術選奨文部大臣賞。76年日本芸術院賞。77年日洋展を創設。軽井沢町で没、69歳。洋画

岡田まりゑ（おかだ・まりえ/1956 年～ ）
横浜市生れ。1979年武蔵野美術大学卒。91年日本具象版画展・優秀賞。95年第 63 回日本版画協会展・準会員賞。96年文化庁現代美術展、ミヤコ版画賞展・大阪画商相互会賞、国際ミニプリントビエンナーレ・受賞（リトアニア）。97年ミニプリントビエンナーレ・受賞（ルーマニア）。2008年山本鼎版画大賞展・サクラクレパス賞。版画

岡田 毅（おかだ・みのる/1888～1956 年）
関西生れ（詳細不明）聖護院洋画研究所に所属。1911年東京時事新報社で文章を発表。15年NY・経由で19年頃渡仏、劇作家の岸田國士と知り合う。清水登之とアート・スチューデント・リーグで学びパリでも交友が続く。24年サロン・ドートンヌに出品、12月頃南仏ゴルドに移住、パリのアトリエは佐伯祐三が入居。36年日動画廊で個展。39年鹿島丸で帰国、岡鹿之助、原勝郎が乗船。1956年没、68歳。長男はE・Hエリック、次男は岡田真澄。（田村）洋画、版画

緒方亮平（おがた・りょうへい/1901～1979 年）
広島県生れ。1920年本郷絵画研究所で岡田三郎助の指導を受ける。27年帝展に入選。34年帝展で特選。36年文展に無鑑査出品。30年光風会会友、34年会員、35年評議員のち理事。戦後も日展、光風会展に制作発表し、58年日展会員、64年日展評議員、76年日展参与。東京で没、78歳。洋画

岡田露愁（おかだ・ろしゅう/1949 年～ ）
京都府生れ。当初、陶芸や創作着物に手を染め、1979年平安画廊で個展、81年大型木版画集「モーツアルト/魔笛」（湯川書房刊）で人気を集める。84年木版・リトグラフ併用による「ヨハネの黙示録」を刊行。オブジェ、ドローイング、油彩、版画をはじめ、陶、建築デザイン等、芸術活動を広げた。（荒由）現代美術、洋画、パステル、版画 200

岡田露愁 Ⅱ（おかだ・ろしゅう/1949 年～ ）
京都府生れ。1979年平安画廊で個展。78年木版「愛書家地獄」S.アスリノー、生田耕作訳。84年木版・リトグラフ併用「ヨハネの黙示録」新訳聖書。88年木版・シルクスクリーン併用「ブルーメン」。89年REPLICON/マルチプルシリーズハ約27種。現代美術、洋画、パステル、版画

岡 周末（おか・ちかすえ/1908～1989 年）
熊本県生れ。1931年東京美術学校西洋画科卒。鹿児島県第一師範学校教諭、45年熊本県第一師範学校。49年熊本大学教育学部助教授、53～73年教授。教育学部長（69～72年）、学長事務代理（70年）歴任。32年帝展入選。33～39年光風会展、40～51年独立美術展に出品。52年モダンアートに発表、59年モダンアート協会会員。熊本県で没、80歳。洋画、美教

岡 常次（おか・つねじ/1893～1970 年）
新潟県生れ。旧制中学校卒、上京。白馬会洋画研究所入所。1914年葵橋洋画研究所の主任研究員。23～46年学習院大学講師のち教授。14年光風会入選。28年文展入選。学習院にエッチング研究所開設。31年西田武雄を講師として講演会開催。1970年没、77歳。洋画、美教、版画

岡 憲介（おか・とくすけ/1879～1962年）
山口県生れ。本名落葉。東京美術学校（現東京藝術大学）卒、画家になる。国木田独歩とその弟収二と親しく交わり、他にも多くの画家、詩人らと交流落葉は彼らの作品が世に出る際に、挿絵、表紙絵等を担当、独歩の代表作『武蔵野』の表紙絵を描いたのも落葉である。明治から昭和戦前期の文壇の様子を、当事者ならではの口調で随筆としてまとめるなど、晩年まで精力的に文筆活動した。洋画、挿絵、表紙絵

岡上淑子（おかのうえ・としこ/1928 年～ ）
高知県生れ。1950年文化学院デザイン科入学、「コラージュ」に出会う。50～56年の 7 年のあいだに約 140 点ものコラージュ作品を制作。当時、日本におけるシュルレアリスムを主導した瀧口修造に見出され、マックス・エルンストの影響を受けてその表現は奥行きを広げてゆく。2019年東京都庭園美術館、高知県立美術館で個展。フォトコラージュ

岡野浩二（おかの・こうじ/1946 年～ ）
岡山県生れ。1967年東京藝術大学学内賞（安宅賞）、72年東京藝術大学大学院卒。卒業制作サロン・ド・プランタン賞。76年田島英昭、三栖右嗣と赫陽展を結成。90年オンワードギャラリー日本橋で個展。96年西武池袋アートフォーラムで個展。現在 無所属。洋画

岡野耕三（おかの・こうぞう/1940～2003 年）
岡山県生れ。東京藝術大学油絵科に入学、卒業制作で大橋賞。1967年同大学院 2 年の時、スペインに移住。マドリード、トレドで制作、69年クエンカで制作。初期は具象絵画を描いていたが、渡西後は抽象表現へ移行し、以後一貫して抽象画を描く。2003年没、63歳。洋画

岡野　栄（おかの・さかえ/1880～1942 年）
東京生れ。白馬会洋画研究所に学び黒田清輝に師事。1902年東京美術学校西洋画科卒。白馬会会員。1908年女子学習院に勤務、教授。08年中沢弘光、山本芳翠らと光風会創立。25～27年宮内省在外研究生として欧州に遊学。東京で没、63歳。洋画、口絵、美教、版画、水彩

岡野　博（おかの・ひろし/1949年～　）
広島県生れ。1973年武蔵野美術大学卒。75年フランス国立装飾美術学校壁画科卒。13年間仏滞在。86年帰国後、泰明画廊、柳画廊、梅田画廊、松坂屋名古屋等で開催。無所属。91年山田太一編「生きる悲しみ」(筑摩書房)表紙。92年教科書(学校図書)中学校1～3年の表紙　～'99。洋画、表紙、挿絵

岡上りう（おかのうえ・りう/1896～1969年）
1896年生れ。大高床右衛門・せつの子。結婚し、岡上の姓、1924年岡上りうは、岡田謙三、高崎剛、高野三三男と渡欧。後、高野三三男と結婚、高野りうを名乗る。川村記念美術館に作品所蔵。1969年没、72歳。洋画

岡部繁夫（おかべ・しげお/1912～1969 年）
広島県生れ。高畠達四郎、鈴木保徳、田中佐一郎に学ぶ。1937年独立展に出品。50年独立賞。59年独立美術協会会員。47年銀座松坂屋で個展。65年日本国際美術展で優賞。抽象表現。東京で没、57歳。洋画

岡部徳三（おかべ・　とくぞう/1932～2006 年）
東京生れ。26歳の時、久保貞次郎に出会い版画の刷り師となる。1964年神奈川県秦野市に岡部徳三がシルクスクリーン工房を開設。版元として活動。シルクスクリーン版画のパイオニア。91年大型版画作品の制作のため、神奈川県足柄上郡松田町寄に工房を移設。1994 年有限会社岡部版画出版(神奈川県秦野市)を設立。工房で製作した作品の出版事業(オリジナル・エディション)。靉嘔、草間彌生、ジョン・ケージ、谷川晃一、ナムジュン・パイク、彦坂尚嘉、堀浩哉、堀越千秋、藤江民、前田常作、元永定正、横尾忠則。2006年秦野市で没、74歳。版画摺師、シルクスクリーン版画のパイオニア

岡部敏也（おかべ・としや/1920～1945 年）
酒田市生れ。酒田商業学校から東京美術学校日本画科に進み、その傍ら洋画研究所で洋画も習得。在学中に日本画院に3回入選、同校を首席で卒業。第6回文展にも入選しており、将来が期待された。太平洋戦争に従軍、終戦直後の旧満州で没、26歳。日本画、洋画

岡部長景（おかべ・ながかげ/1884～1970 年）
東京生れ。1905年学習院高等科、09年東京帝国大学法科卒。朝日新聞社主村山長挙の実兄。09年外交官補となり、米国ワシントン日本大使館在勤 3 年、英国ロンドン日本大使館在勤 2 年、17年外務書記官。24年外務省文化事業部長、29年内大臣秘書官長兼式部次長。30年貴族院議員に当選、40年帝室博物館顧問。43年東条内閣の時文部大臣。52～64年東京国立近代美術館初代館長に就任。其他内閣美術振興調査会委員、日本育英会々長、国際文化振興会々長、日華絵画協会、日満文化協会々長、ローマ日本文化会館総長等を歴任し、社団法人尚友倶楽部理事長。東京で没、85歳。美術館長、美政、文部大臣

岡部文之助（おかべ・ふみのすけ/1909～1956 年）
札幌市生れ。札幌第一中学校卒。1931年東京美術学校図画師範科卒。林武に師事。山脇学園で講師。30年二科展に入選。32年より独立展に出品、40年独立展で独立美術協会賞、47年岡田賞、48年独立美術協会会員。東京で没、47歳。洋画、美教

岡見千吉郎（おかみ・せんきちろう/1858～1936 年）
1858年生れ。1877年工部美術学校入学、83年同校修。84年渡米。ミシガン州農業大学に留学。シスコで南方熊楠と交友。89年帰国。明治美術会に入会。1936年没、78歳。洋画

岡見富雄（おかみ・とみお/1890～1965 年）
東京生れ。1914年東京美術学校西洋画科卒。渡仏。15年渡米、16年渡仏、アマン・ジャンに師事、23年サロン・デ・チュイルリー結成とともに31年まで出品。31年レジオン・ドヌール勲章。32年帰国。33年帝展に入選。東光会創立に参加。41年新文展無鑑査。52～56年再渡仏。62年出版「パリ美術散歩」(美術出版社)。1965年没、75歳。洋画

岡峯龍也（おかみね・たつや/1896～1977 年）
宮崎県生れ。1916年鹿児島県立志布志中学校卒。21年日本歯科医学専門学校卒。23年歯科医院開業。35年宮崎美術協会のアンデパンダン展が県公会堂で開催。出品作品に、瑛九からゴッホの画集を贈られる。35年[瑛九]らと共に「ふるさと社」を結成。57年県立図書館個展、72年県総合博物館回顧展を開催。1977年没、81歳。洋画

岡村桂三郎（おかむら・けいざぶろう/1958 年～　）
東京生れ。1985、88年創画展で創画会賞。87年

山種美術館賞展で優秀賞。88年東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程満期退学。89～94年「飛翔展」(玉屋画廊)に出品。90年「菅楯彦大賞展」で佳作賞。93年「五島記念文化賞」美術新人賞。94～95年五島記念文化財団研修員NY滞在。2004年タカシマヤ美術賞、2003年芸術選奨文部科学大臣新人賞。06年佐藤美術館、08年神奈川県立近代美術館鎌倉館で個展。08年「東山魁夷記念日経日本画大賞展」で大賞。09年多摩美術大学教授。日本画、美教

岡村辰雄（おかむら・たつお/1904～1997年）
長野県生れ。1912年上京、27年表具店の原清廣堂に入門。30年多門堂を港区に創業。36年『表装備考』を上梓、“多門堂”を“多聞堂”に改める。50年額装に専念、とくに日本画額装の嚆矢、ステンレスなど新素材を積極的に取り入れ、建築様式の変化に対応した展示方法を開拓。52年有限会社岡村多聞堂を設立。東宮御所、新宮殿、吹上御所、国立劇場の装飾画の額装を手がける。55年『額装の話』を出版し、55年にブリヂストン美術館で「多聞堂額装展覧会」を開催。全国額縁組合を創立。82年自らの回想を綴った『如是多聞』を出版。88年額縁研究と製作による建築、美術界に対する功績で、吉田五十八賞特別賞。全国額縁組合連合会初代会長。東京で没、92歳。額装

岡村政子（おかむら・まさこ/1858～1936年）
信濃市生れ。ロシア正教会に学ぶ。1876年工部美術学校入学、フォンタネージに師事。石版印刷技術を学ぶ。78年工部美術学校中退。夫は石版版下画家・岡村竹四郎。美人画、風俗画を制作。女流石版画家のパイオニアの一人。1936年没、78歳。（出典わ眼）版画、水彩

岡村倫行（おかむら・りんこう/1944年～ ）
京都市生れ。京都市立日吉ヶ丘高等学校日本画科卒。池田遙邨に師事。63年日展に入選、京都市長賞受賞（以降2回受賞）、日春展日春賞受賞（以降3回受賞）。79年日展特選、80年日展特選、86年日展会員賞、2006年日展内閣総理大臣賞、日展評議員。81年山種美術館賞展優秀賞。京都教育大学教授。日本画家、美教

岡本一平（おかもと・いっぺい/1886～1948年）
函館市生れ。商工中学校卒。妻は作家のかの子、長男は太郎。1910年東京美術学校西洋画選科卒。11年文展に入選。卒業後1年ほど和田英作の帝国劇場天井画、舞台背景、装置の仕事に携った。12年朝日新聞入社後、漫画を描く漫画漫文で一時代を画す。22～29年渡欧、漫画漫文集「世界漫遊」。27年春陽会会員。著書『弥次喜多』、『岡本一平全集』。岐阜県で没、62歳。漫画、版画、舞美

岡本悍久（おかもと・かんきゅう/1943年～ ）
岡山大学大学院後期博士課程（西洋美術史）学ぶ、1983～85年日仏現代美術展（仏国立グランパレ巡回）。91年現代日本美術展（東京都・京都市美術館）。98年個展「岡本悍久・白と黒の世界20周年回顧展」（高梁市成羽美術館）。2008年学芸員資格取得。新聞記者～1991)。倉敷市立美術館長(1999～2004年)元倉敷芸術科学大学非常勤講師。洋画、美術館長

岡本帰一（おかもと・きいち/1888～1930年）
兵庫県生れ。葵橋洋画研究所で黒田清輝に師事。1910年白馬会展に出品。岸田劉生を知る。12年「ヒュウザン会（のちフュウザン会）」に出品。日本創作版画協会展に出品。のちに挿絵を描く、「コドモノクニ」「赤い鳥」などに童画を発表。兵庫県出身。童画集に『岡本帰一傑作集』。1930年没、42歳。洋画、挿絵、童画、版画

岡本錦金一・錦朋（おかもと・きんいち・きんぽう/1907～1999年）
_本名　岡本金一郎。岡山市生れ。岡山工芸学校木工科卒、東京美術学校彫塑科へ入学、卒業後は北村西望氏に師事。1931～33年連続して日展特選。戦後は日展審査員や評議員を歴任。主な作品には岡山駅前の「桃太郎」、岡山県総合グランドの「人見絹枝像」、岡山市西川沿い「平和の像」、沖田神社「津田永忠公」。1999年没、91歳。彫刻

岡本秋暉（おかもと・しゅうき/1807～1862年）
_江戸生れ。石黒政美の子。相模、小田原藩主大久保家につかえる。はじめ大西圭斎に、のち渡辺崋山に師事した。写実的な花鳥画を得意とし,代表作に「四季花鳥図屏風」「二宮尊徳画像」がある。1862年没、56歳。江戸時代後期の画家

岡本省吾（おかもと・しょうご/1920～2001年）
_東京生れ。1943年東京美術学校卒。68年春陽会出品、69年日本版画協会出品・会友。73年日本版画協会会員・春陽会会員。迎賓館買い上げ。83年中国政府より招待・北京中央美術学院で指導。86年ロイヤル銀座サロン「版生活20年展」。91年日本美術連盟の依頼により画集「富士1集」制作。92年銅版蔵書票集限定55部刊行。95年銅版蔵書票集限定25部刊行。98年銅版画「樹のある風景」画集刊行。2001年

没、81歳。2002年「版画芸術116号」に追悼特集、神田・木の葉画廊で遺作展。洋画、版画、蔵書

岡本神草（おかもと・しんそう/1894～1933 年）
神戸市生れ。菊池契月に師事する。竹久夢二に影響受けた。1915 年 京都市立美術工芸学校絵画科卒。甲斐荘楠音らと前衛的日本画研究集団「密栗会」の結成に参加。1918 年京都市立絵画専門学校卒、国画創作協会展に入選。甲斐庄楠音の「横櫛」とともに入賞候補に挙げられる。1928、32年帝展に入選。1933年没、39歳。日本画

岡本信治郎（おかもと・しんじろう/1933～2020 年）
東京生れ。都立日本橋高等学校卒、(株)凸版印刷勤務ながら日本水彩画展、二紀展などに出品。1956年村松画廊で個展、ヨシダ・ヨシエらと「グループ制作会議」を結成。62年シェル美術賞展で佳作賞。64年長岡現代美術館賞展で大賞。79年池田20世紀美術展で個展。65年代にはユーモラスな形態の内に空虚感を込めた連作を発表。2020年没、86歳。洋画、水彩

岡本大更（おかもと・たいこう/1872～1945 年）
三重県生れ。名は直道。独学で第八・九回文展、第一回院展に入選。人物画を得意とする。大阪に住した。また音楽・演劇を好む。1945年、没66歳。日本画、版画

岡本太郎（おかもと・たろう/1911～1996 年）
川崎市生れ。父は岡本一平、母は作家のかの子。慶応義塾普通部卒。1929年東京美術学校中退、両親とともに渡仏。ピカソの絵に大きく影響を受けた。32～37年ジャン・アルプらの勧誘を受け、美術団体アプストラクシオン・クレアシオン協会のメンバー。36年神秘主義と政治革命を目指す「社会学研究所」に加わる。この間パリ大学で美学、哲学, 社会学, 民族学を修め39年卒業。40年帰国。61年まで二科会会員。59年国際建築絵画大賞。61年毎日出版文化賞。70年大阪万国博覧会「太陽の塔」制作。80年小田急グランドギャラリーで回顧展。東京で没、84歳。99年川崎市岡本太郎美術館開館。洋画、彫刻、立体、版画、個人美術館

岡本淡雅（おかもと・たんが/1913～1992 年）
岡山県生れ。大阪美術学校卒。矢野橋村、横尾深林人に師事。大東南宋院展・日本南画院展に出品。1983年日本南画院展で文部大臣賞。日本南画院常務。1992年没、79歳。南画

岡本鐵四郎（おかもと・てつしろう/1915～1998 年）
松山市生れ。藤田嗣治に師事。戦犯として抑留されて、10年以上も中国で暮した。この間に描いたスケッチを特集。「戦地の手触り・岡本鐵四郎―戦後70年甦るスケッチ」が2015年久万美術館で開催。岡本は、同郷の洲之内徹と親く、1956年～松山で画家としての活動。松山で絵画教室を開き、風景を油絵で描いた。戦後、洲之内の経営する現代画廊で何度も個展を開催。抽象のスタイルのシレーズ、松山近郊の風景を描いた具象のシリーズがある。1998年没、83歳。洋画

岡本唐貴（おかもと・とうき/1903～1986 年）
倉敷市生れ。1923年東京美術学校彫刻科塑像部中退。24年前衛団体アクションに参加。三科造形美術協会の結成に参加。29年日本プロレタリア美術家同盟の結成に参加、中央委員。戦後、日本美術会の結成に参加。62年全ソ美術家同盟の招きで訪ソ。東京で没、82歳。白土三平の父。洋画、版画

岡本俊彦（おかもと・としひこ/生没年不詳）
江戸後期の日本画家、尾張国知多半田の郷土。実父の小栗伯圭に画法を受けるが後に岡本豊彦に師事してその養子となる。豊彦は四条派の始祖である松村呉春の門人。俊彦は蓮華光院の近侍となって岡本舎人とも称した。嘉永年間(1848～1854)に没。江戸後期の絵師

岡本弥寿子（おかもと・やすこ/1909～2007 年）
東京生れ。女子美術専門学校卒。奥村土牛、小林古径に師事。1934年院展入選、67年日本美術院賞。76年内閣総理大臣賞。繊細な筆致とあわい色彩で女性的な世界をえがいた。2007年没、98歳。日本画

おかもと ひろこ（おかもと・ひろこ/1957～2007 年）
1957年生れ。武蔵野美術短期大学で絵画を学ぶ。創形美術学校で版画を学ぶ。81年東京で個展。82年日本版画協会会員。2001年パリ移住、後数年で日本版画協会脱会。 日本、フランス、イタリア、カナダで展覧会開催。多くの賞を受賞。2007年没、50歳。3000点以上もの作品を残した。版画

岡本半三（おかもと・はんぞう/1925 年～ ）
東京生れ。東京大学美術史学科卒。安井曾太郎、奥村土牛に師事。1952～59年滞仏、サロン・ドートンヌ、サロン・ド・ラ・ジューヌ・パンチュールに入選。アンデパンダン展の出品作はフランス政府買上げ。裸婦や風景画にフォーヴ調の画風を展開。59年帰

国、戦中派の中堅画家グループ「同時代」に参加。安井賞展に出品。文春画廊、フジ・インターナショナル・アート・ギャラリー、フジヰ画廊で個展。(田村)洋画

岡山豊彦（おかやま・とよひこ/1773～1845 年）
倉敷市生れ。大坂に赴き綾山の師福原五岳にも学び、主に山水画を描いた。1796年頃四条派の呉春の門に入り、呉春の作品をすべて粉本として写した。呉春門弟筆頭として活躍。写生画風を基調として、南画的雰囲気が加味された山水を得意。呉春没後、画塾澄神社を開くと、田中日華、塩川文麟、柴田是真等多くの門人が集まった。塩川文麟の門からは幸野楳嶺を輩出するなど、豊彦の画系は後に近代日本京都画壇の主流。同門の柴田義董とともに古市金峨や小野雲鵬といった次世代の岡山画壇を支える四条派画家も育成、指導した。江戸後期の絵師、美教

岡　芳枝（おか・よしえ/生没年不詳）
秋田県出身？1901年東京美術学校卒(中沢弘光1900年卒の一期下)。07年第 1 回文展三等賞。08年第 2 回文展三等賞。第 6 回文展まで出品。第8回白馬会出品。白馬会に所属し帝展などにも入選。「主婦の友」「少年倶楽部」など雑誌の表紙制作。「講談社の絵本」挿絵。不明な点が多い。洋画、表紙、挿絵

岡　義実（おか・よしみ/1945 年～　）
福岡県生れ。1969年渡仏、増田誠に師事。72年ル・サロン無鑑査(73・金賞)。73年シャルル・コッテ賞。80年サロン・ドートンヌで日本人初のグランプリ受賞、サロン・ドートンヌ会員。83年郷土の作家達展(福岡市美術館)。洋画

小川芋銭（おがわ・うせん/1868～1938 年）
東京生れ。1880年ころ上京、本多錦吉郎の画塾彰技堂で洋画を学び，日本画を独修。91年《朝野新聞》に第 1 回帝国議会のスケッチが掲載，93年牛久に帰り農業に従事しながら，《茨城日報》や《いはらき》など，郷里のジャーナリズムに田園風刺漫画を掲載。1903年ころ幸徳秋水を知り，《平民新聞》に風刺漫画を発表。17年珊瑚会展に出品した「肉案」が横山大観に認められ日本美術院同人。35年帝国美術院参与。茨城県で没、70歳。日本画、漫画、挿絵、版画

小川幸一（おがわ・こういち/1950 年～　）
福岡市生れ。1974年多摩美術大学卒業後、76年から版画制作。82年「現代日本絵画展」佳作賞、84年「ジャパンエンバ美術コンクール」展京都国立近代美術館賞。91年「リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」展美術館買上賞。2007年福岡市文化賞。独特の浮遊感あふれる有機的な形態は、ときに清冽でときに妖艶である。版画

小川　智（おがわ・さとし/1943 年～　）
小樽市生れ。2009年に道展で佳作賞、10年会友、13年会友賞、14年会員。白日会にも出品し、準会員。05、07、12年日展入選。2019年道新ぎゃらりーで個展。札幌在住。洋画

小川　智（おがわ・さとし/1901～没年不詳）
1901年生れ。東京美術学校卒。帝展無鑑査。1932年光風会展で船岡賞。1938年光風会会員。洋画

小川　智（おがわ・さとし/1926年～　）
愛知県田原市生れ。1945年愛知第二師範学校卒。52、53、54年中部二紀賞(最優秀賞)。58年二紀会同人。66年二紀会会員。二紀会審査委員。61～63年安井賞展出品。納庫芸術村村長、竜紀会会長。洋画

小川信治（おがわ・しんじ/1959 年～　）
山口県生れ。1983年三重大学教育学部美術科卒。97年・2000年・03年に「ときの忘れもの」にて個展[小川信治展 Without you]を開催。00年豊田市美術館「空き地」展。03年東京・レントゲンヴェルケで個展。06年大阪・国立国際美術館[干渉する世界]展。洋画

小川翠村（おがわ・すいそん/1902～1964 年）
大阪生れ、19歳で京都に出、西山翠嶂に師事した。1920年帝展に入選し、第 6 回展、9 回、10 回で特選。30年帝展で推薦となり、戦後は日展に出品し、依属になっている。作品は専ら花鳥風景を得意とする。京都で没、61歳。日本画

小川千甕（おがわ・せんよう/1882～1971 年）
京都生れ。16歳で北村敬重の弟子。仏画、日本画を学ぶ。1904年聖護院洋画研究所に入門。06年関西美術院で浅井忠に師事。。浅井没後京都市立陶磁器試験場技手、明治末年上京、雑誌の挿絵、巌谷小波(博文館)のお伽噺がある。1912～14年欧州諸国を遍歴し、帰国後二科会創立に参加。15年珊瑚会を結成。油絵から日本画へ、南画風表現に傾き、21年院展にも出品し、42年大東南宗院委員。53年日展に出品。戦後は高島屋、松坂屋等で個展。墨画と書を得意とし、また随筆をよくする。主要作に「游踪集」「炬火乱舞」「群像」等がある。東京で没、89歳。洋画、日本画、南画、水墨、挿絵、版画　250

小川大系（おがわ・たいけい/1898～1980 年）

_長野県生れ。農業の傍ら表具師の修行をし、穂高町の飾り物に才能を発揮。35 歳で上京。北村西望に入門。北村西望の別邸の設計も行う。文展・日展等官展系作家として活躍。1941年文展無鑑査。戦後、郷里で碌山の顕彰活動の先頭に立ち、碌山美術館建設の設計図を作る活躍した。長野県で没、81歳。彫刻

小川孝子（おがわ・たかこ/1908～1989 年）
_新潟県生れ。1921年文化学院女学部創立第1期生入学。28年文化学院大学部美術科卒。有島生馬、石井柏亭らに師事。34年村井正誠と結婚。39年文化学院女学部講師。46年自由美術家協会出品、47年女流画家協会展に創立会員。50年自由美術家協会退会。51年モダンアート協会会員。64年国際女流美術展出品―パリ/パリ近代美術館。67年村井正誠・小川孝子二人展以降毎年開催（～1998年）。1989年没、81歳。洋画

尾川多計（おがわ・たけい/1906～1945 年）
東京生れ。川端画学校洋画部に学び、美術雑誌「アルト」「中央美術」「エコー」等の編集をなし後、毎日新聞社に入社、文化部嘱託として美術評論を担当。1945年没、39歳。ジャーナリスト、美評、美術雑誌、記者

小川龍彦（おがわ・たつひこ/1910～1988 年）
_静岡市生れ。1926年静岡市立商工補習学校卒。1929年童土会（のち静岡版画協会）を結成。31年平塚運一、恩地孝四郎に師事。34年国画会展 4 で国画奨学賞。41年日本版画協会会員。静岡県史編纂委員、静岡県文化財保審議会長。著書に「小川龍彦詩画集」、写真集に「静岡」など。静岡市で没、77歳。版画、
写真

小川傳四郎（おがわ・でんしろう/1918～1985 年）
島根県生れ。安井曾太郎に師事。1949年東京美術学校油画科卒。49年日展入選。元示現会会員。東京で没、67歳。洋画

小川俊郎（おがわ・としろう/1907～1985 年）
埼玉県生れ。青山師範学校卒。日本水彩画会会員。1985年没、78歳。水彩

小川博史（おがわ・ひろし/1913～2010 年）
_岐阜県生れ。1929年鬼頭鍋三郎に師事。31年多治見工業学校卒。34年辻永に師事。36年文展入選。41年光風会展レートン賞、46年光風会会員、48年光風会展特賞、82年光風会展辻永賞。44年文展岡田賞、49年日展特選、62年日展菊華賞、65年日展会員、89年日展文部大臣賞。90年勲四等瑞宝章。2010年没、96歳。洋画

小川正明（おがわ・まさあき/1947 年～ ）
浦和市生れ。女子美術大学短期大学教授、学部長、常務理事を経て2013年より付属高等学校・中学校校長。クラコフ、イビザ、ソウル、リュブリアナなど数々の国際版画展に出展。(社)日本版画協会会員、(社)日本美術家連盟会員、現在,女子美術大学理事・名誉教授、臨床美術学会理事。版画、美教

小川マリ子（おがわ・まりこ/1901～2006 年）
札幌市生れ。1922年東京女子大学文科卒。27年「一九三〇年協会」洋画研究所に通う。32～年独立展に出品を続ける。34年三岸節子と女艸会創立。50年春陽会会員。48年女流画家協会会員として出品。戦後はキュビスム的な形体表現を試行、一貫して卓上静物を白い背景に構成、制作。洋画

小川 緑（おがわ・みどり/1906～1988 年）
_北海道生れ。37年長崎に転居、太平洋美術学校卒業後、本郷絵画研究所、前田寛治自由画室に学ぶ。29～31年外遊。39年春陽展入選、53年春陽会会員。長崎市展・県展の審査員。長崎国際文化協会理事、「長崎市中島川を守る会」で初代会長として長崎の美術振興に尽力。61年長崎県文化功労者表彰。73年回顧展開催。東京で没、81歳。洋画

小川由加里（おがわ・ゆかり/1910～1981 年）
長野県生れ。指物師に入門。のち自営独立し、1936年木彫の聖観音像を制作。38年日本美術学校で池田勇八・吉田久継・岡野聖雲ら彫刻の指導を受けた。39年文展入選。戦後、日展や全信州美術展などを中心に活動し、48年アメリカ交易展で一等賞。50年～日本彫刻クラブ会員。54年アジア競技大会金賞。長野県で審査員。1981年没、71歳。彫刻

小川原脩（おがわら・しゅう/1911～2002 年）
北海道生れ。1929年上京、川端画学校、30年東京美術学校西洋画科に入学。33年帝展に入選。35年エコール・ド・東京に参加。瀧口修造のアヴァンギャルド芸術家クラブに参加。37年独立展出品。39年美術文化協会の創立参加。戦後は道内画壇の振興に寄与。全道美術協会の創立に参加。99年小川原脩記念美術館開館。北海道で没、91歳。洋画、美教、個人美術館

小川原脩　Ⅱ（おがわら・しゅう/1911～2002 年）
北海道生れ。1923 年北海道町立倶知安中学校入学。33 年東光会第 1 回展初入選。第 14 回帝展初入選。35 年東京美術学校西洋画科卒。中央美術展出品。39 年美術文化協会の創立に参加。43 年決戦美術展で陸軍大臣賞。44 年報道班員として中国へ従軍。45 年倶知安に帰郷。木田金次郎らと後志美術協会結成。全道美術協会の創立に参加。47 年美術文化協会脱退。49 年北海道学芸大学などで非常勤講師。75 年北海道文化賞。89 年文部大臣賞、北海道新聞文化賞。94 年北海道開発功労賞。99 年小川原脩記念美術館開館。2002 年 8 月 29 日没、享年 91 歳。（佐）洋画、美教、個人美術館

沖　一峨（おき・いちが/1797～1855 年）
_江戸生れ。因幡鳥取藩の絵師沖探容の養子となる。1840年家督をつぎ、江戸藩邸で画業に専念する。沖氏は代々狩野派であるが、琳派風に写実をくわえた極彩色の花鳥画を得意とした。1855年没、60歳。江戸時代後期の画家

荻島安二（おぎしま・やすじ/1895～1939 年）
横浜市生れ。朝倉文夫に師事し、旧文展及初期帝展に逐年出品、のちニ科展に転じた。1933年構造社に入会、会員、以降毎年出品、33年文展無鑑査。予て商業彫塑の方面に独自の才能を発揮し、島津製作所マネキン部の顧問。1939年没、45歳。彫刻 450

荻須高徳（おぎす・たかのり/1901～1986 年）
愛知県生れ。1926年東京美術学校西洋画科卒。卒業後渡仏し、36年サロン・ドートンヌ会員、40年まで滞在。40年新制作派協会会員。48年再渡仏。55年神奈川県立美術館で回顧展を開催。82年文化功労章。パリで没、84歳。没後、文化勲章授与。（出典わ眼）洋画、版画

小木曽誠（おぎそ・まこと/1975 年～　）
_奈良県生れ。1996年武蔵野美術大学退学。2000年東京藝術大学美術学部絵画科油絵専攻卒。O 氏賞、学校買上賞。05年東京藝術大学油絵技法材料研究室後期博士課程単位取得満期退学。佐賀大学准教授、白日会会員。個展・グループ展多数。洋画、美教

沖田　稔（おきた・みのる/1904～1987 年）
広島県生れ。大阪美術学校卒。斎藤与里に師事。新世紀美術協会展に出品。のち白亜美術協会創立会員。1987年没、83歳。洋画

荻　太郎（おぎ・たろう/1915～2009 年）
_愛知県生れ。1939年東京美術学校油画科卒。39年新制作派展で新作家賞。47年同会会員。多くの国際展覧会に出品。67年和光大学人文学部芸術学科教授。79年新制作展で長谷川仁記念賞。日動サロンで個展。88年小山敬三美術賞。2003年岡崎市美術館で個展。2009年没、94歳。洋画、版画、美教

荻津勝孝（おぎつ・かつたか/1746～1809 年）
_1746年生れ。石橋四郎兵衛弘賢の二男。のち秋田藩士・荻津勝猷の婿養子。独元斎と号した。狩野派を本格的に学び、狩野派の筆致に陰影法を加味した作品を残した。平賀源内に直接西洋画法の手ほどきを受けてと伝わっているが、定かではない。8代藩主・曙山と9代藩主義和の2代に仕え、90年、寛政2年に天流切合棒術師範となった。1809年没、64歳。江戸中-後期の絵師、秋田蘭学

翁　朝盛（おきな・ちょうせい・あさもり/1906～1968 年）
宮彫師として祐廷(初代翁家)の孫、二代目祐年の子。1924～33年上京して山崎朝雲の門に入り学ぶ。29年日本美術協会展に入選、主席賞を 2 回受賞、無鑑査。30年帝展入選。41年文展無鑑査。45年仙台に定住し、51年アトリエをつくって製作。新東北美術展、宮城県連合美術展の審査委員。59年創型会同人。52年彼独自に創始した「錦彫」-〈私の錦彫〉錦は数多くの糸を紬いで豪華絢爛の美を現出。64年日本橋三越本店にて個展。66年仙台市三島学園女子大学教授。代表作に「伊達正宗公像」(青葉神社御神体)、「土井晩翠像」(晩翠草居)、「平和母子像」(県庁前広場)、「黄金の館」(仙台市庁舎内)、「仁王尊像」(定義如来西方寺)等がある。仙台市で没、61歳。彫刻、美教

荻野康児（おぎの・こうじ/1897～1974 年）
横浜市生れ。京都市立美術工芸学校で日本画を学ぶが中退、上京、川端画学校で洋画を学ぶ。1933～40年二科展に出品。34年日本水彩画会展で日本水彩賞、会員。40年水彩連盟を結成。45年二科会再建に参加、会員。55年野間仁根らと一陽会創立会員。東京で没、77歳。洋画、水彩、日本画

小城　基（おぎ・もとい/1900～1970 年）
福岡県生れ。日本美術学校卒、独学で絵を学ぶ。1925年渡仏。27～28年サロン・ドートンヌ出品。サロン・ナショナルにも出品。29年三越で個展。29～32年、33～34年パリに渡る。35年新自然派協会展を創立。戦後は消息不明。1970年没、70歳。洋画、水彩

大給近清（おぎゅう・ちかきよ・きんせい/1884～1944 年）
東京生れ。子爵・大給近道の子。学習院卒。1896年東京美術学校西洋画科卒。黒田清輝に師事し、1927年黒田清輝の遺産による美術奨励事業開始とともに美術研究所で遺作の管理に当った。1944年没、61歳。洋画

荻原孝一（おぎわら・こういち/1909～1979 年）
長野県生れ。野沢中学校卒業後上京し、川端画学校に学び、1934年東京美術学校西洋画科卒。藤島武二に師事。38年～54年野沢中学校、姫路高等女学校、野沢北高校の教諭。48年日展入選。48年佐久美術展を結成。51年一水会に出品、54年一水会々員。62年上野松坂屋で個展。日本山岳画協会に所属。64年渡欧。68年から佐久市民美術展運営委員。73、77年紺綬褒章。1979年没、70歳。洋画、美教

荻原守衛(碌山)（おぎわら・もりえ(ろくざん)/1879～1910 年）
長野県生れ。1899年画家を志して上京し，小山正太郎の不同舎で学ぶ。1901年渡米NYのアート・ステューデンツ・リーグで学ぶ。03年仏留学し，J.-P.ローランスに学ぶ。ロダンの作品，特に『考える人』に感動して画業をやめ彫刻に転じた。07年にはロダンを訪問。08年帰国後は文展，太平洋画会に作品を発表、高村光太郎とともに日本近代彫刻の道を開いた。東京、新宿の中村屋隣にあった写真館をアトリエに改造することを引受け、落成をみた10年、東京で没、30歳。遺作は碌山美術館に納められている。『女』の石膏原型（東京国立博物館）は，近代日本彫刻最初の重要文化財に指定。彫刻

奥瀬英三（おくせ・えいぞう/1891～1975 年）
三重県生れ。1912年上京し、5年間太平洋画会研究所に学ぶ。14年文展初入選。17年太平洋画会会員。24年槐樹社創立に参加。25，27年帝展で連続特選。47年示現会創立会員のち代表。60年埼玉県文化賞。70年日展参与。浦和市で没、84歳。洋画、版画

奥田元宗（おくだ・げんそう/1912～2003 年）
広島県生れ。1931年に上京し遠戚の児玉希望に師事、内弟子。38年文展で特選、49年日展で特選、白寿賞、62年日展で文部大臣賞。73年日本芸術院会員。74年日展常任理事、77年日展理事長。81年文化功労賞、84年文化勲章。東京で没、90歳。妻は人形作家・奥田小由女。日本画、版画

奥田省一（おくだ・しょういち/1925～2008 年）
熊本県生まれ。日本美術学校修学。光風会、一水会他に出品。毎年、取材などの為、渡欧し、常に現場を大切にしてきた。国内有名デパート画廊で100回を超える個展を開催。2008年没、83歳。洋画

奥田 仁（おくだ・ひとし/1917～1999 年）
岡山県生れ。1935年京都高等工芸学校図案科に進み、独立美術研究所に入門。須田國太郎、都鳥英喜、林重義、小林和作の指導を受ける。41、42年には二年連続で京展市長賞。78年ギャルリー宮脇個展開催。83年岡山天満屋で回顧展。「奥田仁画集」を刊行しました。1999年没、82歳。洋画

奥谷 博（おくたに・ひろし/1934 年～ ）
高知県生れ。1963年東京藝術大学専攻科油画科修了、大橋賞。64年独立展で奨励賞、会友。65年独立賞・須田賞。66年独立美術協会会員、66年昭和会賞。69年愛知県立芸術大学助教授。67～68年文部省芸術家研修員として渡欧。82年神奈川県立美術館で個展。83年芸術選奨文部大臣賞。95年東郷青児美術館賞。96年日本芸術院賞、日本芸術院会員。2001年東京藝術大学美術学部客員教授。07年文化功労者。17年文化勲章。洋画、美教

奥田善巳（おくだ・よしみ/1931～2011 年）
京都府生れ。1963年読売アンデパンダン展に出品。67年国際青年美術展で日本文化フォーラム賞。71年現代国際彫刻展コンクールで大賞。84年大阪府立現代美術センターで個展(ドローイング・ペインティング)。2011年没、80歳。洋画、彫刻

奥西賀男（おくにし・よしお/1945年～ ）
岐阜市生れ。1970年東京芸術大学油画科卒。74年渡仏、パリ国立美術大学入学(ピエール・マッティーに師事)、75年サロン・ドートンヌ入選(グラン・パレ)。84年個展(泰明画廊)。89年絵本「海の中のぞいた」(福音館)作・画。90年大阪花博展(三越)。92年現美展出品(以降毎年)。洋画、絵本、ウイーン幻想派

小熊秀雄（おぐま・ひでお/1901～1940年）
北海道生れ。28年上京。31年プロレタリア詩人会に参加、のち日本プロレタリア作家同盟。34年頃寺田政明ら画家と親交して油彩やデッサンを始める。35年「小熊秀雄詩集」、詩集「飛ぶ橇」刊行。37年個展。晩年は結核。詩作、漫画、絵画制作、美術批評を続けた。東京で没、39歳。詩人、美評、ペン、漫画

奥村土牛（おくむら・とぎゅう/1889～1990年）

東京生れ。1905年梶田半古画塾に入門。35年帝国美術学校日本画科主任教授。47年日本芸術院会員。49年女子美術大学教授。51年武蔵野美術大学教授。53年多摩美術大学教授。62年文化勲章、文化功労者。78年日本美術院理事長。東京で没、101歳。日本画、美教、版画

奥村博史（おくむら・ひろし/1889～1964年）
神奈川県生れ。逗子開成中学校卒。日本水彩画会研究所に学ぶ。1911年巽画会に出品、受賞。国画会にうつり、国画会同人、25年日本水彩画会会員。成城学園の画の教師。33年冨本憲吉氏に勧めで銀指環を国展に出品、受賞。国画会会員、以来画業とともに指環の制作は続く。36年日本水彩画研究所時代からの友赤城泰舒氏と中国へ写生旅行。上海滞在中制作した臨終の魯迅像(油)は現在上海魯迅記念館蔵。戦後、新しき村美術部の会員。晩年は無所属。東京で没、72歳。水彩、美教、版画

奥村政信（おくむら・まさのぶ/1686～1764年）
絵草紙問屋を経営。紅絵(べにえ)・漆絵・紅摺(べにずり)絵など初期の浮世絵版画の彩色の改良に貢献。浮き絵・柱絵を考案した。1764年没、78歳。江戸中期の浮世絵、浮き絵・柱絵を考案

奥村光正（おくむら・みつまさ/1942～1997年）
長野県生れ。1968年新制作展で新作家賞。69年東京藝術大学大学院油画科を修了。72年渡仏。78年昭和会賞。国際形象展、安井賞展に出品。主に日動画廊で個展を開催。87年巴東会展に参加。パリで没、55歳。（出典　わ眼）洋画

奥谷太一（おくや・たいち/1980年～　）
神奈川県生れ。2003年安宅賞。04年国際瀧富士美術賞二十五周年記念グランプリ瀧久雄賞。05年東京藝術大学美術学部絵画科油絵専攻卒、O氏記念賞。07年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻（油画）修了。08年東京藝術大学油画研究室教育研究助手（～10）。09年独立春季新人選抜展で独立選抜展賞、独立展で独立賞。10年独立展で会員。洋画

オクヤ・ナオミ（おくや・なおみ/1930年～2020年）
石川県生れ。金沢美術工芸専門学校卒。1965～82年パリで制作。パリ青年ビエンナーレ展、ヨーロッパ各国の国際美術展、版画展出品。1967、68、69、70年ズウジャック画廊（ベルギー）、69年東京大学教養学部美術博物館「二十四の蝶番」、82年銀座自由が丘画廊（東京）、2003年、08年ぎゃらりー由芽（東京）、15年半原版画館「オクヤナオミ展」（岐阜）、12年「宮本三郎とオクヤナオミ」（小松市立本陣記念美術館）、15年「デッサン展」ツァイト・フォト・サロン（東京）で個展。2020年没、90歳。版画

奥山儀八郎（おくやま・ぎはちろう/1907～1981年）
山形県生れ。上阪雅人に学ぶ。1928年日本毛織入社。木版多色刷りの広告版画を制作。31年フリー、東京広告美術協会を設立。36年石井研堂の指導により伝統版画に開眼。戦後は奥山儀八郎版画工房を松戸に設立、初代歌川広重の「東海道五十三次」の復刻や風物版画を手がけた。著作もした。千葉県で没、74歳。版画

奥山民枝（おくやま・たみえ/1946年～　）
新潟県生れ。1966年現代演劇協会ホール「令嬢ジュリー」舞台壁画制作。草月会館「ジョン・シルバー」舞台装置制作。67年日生劇場「桜の園」舞台壁画制作69年東京芸術大学美術学部卒、スペイン王立サン・フェルナンド美術大学名誉留学生として渡西。71年ユーラシア大陸横断旅行を経て帰国。74年北米横断旅行。78年インドネシア諸島の旅。87年朝日新聞朝刊小説「黄色い髪」挿画連載。92年安井賞。2010年広島文化賞。2012年尾道大学退官。洋画、舞美、挿絵、版画

奥山藤一（おくやま・とういち・ふじかず？/1911～1991年）
京都市生れ。1930年関西美術院に入学。30～41年鹿子木孟郎の画塾に入門師事、35～38年渡欧し、ベラスケス、レンブラントを研究、模写。京都日仏学館で後進の指導。66年日展入選、72年改組日展で特選。70年一水会展で一水会賞、71年会員、72年会員優賞。京都市で没、79歳。洋画

小倉右一郎（おぐら・ういちろう/1881～1962年）
香川県生れ。東京美術学校彫刻科卒。1913年大正博覧会で二等銀杯。16年文展で特選、審査員。20年渡仏、ロダンに師事。21年滝野川彫刻研究所を設立。48年高松工芸高校長。代表作に靖国神社の忠魂碑,満濃池畔の弘法大師銅像。大宮市で没、81歳。彫刻、美教、彫刻研究所

小椋繁治（おぐら・しげはる/1888～1969年）
鳥取県生れ。鳥取師範学校を中退、検定試験によって教員免許を取得。関西美術院を経て1919年上京、本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事し、油彩、水彩の技法を学び、陶器の知識も得た。26年「砂丘社」の同人。40年日本水彩画会会員。58年に増田英一らと山陰支部を結成。戦前は、水彩画会展、二科展、一水会展などに出品、戦後は倉吉に戻り、倉吉市展、

鳥取県展などの創立に尽力。1969年没、81歳。洋画、水彩

小倉静三（おぐら・せいぞう/1898～1987 年）
_鹿児島市生れ。鹿児島二中に進み、東京美術学校や川端画学校に学んだとされるが定かでない。藤島武二、岡田三郎助に師事。大嵩双山と谷口午二に師事し、金羊会の結成に加わった。南国美術展の創設に関わった。松坂屋の宣伝部などで活躍。光風会に出品したが、戦後は個展を中心に活動。1987年没、89歳。洋画

小倉尚人（おぐら・なおと/1944～2009 年）
_旧満州生れ。1963年東京学芸大学美術家入学。油絵や彫刻を中心に学ぶ一方で、座禅道場に通い仏教に傾倒していく。卒業後は高校講師などをしながら制作を続ける。銀座の画廊で個展を開催すると、縦横約180センチにも及ぶこの大作は全国紙や美術雑誌に取り上げられ注目を集める。「胎蔵界曼荼羅」、「金剛界曼荼羅」等900点を遺す。福島県南相馬市の岩屋寺に奉納。洋画、美教

小倉遊亀（おぐら・ゆき/1895～2000 年）
_大津市生れ。1913年滋賀県立大津高等女学校入学、17年奈良女子高等師範卒。女子高で国文学を教える、20年安田靫彦に師事。26～98年院展入選。32 年、女性初の日本美術院同人。36年山岡鉄舟門下の小倉鉄樹と結婚。鎌倉に住む。76年日本芸術院会員、78年文化功労者。80年文化勲章。90～96年日本美術院理事長。99年パリで個展。鎌倉で没、105歳。日本画

小倉正史（おぐら・まさし/1934～2020 年）
_千葉県生れ。美術評論家、美術ジャーナリスト。フランス語の翻訳家としても活動し、94年にフランス芸術文化勲章シュヴァリエ章。共著に『現代美術アール・ヌーヴォーからポストモダンまで』、訳書にジャン・コーヌ著『コミュニケーションの美学』など。横浜市で没、85歳。美評、美術ジャーナリスト

小栗　潮（おぐり・うしお/1921～2013 年）
佐賀県生れ。山口蓬春、山本丘人らに師事。1944年東京美術学校日本画科卒。47年院展入選。56年日展に所属、同年「尾瀬沼畔」入選。57年日展で特選。91年日展で文部大臣賞。日展参与。2013年没、92歳。日本画

小栗美二（おぐり・よしじ/1903～1969 年）
岐阜県生れ。1923年東京美術学校を中退。24年日活京都スタジオに入り、のち美術部長。30～32年二科展に入選。38年独立展に入選、全関西美術展で朝日賞。35年北脇昇らと新日本洋画協会を設立。50年京都市立美術大学教授。52年「アトリエ・ラ・クエル」を主宰。69年没、66歳。洋画、版画、美教

奥龍之介_（おく・りゅうのすけ/1923～1986年）
東京生れ。1945年東京美術学校油画科中退。井原宇三郎に師事。53年日展初入選。光陽会運営委員、光陽会賞。67年安井賞候補新人展に出品。72年安井賞展に出品。1986年没、63歳。洋画

300

刑部　人（おさかべ・じん/1906～1978 年）
栃木県生れ。1918年上京、川端龍子に師事。22年～川端画学校に通う。28年帝展に入選。29年東京美術学校西洋画科卒。40年東京高等工芸学校（現在の千葉大学工学部）助教授。46、48年日展で特選。58年新世紀美術協会に委員として参加。51年日本橋三越において毎年個展。68年日展会員。東京で没、71歳。洋画、水彩、美教

小崎　侃（おざき・かん/1942年～　）
_熊本市生れ。1966年東京太平洋美術学校彫刻科卒。72年フランス・イタリア・スペイン・エジプト遊行。74年太平洋美術会賞。会員推挙（版画）。2006年太平洋美術会評議員・審査員。山頭火、平和などをテーマに全国各地で個展開催は350回を超える。市川森一（脚本家）の書き下ろし新聞小説「蝶々さん」（長崎新聞）の挿絵を5月より連載。洋画、版画、挿絵

尾崎正教（おざき・せいきょう/1922～2001 年）
愛媛県大洲市生れ。小学校の美術教師をしながら、久保貞次郎に師事、傾倒し創造美育運動、小コレクター運動を推進。1971年「人間と大地のまつり」を代々木公園で開催。尾崎正教・ヨシダ・ヨシエ企画。74年現代版画センター事務局長。78年手島重衛と千葉県に磯部行久美術館を設立。「わたくし美術館の会」を主宰。1980年著書「わたくし美術館」第1巻を刊行、その後全4巻発刊、「わたくし美術館」設立ブームを作った。その後、美術館村構想、文化勲章リーグ等のムーブメントを起こしながら2001年旅先で突然没、79歳。創造美育運動、小コレクター運動、美普、「わたくし美術館の会」主宰

尾崎悌之助（おざき・ていのすけ/1910～1986 年）
鳥取市生れ。京都高等工芸学校卒。関西美術院に学ぶ。黒田重太郎に師事。52年鳥取大火で作品焼失。1957年行動美術協会会員。60年渡欧、フラン

ス、スペイン。74年ギリシャ、イタリア。鳥取市で没、76歳。洋画

尾崎正章（おざき・まさあき/1912～2001 年）
山口県生れ。1949年日展初入選。53年山口県芸術文化奨励賞。一水会会員優勝。60年日展特選。一水会委員となる。以後、一水会常務委員、運営委員歴任。日展審査員、評議員、参与歴任。93年オランダ・テルフザイル市にて尾崎正章展。心象表現「白い叙情」として高い評価。2001年没、89歳。洋画

尾崎愛明（おざき・あいめい/1933 年～ ）
東京生れ。1949年都立上野高校に入学。ではじめて油絵をかく。1957 年東京芸大卒、デザインで生計。1965～88年 友人鶴岡弘康の設立した広告制作会社創美企画に入社。1994 年朝日カルチャーセンター千葉にて油絵教室講師。93年尾崎愛明の世界展「エロスとタナトスの博物誌」伊東・池田 20 世紀美術館63年新表現展（新宿・椿近代画廊）、64年国際青年美術家展（池袋・西武百貨店）。洋画、デザイナー、美教

尾崎良二（おざき・りょうじ/1934 年～ ）
三重県生れ。愛知学芸大学卒。1959～71年独立美術協会会員、のち常任委員。62～63 年渡欧。64年～東京・大阪・名古屋で個展。71年 ニューギニア・オーストラリア・ニュージーランド旅行。75年石版画集「海十瞬」刊行。80年個展、北陸・ 東北・日本海。安井賞展、レ・ヌフ展 朝日美術展に出品。三越で個展。洋画、版画、パス

小作青史（おざく・せいし/1936 年～ ）
東京生れ。1960年東京藝術大学油画専攻科を卒業。61年現代日本美術展に油彩画が入選。65年ライプツィヒ国際美術展銅賞。67～84年東京、大阪のフォルム画廊で個展。68年クラコウ国際版画ビエンナーレでブロラッフ美術館賞。71年多摩美術大学油画専攻（版画）で指導。74年フィレンツェ国際版画ビエンナーレ展エメリア・ロマニア県知事賞。79～80年文化庁在外派遣研究員として仏、独留学。木版リトグラフ創案。楊枝バレン手刷り手法考案、簡易プレス機開発。版画、美教、洋画

小沢一郎（おざわ・いちろう/1864～1922 年）
神奈川県生れ。父はチャールズ・ワーグマン。父より水彩画の手ほどき。一時銀行に勤務。横浜に美術店を開き、海外向け「輸出画」を扱う。東京近郊、箱根の風景画制作。横浜で没、58歳。水彩

小澤秋成（おざわ・しゅうせい/1886～1954 年）
長野県生れ。1911年東京美術学校図画師範科卒。中学校教員。27年渡仏、サロン・ドートンヌ等各種展覧会に出品。30年帰国。31年三越で小澤秋成滞欧洋画展覧会。31～34年台湾美術展の審査員。35年「漆工芸社」を設立、新技法を発明、オリジナル図案を考案。京都府で没、68歳。洋画、図案

尾沢辰夫（おざわ・たつお/1904～1941 年）
名古屋市生れ。1922年頃鈴木不知の名古屋洋画研究所に学ぶ。24年西村千太郎らと「アザミ画会」を結成。26年二科展に入選。27, 28年「一九三〇年協会」展に入選。30年頃緑ケ丘中央洋画研究所で横井礼以に師事。38年二科展で特待。41年二科会会友。41年没、37歳。洋画

押江千衣子（おしえ・ちえこ/1969 年～ ）
大阪生れ。1995年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。植物の作品で知られる。オイルパステルを使った油彩。2003年求龍堂『押江千衣子目をすます』画集刊行。洋画、現代美術

織田一磨（おだ・かずま/1882～1956 年）
東京生れ。洋画を川村清雄、石版を金子政次郎に学んだ。1888年大阪の実兄織田東禹のもとに同居、89年京都新古美術展で 1 等褒賞。1903年上京後は川村清雄等のトモエ会に発表。複製石版をはじめた。09年山本鼎、石井柏亭等の雑誌「方寸」の同人。創作版画の運動をおこし、石版による創作版画を確立した。15年「東京風景」「大阪風景」など情緒豊かな連作石版を発表。18年山本鼎、戸張孤雁等と日本創作版画協会を創立。30年洋風版画協会を設立。31年日本版画協会の創立に参加。53年織田石販術研究所開設。東京で没、73歳。版画、水彩、浮世絵、創作版画

小田切訓（おだぎり・さとし/1943 年～ ）
北海道生れ。明治大学卒。1979、86年現代洋画精鋭選抜記念展で銅賞。80年示現会展で佳作賞。83, 84年示現会で奨励賞。84年示現会会員。アトリエ出版社よりｵﾘｼﾞﾅﾙﾘﾄｸﾞﾗﾌ・ｼﾙｸｽｸﾘｰﾝ制作。90年示現会安田火災美術財団奨励賞。94年画集「欧羅巴を描く」出版-求龍堂。2001年示現会退会、風土会入会。04年松坂屋本店個展開催。全国百貨店で個展多数、風土会会員、日展会友。洋画

尾竹越堂（おだけ・えつどう/1868～1931 年）
新潟県生れ。尾竹竹坡、尾竹国観の兄。「絵入新潟新聞」などに挿絵をえがく。1899年上京、小堀鞆音

にまなぶ。人物画を得意とした。明治末期から大正初期の文展で活躍。1931年没、64歳。日本画、版画

尾竹國観（おだけ・こっかん/1880～1945 年）
新潟県生れ。尾竹越堂、尾竹竹坡の弟。小堀鞆音(ともと)に師事。1909年文展で 2 等賞、以後おもに文展で活躍、歴史画の大作を発表した。雑誌や絵本の挿絵もえがいた。東京で没、65歳。日本画、版画、浮世絵

尾竹竹坡（おたけ・ちくは/1878～1936 年）
新潟市生れ。4歳で南宗派の笹田雲石に学び、竹坡の雅号。尾竹越堂は兄、尾竹国観は弟。1891年富山に移り、生活の為に売薬版画の下絵や新聞挿画を描く。96年上京して川端玉章に入門。1907年文展入選。09年文展三等賞。10、11年文展二等賞。目黒雅叙園の装飾。1936年没、58歳。日本画、版画、浮世絵

尾竹竹坡 Ⅱ（おだけ・ちくは/1878～1936 年）
新潟県生れ。尾竹越堂の弟、尾竹国観の兄。4 歳で笹田雲石に、のち川端玉章、小堀鞆音にまなぶ。1909,10,11年の文展で受賞。19年八火社を創設。東京で没、59歳。日本画家、版画、浮世絵

織田彩子（おだ・さいこ/1911～2004 年）
福島県生れ。女子美術専門学校中退、里見勝蔵、林武に師事。1930年の二科展に母の大内のぶ子とともに入選。34年三岸節子らと女艸会創立。37年林武に師事し、「一九三〇年協会」洋画研究所に通う。51年独立賞受賞。56年独立美術協会会員。56年女子美術協会会員。97年青梅市立美術館で回顧展「織田彩子展」開催。97年没、93歳。洋画

織田 明・東禹（おだ・さとし、とうう/1873～1933 年）
東京生れ。織田一磨の兄。1889年不同舎の宮島鎗八に師事。1899年新古美術品展で一等褒状。1904年関西美術展で宮内庁買上。07年東京勧業博覧会で水彩画が褒状。18年文展入選。19年帝展入選。20、21年渡欧。23年大阪市美術協会の創立参加、幹事。33年没、60歳。洋画、水彩

小田さゆり（おだ・さゆり/1967 年～ ）
山口県生れ。1990年武蔵野美術大学卒。主体美術協会佳作賞、92年会員。2001年退会。99年結婚、サユリ・ギビアン（米国籍）として柴田悦子画廊（銀座）で個展。NYに住んだ。洋画

織田 繁（おだ・しげる/1933 年～ ）
大阪生れ。1951年大阪府立高津高等学校卒。～54年大阪市立美術研究所に学ぶ。52年関西独立賞。54年頃より「銅版画」。59年ライプツィヒ国際版画展、作品はドレスデン美術館に買い上。66渡仏、パリ国立美術大学[銅版画]科、アトリエ17で[銅版画]の各種技法[ヘイター]に学ぶ。67年帰国。その後各地で個展を開催。洋画、版画

小田 襄（おだ・じょう/1936～2004年）
東京生れ。1960年 東京芸術大学美術学部彫刻科卒。61年新制作協会展品、39年会員。50年長野市野外彫刻賞。52年中原悌二郎賞優秀賞。59年神戸須磨離宮公園現代彫刻展大賞。ステンレス・スチールによる独自の造形世界を展開。日本美術家連盟理事長。多摩美大教授。2004年没、67歳。彫刻、版画

小田野直林（おだの・なおしげ/1772～1841 年）
1772年生れ。小田野直武の二男。諱は直林。小武、蛙山、如雲斎、麓蛙叟などと号した。確かな洋風画は落款のある「老子騎牛図」1点だけである。1841年没、69歳。江戸絵師、秋田蘭学

小田野直武（おだの・なおたけ/1750～1780 年）
秋田県生れ。狩野派を学び、浮世絵風の美人画も描く。絵の才能が認められ、佐竹北家の当主・佐竹義躬、秋田藩主・佐竹義敦（佐竹曙山）の知遇を受ける。1773年平賀源内が角館を訪れ、直武と出会う。源内は直武に西洋画を教えた。源内自身は「素人としては上手」という程度の画力であるが、遠近法、陰影法などの西洋絵画の技法を直武に伝えた。73年江戸へ上り、源内の所に寄寓、『解体新書』を描く。直武は源内のもとで、西洋絵画技法を習得、日本画と西洋画を融合した画風を確立。佐竹曙山や佐竹義躬に絵の指導を行った。「秋田蘭画」または秋田派と呼ばれた。1780年没、30歳。江戸中期の画家、洋画、秋田蘭画

織田広喜（おだ・ひろき/1914～2012 年）
福岡県生れ。1939年日本美術学校西洋画科卒。40年二科展に出品。50年二科会会員。60年渡仏。68年二科展で総理大臣賞。95年日本芸術院賞、日本芸術院会員。2003年フランス政府芸術文化勲章・シュヴァリエを受賞。2006年二科会理事長。12年没。98歳。洋画、版画

小田宏子（おだ・ひろこ/1940～2015 年）
倉敷市生れ。高校時代に河原修平主宰の「倉敷素描絵画研究所」へ通い、岡山大学教育学部特設美術

科に進学。具象・抽象絵画を経て、1980年代に連続するパターンが登場する抽象表現を開始。1997年和紙を用いた表現へ転換、雁皮紙で綿を包みステープル針で固定する独自の作風を確立、オブジェによるインスタレーションを展開した。2015年没、75歳。洋画、オブジェ、インスタ

織田広比古（おだ・ひろひこ/1953～2009 年）
東京生れ。父は織田広喜1976 年東京造形大学卒。以後、個展多数開催。上野の森絵画大賞展入選、日伯賞、85年二科展特選、88年パリ賞、96年会員。MOA 美術館賞、上野の森絵画大賞展フジテレビ賞。パリで没、56歳。洋画

尾田　龍（おだ・りゅう/1906～1992 年）
姫路市生れ。1925年姫路中学校卒。上京、川端画学校に学ぶ。28～37年二科展に出品。「一九三〇年協会」展に入選。国際美術協会展で協会賞。31年東京美術学校西洋画科卒。40年国展に出品、52年国画会会員。67年より度々外遊。73～82年姫路学院女子大学教授。75年兵庫県文化賞。86年姫路市立美術館個展。東京で没、85歳。洋画、美教

落合素江（おちあい・そこう/1831～1885 年）
長崎県生れ。独学で油絵を習得、長崎派の画家・玉木鶴亭から学んだ。近代写真の祖で上野彦馬とは親交厚く、写真をもとに遠近法や陰影の技法を取り入れた絵画を描く。油絵以外にも水彩画や青貝を用いた漆器などの工芸にも秀でており、1877年内国勧業博覧会に絵画と工芸作品を数点出品。軍艦を細密に描くことを得意とし、門下生も数多く、長崎における油絵の普及に大きく貢献したと伝えられている。1885年没、54歳。江戸時代の絵師。長崎県美の作家検索引用。江戸後期の絵師、洋画、水彩

落合（歌川）芳幾（おちあい・うたがわ・よしいく/1833～1904年）
江戸生れ。1849年歌川国芳に入門。55年安政の大地震で吉原の惨状を錦絵に描き名をあげる。61年歌川国芳が没し、芳幾は遊女屋風俗などを描いて浮世絵師の第一人者のひとり。66年兄弟弟子月岡芳年との無残絵の競作「英名二十八衆句」が発行。72年「東京日日新聞」の発起人となり74年錦絵版『東京日日新聞』に新聞錦絵を書き始め、錦絵新聞流行の先駆け。87年春陽堂から刊行された『新作十二番之内』の口絵を描き、これが木版口絵のはしり。東京で没、72歳。幕末-明治の浮世絵師

落合ラン（おちあい・らん/1887～1938 年）
宮崎県生れ。1903年女子美術学校入学。11年東京体育専門学校卒の教師・落合円次郎と結婚。やがて帰郷して宮崎高等女学校の美術教諭を1年余り勤めた。再び上京し、本郷洋画研究所で岡田三郎助の指導を受けた。40歳の頃「花」が帝展に入選。1938年没、52歳。洋画

オチ　オサム（越智靖・おち・おさむ/1936～2015 年）
佐賀市生れ。1955，56年二科展入選。前衛芸術集団「九州派」結成に参加。62年読売アンデパンダン展に出品。66～69年渡米。70年福岡文化会館で個展。78年サンフランシスコの画廊で個展。山口県で没、79歳。（出典　わ眼）洋画、九州派

落田洋子（おちだ・ようこ/1947 年～ ）
浦和市生れ。1968年武蔵野美術短期大学商業デザイン科卒業。広告企画の仕事を経て、76年から油彩画を描き始める。78年六本木・青画廊で個展。79年銅版画を開始。個展やグループ展示会で作品を発表。82年『紅茶と海』でライプツィヒ国際図書デザイン展銅賞を受賞。銀座77ギャラリーを中心に個展。グループ展に「ポストコレクション展」（東京セントラル美術館）、「現代形象展」（ストライプハウス美術館）、「チバ・アートナウ'98」（佐倉市美術館）。洋画、版画、水彩

越智節昇（おち・ときのり/1929～2018 年）
愛媛県生れ。1951年東京第三師範卒（現学芸大学）。54年田崎広助に師事。53年一水会入選、63年佳作賞、68年会員、74年会員優品、77年委員、89年常任委員。67年日展入選、73、84年日展特選。77年日伯賞。77年愛知県立美術館で個展。2007年紺綬褒章。2018年没、89歳。洋画

音部幸司（おとべ・こうじ/1918～1985 年）
愛知県生れ。杉本健吉に師事し、1943年国画会展に入選。以後出品を続け、47年国画奨学賞、49年会友、53年会員。51年中部美術展最高賞、40年代中頃中部国際形象展出品。51～53年名古屋金城女子大学美術講師。名古屋市で没、67歳。洋画

尾内健治（おない・けんじ/1931～1999 年）
東京生れ。1947年都立大泉高校卒、水彩連盟展入選。56年武蔵野美術大学卒。春日部たすく、井上長三郎に師事。自由美術会員・主体美術協会会員、週刊読売表紙コンクール二等賞、自由美術佳作賞、外遊三回、「汐留駅構内」JR東日本収蔵、1992年池袋栗原画廊で個展・三回、1999年没、68歳。水彩

鬼塚金華（おにつか・きんか/1897～1985 年）
鹿児島県生れ。1914年愛知県瀬戸窯業高等学校卒。20年葵橋洋画研究所で森田恒友に師事。25年春陽会展入選。31～32年渡仏。33年春陽会展に滞欧作特陳、春陽会賞。47年春陽会会員。60年「三歳会」を結成。東京で没、87歳。洋画

小貫政之助（おぬき・まさのすけ/1925～1988 年）
東京生れ。1939年本郷洋画研究所。44 年太平洋美術学校卒。53年タケミヤ画廊個展。56～67年自由美術家協会会員。56年銀座・フォルム画廊個展。72年フジテレビギャラリー個展。78年銅版画集「小世界」をフジテレビギャラリーより刊行。東京で没、63歳。89年池田20世紀美術館で小貫政之助の世界展」。洋画

小沼かねよ（おぬま・かねよ/1905～1939 年）
宮城県生れ。1928年東京女子高等師範学校図画専修科卒。石川寅治に師事。30年帝展で特選。労働者を扱った社会性の強い画風のち、抽象へ展開。31年槐樹社展で田中賞。39年没。34歳。洋画

小野絵麻（おの・えま/1917～1997 年）
岡山県生れ。東京高等師範学校図案専修科卒。図画研究科助手。奈良、京都で教諭。戦後岡山県立高梁高等学校、操山高等学校で教諭。シュルレアリスムに影響、幻想的画風。1948年独立美術協会展入選。54年自由美術協会展出品。64年主体美術協会創立。蔵鵬会同人、審査員推挙、自由美術協会賞、同会会員、審査員推挙。主体美術協会会員、審査員。76年岡山女子短期大学教授、83年倉敷市立短期大学教授。1997年没、80歳。洋画、美教

小野川幹雄（おのがわ・みきお/1929～2001 年）
呉市生れ。東京農業大学卒。大学の授業で春日部たすくに指導を受ける。呉市市役所勤務。呉市美術展、広島県美術展で受賞。1956年水彩連盟展でみずゑ賞。92年呉市文化功労賞。呉美術協会役員。2001年没、72歳。水彩

小野木 学（おのぎ・がく・まなぶ（本名）/1924～1976 年）
東京生れ。油画を独学。1958年自由美術家協会会員。59年シェル美術賞展で第二席。61，62年パリ留学。65年から版画を制作。絵本も手掛け、70年小学館絵画賞。76年没、52歳。86年練馬区立美術館で「没後10年小野木学の世界展」。洋画、版画、絵本

小野具定（おの・ぐてい/1913～2000 年）
山口県生れ。1931年上京し、川端画学校で洋画を学んだ後、33年から日本画に転向。39年、東京美術学校日本画科卒。47年児玉希望に師事。54年から新制作協会展に出品、65年新制作協会会員。74年創画会結成、会員。95年練馬区立美術館で個展。千葉県で没、87歳。日本画

小野幸吉（おの・こうきち/1909～1930 年）
酒田市生れ。酒田中学校を中退、上京、1925年太平洋画会研究所に学ぶ。高間惣七、上野山清貢に師事。川端画学校に学ぶ。28年「一九三〇年協会」研究所に学ぶ。29年槐樹社展に出品、国際美術展に入選、「一九三〇年協会」展に入選。30年没、21歳。洋画、版画

小野耕石（おの・こうせき/1979 年～ ）
倉敷市生れ。2010年岡山県新進美術家育成「I 氏賞」奨励賞、14年 VOCA 賞。2006年東京藝術大学修士課程絵画専攻版画科修了。無数の細かなドットが並ぶシルクスクリーンの版を数十～百回刷り重ねることで立ち現れる「インクの柱」を用いた独自の表現を追求、支持体は平面のみならず動物の骨格など立体物にまで及ぶ。幾重にも刷り重ねることで生まれる多彩な色層表現は、展示壁面や床面全体を使ったインスタレーションにおいて、見る者の角度により様々な印象をもたらす。版画

オノサト・トシノブ（おのさと・としのぶ/1912～1986 年）
長野県飯田市生れ。現代美術作家。1931年津田青楓画塾に学ぶ。37年自由美術家協会結成、会友として参加。63年日本国際美術展で最優秀賞。64，66年ベニス・ビエンナーレに日本代表として出品。戦前戦後を通じ前衛美術の道を歩んだ。桐生市で没、74歳。（出典 わ眼） 洋画、版画

オノサト・トシノブ Ⅱ（おのさと・としのぶ/1912～1986 年）
長野県生れ。本名・小野里利信。1931年津田青楓塾に学ぶ。35年に黒色洋画展を結成。38年に自由美術家協会の会員となる。戦後のシベリア抑留を経て、48年に帰国後、桐生のアトリエでひたすら円を描き続けた。64年・66年にはベニス・ビエンナーレに日本代表として出品し、国際的にも高い評価を得た。戦前、戦後と盟友の瑛九とともに前衛美術を追求した。油彩作品のほかに、約200点の版画作品（リトグラフ、シルクスクリーン）を残した。（荒由）洋画、版画

小野杜堂（おの・しゃどう？/1840～1915 年）
愛知県生れ。画は百花園に通って渡辺小華に師事し、号は掃石。俳画をよくした。1892年豊橋町三代目町長。1906年の市制施行後の市長選にやぶれ、その後はいっさいの俗事をのがれ、俳諧書画の世界に遊んだ。1915年没、76歳。俳画

小野州一（おの・しゅういち/1927～2000 年）
北海道生れ。北海道立札幌第一中学校（現在の北海道札幌南高等学校）卒業後、上京し、独学で絵画を学ぶ。1961年北海道出身の画家と「北象会」を結。67年滞仏、パリに滞在。73～77年パリやヴェネツィ

アなど訪れる。80年「北海道立近代美術館賞。86年小学館絵画賞、サンケイ児童出版文化賞美術賞。2000年没、73歳。洋画、絵本

小野 末（おの・すえ/1910～1985 年）
新潟市生れ。新潟師範学校卒。1934年安井曾太郎の内弟子。38年一水会展に入選、43年一水会賞、46年一水会会員、50年アトリエ新人賞、56年安井曾太郎記念会の運営、理事、安井賞の評議員、運営委員。59年国際具象派協会創立に参画。60～63年渡欧、同40年東南アジア、エジプト、ギリシャ、同47、49、50年渡墨。72年無所属。78年東京セントラル美術館、梅田近代美術館で個展。82年芸術選奨文部大臣賞。東京で没、74歳。洋画

小野隆生（おの・たかお/1950 年～ ）
岩手県生れ。1971年渡伊、国立ローマ美術学校・フィレンツェ美術学校・国立ローマ中央修復研究所絵画科。77～85年イタリア各地の教会壁画や美術館収蔵作品の修復。76年銀座・現代画廊で初個展、銀座・G 池田美術、盛岡・MORIOKA 第一画廊、「ときの忘れもの」他で個展。資生堂ギャラリー「椿会展」出品。2008年には伊東の池田 20 世紀美術館で『描かれた影の記憶 小野隆生展 イタリアでの活動 30 年』展開催。テンペラ画手法による肖像画を一貫制作。洋画

350

小野忠重（おの・ただしげ/1909～1990 年）
東京生れ。1927年早稲田実業学校卒。本郷洋画研究所に学ぶ。29～33年プロレタリア美術展に出品。32年新版画集団を創立、37年新版画集団を改組し造型版画協会創立、主宰。41年法政大学高等師範部国語漢文科卒。46美術出版社で「洋画技法講座」「美術手帳」の編集。戦後は日本美術会の委員。独自の作風「木版陰刻」。63～77年東京芸術大学絵画科版画研究室講師。79年紫綬褒章。88年東京芸術大学芸術資料館で個展開催。版画史、版画の技法に関する著書も多い。東京で没、81歳。版画、美教

小野忠弘（おの・ただひろ/1913～2001 年）
青森県生れ。38年東京美術学校彫刻科卒。鳥海青児に知遇をうけ、油彩画を描く。50年自由美術家協会会員。73年福井県立三国高等学校を定年退職。79年東京セントラル美術館で個展。80年小田急グランドギャラリーで個展。85年福井県立美術館で「隕石・縄文・写楽の系譜小野忠弘展」。ジャンク・アート。2001年没、89歳。洋画、彫刻、ジャンク・アート、美教

小野田實（おのだ・みのる/1937～2008 年）
満州生れ。元永定正の紹介により1965年に具体美術協会に加わる。「Gutai: Splendid Playground」グッゲンハイム美術館（ニューヨーク、2013年）、「具体 - ニッポンの前衛 18 年の軌跡」国立新美術館（東京、12年）、「具体 回顧展」兵庫県立美術館（神戸、04年）、「日本の美術 よみがえる 1964」東京都現代美術館（96年）、「具体美術展」デザインハウス（ロッテルダム、67年）、「現代美術の動向 - 絵画と彫刻展」国立近代美術館京都分館（65年）、「第 16 回具体美術展」京王百貨店（東京、65年）などのグループ展に参加。2004年に姫路市美術館企画で個展「小野田實の世界」が開催。2008年没、71歳。洋画、具体

小野竹喬（おの・ちっきょう/1889～1979 年）
岡山県生れ。京都に上り竹内栖鳳の門へ入る。その革新的な制作姿勢に触れる。セザンヌなどの西洋近代絵画、富岡鉄斎などの南画の影響を受ける。1911年文展入選、後 4 回の入選。1918年土田麦僊らと「国画創作協会」を設立。1921～22年渡欧。帰国後には日本画の素材を素直に活かした大和絵表現にいたる。晩年には松尾芭蕉の「おくのほそ道」の絵画化に情熱を傾ける。また水墨画の持つ精神性への模索を続け、生涯己の可能性を追求し続けた。1976年文化勲章。京都市で没、89歳。岡山県に笠岡市立竹喬美術館。日本画、版画、「国画創作協会」を設立

小野竹喬 II（おの・ちくきょう/1889～1979 年）
岡山県生れ。1903年竹内栖鳳に師事、11年京都絵画専門学校卒。初め文展に出品、18年土田麦僊らと国画創作協会を創立し，同会に出品。28年同会解散後は官展に復帰した。穏やかな色彩と精密な描写で新しい風景画を開拓。76年文化勲章。京都市で没、89歳。岡山県に笠岡市立竹喬美術館がある。日本画、版画

オノデラユキ（おのでら・ゆき/1962 年～ ）
東京生れ。桑沢デザイン研究所卒業。独学で写真を学ぶ。1992年キヤノン写真新世紀優秀賞。93年パリに拠点を移す。フランスで最も権威ある写真賞「ニエプス賞」を、田原桂一以来 2 人目の受賞。主な作品シリーズに、空を背景に古着を写す「古着のポートレート」、箱型カメラの内部にビー玉を入れて群衆を撮影した「真珠の作り方」、スウェーデンとスペインにある同じ地名の二つの街をステレオカメラの左右のレンズで写した「Roma-Roma」。96年写真批評家賞 KODAK 審査員特別賞受賞（仏）。2002年日本写真協会新人賞。06年ニセフォール・ニエプス賞（仏）、1

1年写真展『オノデラユキ写真の迷宮へ』で芸術選奨文部科学大臣賞、第27回東川賞国内作家賞。写真

小野藤一郎（おの・とういちろう/1898～1958年）
1898年生れ。1922年東京美術学校西洋画科卒。42年一水会展で具方賞。43年新文展無鑑査。46年一水会会員。46年大阪市立美術館付属美術研究所教授。新世紀美術協会会員。1958年没、60歳。洋画

小野彦三郎（おの・ひこさぶろう/1912～1971年）
宮崎県生れ。1938年帝国美術学校卒。大久保作次郎に師事。42年文展入選、42年創元展創元賞。49年日展特選。53～54年政府留学生として渡仏。58年創元会退会、十一会結成参加、創立会員。その後、十一会も脱会して無所属として活動、毎年個展開催。65、66年宮崎県展審査員。1971年没、59歳。洋画、版画

小野彦三郎 Ⅱ（おの・ひこさぶろう/1912～1971年）
宮崎県生れ。1938年帝国美術学校本科西洋画科卒。大久保作次郎に師事。41 年第 1 回創元会展で創元賞。十一会会員。42 年第 5 回新文展に初入選。46 年第 2 回日展から出品を続け、49 年第 5 回日展で特選。50 年第 6 回日展から依嘱出品。53 年政府留学生として渡仏。55 年帰国。57 年創元会退会。無所属。64 年日本橋高島屋で個展。65 年宮崎県展で審査員。71 年 8 月 12 日没、享年 59 歳。(佐)洋画、版画

小野二三（おの・ふみ/1915～2008年）
大阪生れ。1930年奈良県女子師範学校一部に公費生入学、同学校美術専攻科。37年に大阪市の都島小学校で教える。高梁市に疎開し、絵画教室を始め、また新見高等学校の美術教師として勤務。60年岡山市へ転居し、子供向け、大人向けの絵画教室を97年まで続けた。2008年没、93歳。洋画、美教、画塾

斧山萬次郎（おのやま・まんじろう/1900～1988年）
福岡県生れ。開成中学入学、葵橋洋画研究所に入り、黒田清輝に師事。1925年帝展入選、光風会にも入選、受賞、46年会員。43年帰郷、筑豊の洋画界におけるリーダー的な存在として、多くの画家を指導した。黒田の最後の弟子の一人で、師匠譲りの外光派的画風を得意とした。1988年没、88歳。洋画、美教

オノ・ヨーコ（おの・ようこ/1933年～ ）
東京生れ。学習院大学哲学科中退。1952年アメリカへ渡り，55年サラ・ローレンス・カレッジ卒業。56年に作曲家一柳慧と結婚、J.ケージらとともにハプニング（パフォーマンス）などの前衛芸術運動に参加、美術を中心に多彩な活動を行っている。著書に《ただの私》、詩集《グレープ・フルーツ》がある。一柳との離婚後，69年 J.レノンと行った音楽活動や。69年平和運動イベント〈ベッドイン〉が知られる。参考;フルクサス運動の提唱者ジョージ・マチューナスはオノの作品を高く評価。オノと共にフルクサスを広めようと考えていたが、オノはフルクサスをムーブメントだとは認識していないアーティスト。前衛芸術家、パフォー

小圃千浦（おばた・ちうら/1885～1975年）
岡山県生れ。土佐派の邨田丹陵に師事。1903年渡米、シスコで日系地方紙や雑誌に挿絵をかく。28年個展開催、32年カリフォルニア大バークレー校美術教授、日本画をおしえる。第二次大戦中の収容所生活「タンフォラン美術教室」、「トパーズ美術学校」の開校をへて、戦後復職。1975年没、89歳。日本画、挿画、版画、美教、画塾

尾花成春（おばな・しげはる/1926～2016年）
福岡県生れ。県立浮羽中学卒。1950年自由美術展に出品。52年福岡県展で受賞。57～65年九州派へ参加。九州アンデパンダン展、読売アンデパンダン展に出品。59年シェル美術賞展で佳作。九州・現代美術の動向展、芸術の可能性展に出品。オブジェ制作。福岡県で没、90歳。洋画、九州派、オブジェ

小原古邨（おはら・こそん/1877～1945年）
金沢市生れ。花鳥画を得意とする日本画家・鈴木華邨に師事。1899年日本絵画協会主催展覧会第7回共進会展で三等褒状、第9回展で2等褒状、第10回展で2等褒状、第11回展で2等褒状を、第12回展で2等褒状。1903年高橋鐵太郎著『海洋審美論』挿絵。明治末期には版元・大黒屋から花鳥画を刊行し、海外への輸出を念頭に置いた版下絵の制作で高い人気を得る。昭和期には渡邊版画店から祥邨の名で、また酒井好古堂と川口商会の合版では豊邨の制作を続けた。東京で没、68歳。2001年アムステルダム国立美術館大規模な回顧展開催、同館所蔵の日本画及び木版画180点展覧。日本画、浮世絵、版画

小原古邨（祥邨） Ⅱ（おはら・こそん（しょうそん）/1877～1945年）
画号は古邨、祥邨、豊邨。鈴木華邨のもとで日本画を学んだのち、肉筆花鳥画を制作。その後フェノロサのすすめにより、輸出用の木版花鳥画も手がける。叙情的かつ繊細に描かれた花鳥画や、ユーモラスな表

情をとらえた動物画は、当時ヨーロッパで特に評価された。1945年没、68歳。日本画、浮世絵、版画

小原雄二（おはら・ゆうじ/1906～1987 年）
福岡市生れ。1932年東京美術学校西洋画科卒。41年独立美術協会展で協会賞、43年同会会友、48年会員。福岡市で没、80歳。洋画

小尾　修（おび・おさむ/1965 年～　）
神奈川県生れ。1988年武蔵野美術大学造形研究科卒、90年同大学大学院造形研究科修士課程美術専攻油絵コース修了。99年春風洞画廊（東京）で個展、同年白日会文部大臣奨励賞、2006年白日会内閣総理大臣賞。04年前田寛治大賞展準大賞。（日本橋高島屋・倉吉美術館）。10～11年文化庁新進芸術家海外派遣制度研修員パリにて研修。洋画

小見辰男（おみ・たつお/1904～1983 年）
群馬県生れ。1930年東京美術学校西洋画科卒。創元会会員。1983年没、79歳。洋画

小見寺八山（おみでら・はちざん/1889～1934 年）
新潟県生れ。1907年警視庁勤務の傍ら太平洋画研究所に学ぶ。22、23年渡欧。24年太平洋展で太平洋画会賞。25年大阪の「精芸社」同人。26年国展に出品。28，29、30、33，34年帝展入選。29年太平洋画会会員。奈良で没、45歳。志賀直哉小説のモデル。洋画

小村大雲（おむら・たいうん/1883～1938 年）
島根県生れ。1903年山元春挙に師事。12年文展で第 2 科 3 等賞 6 席に入賞、以後 3 年連続入選、16年文展で特選、以後も特選、無鑑査。19年帝展で推薦」、永久無鑑査となり、以後ほぼ毎年作品を出品し、委員、審査員を歴任。35年明治神宮に壁画「京浜鉄道開業式行幸図」完成。1938年没、54歳。日本画

小茂田青樹（おもだ・せいじゅ/1891～1933 年）
埼玉県生れ。17歳で上京、松本楓湖の「安雅堂画塾」に入門。速水御舟も入門。1914年今村紫紅が主宰する赤曜会に参加。15、18年再興院展に入選。21年再興院展に洋画的な手法と細密表現の際立つ作品で横山大観らに推挙され日本美術院の同人。29年杉立社を組織、帝国美術学校教授。神奈川県で没、41歳。日本画、美教

小山　硬（おやま・たかし/1934 年～　）
熊本県生れ。1961年東京芸術大学日本画科卒、63年同専攻科修了。61年院展入選、63年日本美術院院友。70年院展で春季展賞、同年院展で奨励賞。71、78年大観賞。81年文部大臣賞受賞。山種美術館賞展、シェル美術賞展、現代美術選抜展出品・受賞。77年海外研修員滞欧。日本美術院同人。愛知県立芸術大学名誉教授。日本画、美教

小山田二郎（おやまだ・じろう/1914～1991 年）
中国生れ。帝国美術学校図案科、西洋画科中退。独立展、美術文化展に出品。自由美術家協会会員。日本国際美術展、現代日本美術展等に出品。1957年サンパウロ・ビエンナーレに出品。1991年没、77歳。（出典　わ眼）洋画、水彩

小山　正（おやま・ただし/1949 年～　）
北九州市生れ。1970年「九州野外彫刻展」に出品。72，73年福岡県文　化会館個展。76～77年パリ滞在。86年米政府の招待で渡米。87～89年ソウル滞在、韓国作家との交流を深め、90年共同展「CAPPING」開催（目黒区美術館）。2001年「大阪ハナ・マトッリ児童絵画展」（大阪ドーム）を企画開催。洋画、彫刻

尾山　幟（おやま・のぼり/1921～1995 年）
北海道生れ。1945年多摩美術学校日本画科卒。51年日展に入選、52年日展で特選・朝倉賞。55年日展で特選・白寿賞。同展の審査員、会員、評議員となった。東京で没、74歳。日本画

及部克人（およべ・かつひと/1938 年～　）
東京生れ。1962年東京芸術大学卒。67年六月劇場のポスターを制作。72年劇団状況劇場公演「二都物語」ポスターを制作。劇団状況劇場公演「鐵假面」ポスターを制作。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科教授。＊2009 年退任し、名誉教授。東京工科大学デザイン学部教授。ポスター、デザイン、美教

オーライ　タロー（おーらい・たろー/1963 年～　）
宮崎市生れ。1988年武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵専攻修了。95年銀座・ゆう画廊個展。97～2003年銀座・ゆう画廊「武蔵野ビジュツ団」グループ展。99～03年銀座・ギャラリーLaMer 個展。01～05年ギャラリーツープラス個展。07年アスクエア神田ギャラリー個展。洋画

折登朱実（おりと・あけみ/1960 年～　）
北海道生まれ。1990～2009年春陽会展に出品。99 年、春陽会会員推挙。03年水彩人第 5 回記念展に招待出品。03～08年個展（ギャラリーURANO）。洋画

折元立身（おりもと・たつみ/1946 年～　）
川崎市生れ。1971年カリフォルニア・インスティテ

ュート・オブ・アート卒。NY に移住、ビデオ・アートのナム・ジュン・バイクの助手。フルクサス・グループに参加。77年帰国。91年サンパウロ・ビエンナーレ出品。2000年原美術館で個展。01年ヴェネツィア・ビエンナーレや横浜トリアンナーレに出品。パフォー、造形、現美、フルクサス

恩田秋男（おんだ・あきお/1924～2007 年）
東京生れ。1956年武蔵野美術学校西洋画科卒、独立美術協会展出品。63～68年母校武蔵野美術大学講師、棟方志功の助手。67～87年個展（東京京王百貨店1回、小田急百貨店・新宿13回、養清堂画廊・銀座 9 回他）。76～78年大本山永平寺『傘松』誌の表紙・78年『一茶の四季』（信濃毎日新聞社刊）。99年『恩田秋夫木板画集』（有斐閣刊）。2007年没、83歳。版画、美教

恩地孝四郎（おんち・こうしろう/1891～1955 年）
東京生れ。版画家、装幀家・詩人。1910年東京美術学校入学。14年藤森静雄、田中恭吉と同人誌『月映』を刊行。31 年日本版画協会の創立に参加。51年第一回サンパウロ・ビエンナーレに出品。53年岡本太郎らとアートクラブ結成。東京で没、63 歳。（出典わ眼）版画、装幀

恩地孝四郎 Ⅱ（おんち・こうしろう/1891～1955 年）
東京生れ。1909 年独逸協会中学校卒。14 年東京美術学校洋画部中退。田中恭吉らと、詩と版画誌「月映」創刊。18 年日本創作版画協会創立、会員となる。27 年第 8 回帝展に版画を出品し初入選。以後、9, 10 回展に出品。31 年日本創作版画協会改組、日本版画協会員となる。36 年国画会版画部会員。51 年サンパウロ国際美術展に出品。52 年日本橋三越で個展開催。53 年日本アブストラクト・アート展に出品。55 年 6 月 3 日東京で没、享年 63 歳。（佐）版画、装幀

恩地孝四郎 Ⅲ（おんち・こうしろう/1891～1955 年）
東京生れ。竹久夢二に感化を受ける。1910年東京美
術学校に入学し、洋画・彫刻を学ぶも中退。美術学校で出会った藤森静雄・田中恭吉とともに詩と版画の同人誌「月映（つくはえ）」を刊行。その木版画群は日本における抽象表現の先駆的作品として高く評価。また、萩原朔太郎の詩集「月に吠える」をはじめ、書籍の装幀で装本家としての地位を獲得し、多くの装幀本を残した。一方、創作版画運動に参画するとともに、日本の版画界のリーダーとして大きな足跡を残した。彼は伝統的な技法にこだわらず、常に実験的な姿勢で作品制作に取り組み、多くの現代美術につながる魅力的な作品を残した。戦後、それらの作品の多くが海外のコレクターに蒐集されたため戦後の代表作が海外の美術館に収蔵されている。東京で没、63 歳。（荒由）版画、装幀、写真、詩人 379